

---

# 円城寺まどかの悪文排斥！

円城寺まどか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

円城寺まどかの悪文排斥！

### 【ZPDF】

Z2128S

### 【作者名】

円城寺まどか

### 【あらすじ】

三流物書き、円城寺まどかが尊大な態度で小説を語る。

スローガンは「悪文排斥」。良い小説、上手い文章とは何かを考察します。

## 第一回 はじめに

どんな世界にも「コーチ魔」という奴がいる。自分の実力は大したことないくせに、初心者を見つけては聞いてもいない講釈を垂れる。しかもその解説は解りやすいとは言い難く、間違つてはいないのでけれども持つて回つた言い方をする。

「要はこういうことだよね」

と一言で済むことを、要領と頭が悪いせいで延々一時間ぐらいかけて喋るのだ。小説に例えれば、原稿用紙五十枚で済む短編を、構成力がないせいで二百枚かけて書くことに似ている。教える本人は気持ちいいのかもしれないが、こんな奴に教授される方はたまつたものではない。

はつきり言つて災難以外、何ものでもない。

もちろん小説の世界にも「コーチ魔」は存在する。しかし本当の実力者、公募の選考に残るような人ほど低姿勢で、偉そうなことは一言も言わず、批判に対しても「勉強になりました」と、真摯な態度を見せる。そして、ただひたすらに「小説を書く」。

本当に話を聞きしたいのはこういう方たちなのに、「いや、未熟者ですから」と、どこまでも奥ゆかしく、その奥義を語ってくれようとしている。他者の小説には愛情を持つて接し、長所を見抜く審美眼に長けている。

とてもかつこいいし、憧れるが、凡人には中々真似できない。

反対に才能のない奴は、「俺のような天才の作品を理解できる奴など誰もいない」と、自分の作品は公表せず、他人の小説に対しては常に上から目線で「ここが悪い、あそこがいけない」と、批判を繰り返す。しかもその指摘はほとんど挙げ足取り。

非の打ち所のない素晴らしい作品には、感想欄に誤字、脱字の指

摘要だけを残す。まるで五百円の申告漏れを見つけた新米税務署員の如く自慢気に。

「ううううことを、誰彼構わず手当たり次第にやる。

プロ志向でもない、ただ単に趣味で楽しんで書いているだけの人今まで「そんなことでプロになれるか!」と、自分がプロでもないくせに言う。

みんなでわいわいボーリングを楽しんでいるときに、

「今、ライン踏んだからファールだよね」

と、得意気に言う奴と同じだ。心が狭くて友達がいなくて、会社で決して出世しない。

そしてまた、実力がない奴ほど精神論が大好き。

「おまいにとつて小説つて何?」

「小説つてのは文芸、文章の芸術なんだよ!」

「　　の最近の作品はさあ……」

小説に対する愛情はあるのに、才能には恵まれなかつた残念な人。得てして小説における「コーキ魔」は、こんな奴だ。非常にかつこ悪い。こんな大人になつてはいけない。

しかしこのエッセイの著者、「円城寺まどか」は、こんなみつともない大人である。尊大な態度で理論を語る。才能溢れる皆様、どうか嘲笑をこらえて読んでやってください。

## 第一回 視点ってなんだ？（視点講座 その②）

まずは、小説の技術としては基本中の基本、視点について。

「視点って何？」とか言わないように。要は物語をどこから、誰の目を通して見ているのか。別の言い方をすれば、「物語における作者の立ち位置」ということです。映画のカメラワークとはちょっと違うので、映像をイメージすると勘違いの元となります。

小説においては、ひとつずつ事件を目の前にして、視点が違えば物語そのものが違ってくるというなかなか重要なものです。

えーっと、まず、視点というのは、大きく分けて一人称と三人称があります。（二人称というのもあるけど、普通は使わないからパス）。一人称というは、「ぼくは」というやつで、読者は主人公として世の中を見ています。

利点としては、主人公により深く感情移入させられることと、視点の乱しよがないという点で初心者にとつても書きやすいこと。欠点は、主人公が嫌いな読者にとつては物語そのものに入り込めないことと、一人が見聞きする世界には限界があり、長い物語には向かないことです。

つまり、

『一人称は主人公が知覚すること以外、書けません』

じゃあ主人公がいない場合はどうするのだという人がいますが、馬鹿を言っちゃあいけません。

『一人称小説において主人公がいない場面など無い』

のですよ。だってあなたがこの世から消え去ることなどないでし

よう？ 気絶したり寝てたりしたら、世界のことはわからないのです。「ぼく」は、「ぼく」としてしか、世界を見ていません。

だいたい、より深く主人公に感情移入してほしいから一人称なのに、他者の視点に切り替わってしまつたらそもそも一人称で書く意味がありません。

まあ、「表現の自由」なんて言葉を出されたら何も返せないので、とりあえず「公募作品においてはこうした方がいい」という話に限つておきましょう。くれぐれも、主人公が気絶したら、あれれ三人称になつちゃつた、という離れ業を演じてはいけません。（なぜ一人称と三人称の混合が禁じ手なのかについては次話にて説明します）

一元視点だの多元視点だのという言葉があるようですが、難しいことはよくわかりません。私にとつて視点なんてものはあまりに当然のこととして身についているので。どうしてわからないのかがわからないという代物なんです。

というわけで、実践でいきますね。シチュエーションとして、「なろう」における恋愛ファンタジーの金字塔、『センロノハテニ』より。カシアンがミハルに愛の告白です。

ちなみに作品の著者である日比谷碌樹先生の許可は取つてあります。

#### ・カシアンの一人称

「え？」

ミハルが驚きの声をあげて私を見た。

向けられた眼差しの中には、驚愕と恐怖、そして嫌惡の色が渦巻いている。彼女に責ざめて震えている私はどんなふうに見えたのか。その不安は激昂となり、私は思わず声を荒げた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、

ミハル」

・ミハルの一人称

「え  
？」

あたしはびっくりしてカシアンを見た。

カシアンの細い、整った顔は蒼ざめ、ひきゆがんでいた。その両拳がにぎりしめられ、わなわなと震えているのをあたしは見てしまつた。ただならぬ雰囲気に恐怖を感じ、思わずあとずさる。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

あたしは言葉を失つた。

・三人称・神の視点

「え？」

ミハルが叫んだ。

カシアンは青ざめ、引きつった顔でミハルを見つめた。その両拳は堅くにぎりしめられ、かすかに震えている。ミハルは呆然と口を開いたまま、怯えた表情で一步あとずさつた。それがいつそうカシアンを激昂させたかと見えた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

・三人称・ミハルの視点

「え？」

ミハルは思わず叫んでいた。

カシアンは青ざめ、引きつった顔でミハルを見つめていた。その両拳はにぎりしめられ、わなわなと震えていた。ミハルは恐怖と嫌悪を感じ、怯えて一步あとずさつた。しかし、それがいつそうカシアンを激昂させたようだった。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、

## ミハル

・三人称・カシアンの視点

「え？」

ミハルは叫んだ。

カシアンは自分が青ざめ、ひきつった顔をしているのをはつきりと感じながら両拳をかたくにぎりしめた。ミハルが怯えたように一歩あとずさる。それは、カシアンに対する明らかな拒絕に他ならなかつた。そして、それがカシアンをいつそう激昂させた。

「何回言わせるんだ。私はおまえが好きなんだ。愛しているんだよ、ミハル」

一人称は問題ないですね。三人称を解説しましょう。

?ミハルは「怯えた表情」で一歩あとずさつた。それがいつそうカシアンを激昂「させたかと見えた。」

?ミハルは「怯えて」一歩あとずさつた。それがいつそうカシアンを激昂「させたようだつた。」

?ミハルは「怯えたように」一歩あとずさつた。それがいつそうカシアンを激昂「させた。」

?の三人称・神の視点の時は、全ての人物の内面に立ち入るか、誰の心理にも立ち入らず、外側で止まります。全ての人物に入り込むと、大抵は誰が誰だかわからなくなってしまうので、主人公を含めて外側で止まることを選択した方が無難です。

で、外側で止まると「怯えた表情」はどこからでも見えますし、激昂「させたかと見えた。」で、見ているのは作者と読者です。第三者には、他人の内面を断定することはできません。

?では、ミハルは「怯え」を感じた。しかしカシアンの激昂は、ミハルの目を通してしか読者には見えません。だから「よつだつた」になります。

反対に?では、ミハルが「怯えたように」カシアンの目を通して見え、それがカシアンを「激昂させた」わけです。

『ミハルは怯えてあとずさつた。それがカシアンを激昂させた。』

これが視点の乱れです。このシーンをいつたい誰の目を通して見ているのか、誰に共感すればいいのか、読者は混乱して「誰が誰だかわからない現象」を引き起こします。

「」の視点は、中・短編では変えてはいけません。一人称の作品は、たとえどれだけの長編でもダメです。

補足として、一人称で主人公のいない場面を書きたい場合は、『これはあとから知ったことだけど』とか、人から聞くなど、伝聞形にしておきます。ただ、これでさえ効果を計つて使わないと物語が興醒めしてしまいます。

とにかく一人称である限り、その人のいないところは書けないし、能力以上のことは見聞き経験することはできません。

「三人称・人物視点」では、きちんと章立てし、その章ごとに視点が変わることは許されます。（ひとつつの章の中で変わるのは避けるべきです）

「」の方法は、

・原稿用紙100枚以上の長編である」と。

- ・ひとつの章で決して視点が乱れない、視点に関する知識と技術を習得していること。

- ・主人公をはつきりさせた上で、完全に性格心理のくつきりした人物の書き分けができる筆力のこと。
- ・これを効果をはかつて使える構成力のこと。

が、条件になります。また、主人公のいる場面は「三人称・主人公の視点」、主人公がいない場面は「神の視点」というのもOKです。

章立てごとに主人公が変わる三人称を「複数主格三人称」と言います。（流行の言葉で言うとこれが「多元視点」というやつでしょうか。）これが有効なのは、恋愛要素を含む小説で男女のすれ違いを際立たせるときや、その時々の「決断」を描かねば面白くならない戦記物などです。

この「三人称・人物視点」は別名、「疑似三人称」とも言われ、事実上、一人称の延長でしかありません。「ぼく」や「私」を「彼」、「彼女」に置き換える+で事足りるので、一人称が書ければ「三人称・人物視点」は容易に書けます。もちろん一人称と同じく「主格となる人物が知覚すること以外は書けない」というルールが適用されます。簡単である分、制約も多いです。

「事実上一人称である『三人称・人物視点』が、章立てごとに語り手を変えてOKなら、一人称だつて章立てごとに主格となる人物が変わつてもいいじゃないか！」

と言われそうですが、まさしくその通り。本来、これを良しとするが、その意見に反論できなくなってしまいます。（だから本当の三人称ではないという意味で、「疑似」という否定的な言葉がつきます。）

ただ、一人称と違うのは、「主人公=語り手」ではなく、第三者、

つまりは「主人公の目を通して語る別人」でありますから、読者に違和感を与える事実はあるにしても、その立ち位置を変えることは許されるのです。（その条件は前述した通りです）

もつとも難しいとされる「三人称・神の視点」。（または「純正三人称」）

神の視点が難しい理由として、人物の心理がそのまま書けないということが挙げられると思います。しかしながら、「内面に入り込まないと心理は描けない」は誤りで、「まるで」と言いたげにや、「さも」と言わんばかりに」という推察+表情や行動で、いくらでも描くことができます。

さらにはこれに台詞が加わることで、充分すぎる心理描写が可能です。（もつとも、これを可能にするためにはかなりの筆力を要しますが）

これは一人称においても重要なことで、初心者の一人称小説にありがちな「主人公が他者への感心が無く、キャラクターがただの記号と化している」ということを避けるためにも必須の技術です。

神の視点は、物語との距離感と言いますが、誰に対しても同じ立ち位置で語るため、主人公のいない場面でも読者に違和感を与えることがあります。別の言い方をすれば、神の視点とは「私は」と名乗らない作者の一人称とも言えます。

というわけで、あまりの上から目線にさつそく皆様の不快感が募つてきたようなので、一旦この辺りで終わりにします。次回は人称と視点の続き、「なぜ一人称と三人称を混合してはダメなのか」を専大に語ります。

## 第三回 混合人称はなぜダメか（視点講座 その？）

一人称と三人称を混合してはいけません

ラノベを筆頭に混合人称の作品が溢れる昨今、こいつは何を言っているんだと思う方もいるでしょう。実際、ラノベ作家を養成するスクールでも「混合人称、および章ごとに語り手が変わる一人称はOK」と教えるらしく、古くから小説に親しんできた者は戸惑うばかりです。

私としては、せっかく高い志を持ちながら、どうかそんな低レベルな現状に迎合しないでほしいと願うばかりですが。

なぜ混合人称はいけないのか。なぜそこまで否定するのか。

説明しましょう。

小説というのは、読者が手に取った瞬間、作者との間に暗黙の了解とも言えるある契約をかわします。それは、

『読者は作者が提示した設定を無条件で受け入れる』

ということです。この契約をかわすことによって、小説は小説として成立します。

一人称で始まる、つまりは読者に、「あなたはこの世界の主人公ですよ」と言つておいて、突然視点が変わる、別の人格になるなんていうのは、読者に対する一方的な裏切りになります。

現実の世界だって、「自分」として生を受けながら、その生をまつとうしようと一生懸命生きてきたのに、もしもある日別人になってしまつたら神を恨みますよね。これは魂が別人に乗り移つたのとは違つて、人格も別人になつたらと考えてみてください。そんな不条理は許されないので。そして、そんなことは決してあり得ません。それが「筋」というのです。現実の世界だって小説だって、

一番大切なことは「ちゃんと筋が通っている」ということです。一人称で始まつておきながら突然別人の視点に切り替わってしまうという筋の通らない作者の裏切りに対し、読者は「わからない。理解不能」をもつて答える以外にありません。（普通はね）

つまり、章立てごとに語り手を入れ替わる複数主格一人称や混合人称は、小説として成立しないのです。

もうひとつ心情的な理由を挙げるなら、読者はそんな都合のいいものではないということでしょうか。

小説を綴る「言葉」というのはなかなか不便なもので、作者のイメージは読者に百パーセント伝わりません。よく言われることですが、同じ景色を見て、みんな同じように「美しい」と言ったとしても、その感動をそのまま表す言葉、「どう美しいか」を表現することは不可能です。

「言葉はまるで六色のクレパスのよう」とは、某直木賞作家の言葉ですが、文章というのは、どうしても誤解や齟齬を生んでしまいます。そこを読み解くのも小説の面白さのひとつなのですが、語り手はなるべくわかりやすく、誤解のないようにイメージを伝えなければなりません。比喩もそうですが、視点だって読者にわかりやすく伝えるための技術なのです。

その技術は昨日、今日できあがつたものではなく、先人たちが「どうすれば読者に自分のイメージを正確に伝えられるか」を、試行錯誤して確立されたものです。それをやってみようともしない、できもしないうちから「小説にルールなどない」と否定し、表現の自由を標榜するのは、あまりに横着、思い上がりがすぎるのではないか。常識の無い人に常識を打ち破ることはできませんし、基礎がない人に、基礎以上のことはできません。

凡人には理解不能の絵を描くピカソだって、基本のデッサンは誰よりも上手いのです。

また前述のとおり、そもそも客観記述であつてもいくらでも内面

を描写することができるのに、なぜわざわざ読者に違和感を与えてまで視点を変更しなければいけないのか。単純に自分の技術不足を糊塗しているだけのように思えて仕方ありません。

実際、混合人称が（少なくともラノベにおいて）許されるようになってしまった背景には

「ラノベしか読んだことのないラノベ作家に統一人称で書けと言つてもできない」

「読者も客観記述から内面を推察できる『読み解く技術』がない」「もはや誰もそんなことを求めなくなつた」という経緯があるようです。

そんなことを言つたって、私はあの人気持ちは、この人の気持ちはわかつて欲しい。そしてすべてをひつくるめて私の小説世界に共感してほしい。

……その心情はわかりますが、無理です。読者は物語のたつた一人に感情移入することにより、共感と理解を深めます。あれもこれも詰め込んでは、結局何も伝わりません。作者が思っているほど都合良く、読者は心を動かしません。だから混合人称は論外にしても、三人称であつてさえ視点は（せめて初心者のつちは）ひとつに統一した方が無難なのです。

こういふことを言つと、「プロはやつている、そういう小説がある」という人がいますが、すでに評価の固まつたプロと、これから一作、一作が世に認められるかどうかを問うアマチュアの作品は別物です。

それこそ「小説にルールはない」わけで、上手い人は何をやつたつていいんです。

「三人称・神の視点を含め、客観的に心理を描写するなんてできない。難しいし、面倒くさい」

これが混合人称を使う人の本音ではないでしょうか。

とは言つても現実は低きに流れ、プロでさえ「三人称・神の視点」が書けない人がいるようです。実際、出版されている小説のほとんどが、さすがに一般文芸において混合人称はないにしろ「三人称・人物視点（複数主格）」ですし。

そう考えると、この理論はもはや時代錯誤なのかもしませんね。

## 第四回 プロっぽいと言われる文章（文章作法）

今さらですが、このエッセイの方向性として、小説における文章を考察しておこうと思います。「プロットの立て方」や、「面白いストーリー」、「伏線の張り方」というのは、このエッセイでは触れません。円城寺まどかはストーリー作りに不自由な人なので、そういうものは逆に教えを請いたいぐらいです。

さて、その小説における文章ですが、日本では識字率が高く、文字が書ければとりあえず文章が書けるせいで、「小説なんて誰でも書ける」という誤解がはびこってきました。

特に最近はその技術がないがしろにされ、「面白ければ文章のウマヘタは関係ない」という風潮があるようです。

しかしながら、小説を書くには技術が必要ですし、誰でも書けるものではありません。「プロ作家」という職業があるとおり、難しいからプロが存在するのです。誰でもできるようなことにはプロは存在しません。

ことに小説のプロは、相撲や将棋の世界と同じく、「どんな一流のアマチュアも、その技術は決して三流プロにはかなわない」のであります。（最近はそうでもないかな……）

小説において文章は、大切な要素ではあるのだけれども絶対ではありません。ゴルフに例えるならドライバーショットでしょうか。飛ぶに超したことはないし、飛べばプレーの幅が広がるし、華がある。けれどもスコアとは関係ない。小説では、文章が上手ければ何かと便利だし、文章力がない人よりは、あつた方が執筆はずつと樂になります。けれども文章の上手い小説が良い小説ではないし、文章のヘタな小説が悪い小説でもありません。

ただ、「面白ければ文章のウマヘタは関係ない」と主張する人の小説が面白かった試しがないことも事実です。  
なぜでしょう？

例え空前絶後のストーリーを思いついたとして、それを伝えるためには最低限のリアリティというものが必要になってしまいます。それがあり得ないような話であればあるほど、リアリティを持たせるための文章力は高いものが求められるのです。（だから現実にあり得ない世界のＳＦやファンタジーは、エンターテイメント小説として最高に文章力を求められるジャンルなのです）

### なぜ小説にリアリティが必要なのか

先程も申しましたが、リアリティの感じられない世界に、誰も自分の身に置き換えて共感しないからです。このご時世に大変恐縮な話題ではありますが、「大地震の恐怖」という話であれば、誰がどのように書こうと、現在ならばいつ自分が被災してもおかしくないリアルな話として、自分のこととして恐怖を感じます。

しかし、これが「宇宙人が侵略していくる」という話ならどうでしょう。確かに物語としては面白いかもしれないけれど、いったい誰がそんな話を我が身に置き換えて「怖い」と感じるのでしょうか。これを「大地震の恐怖」と同じレベルで感情移入させるには、それこそ並大抵の文章力では不可能です。つまり、いくら素晴らしいストーリーを思いついたとしても、それを小説で表現したいのならば最低限の文章力がなければ誰からも見向きはされません。

ちなみに物語において「もつとも面白い話」は、「もつともよくある話」であります。面白いからあの手この手で語られ、よくある話になつてきました。しかしながらこいついう決まり芝居を、「もつとも面白い話」にするためには、独創的な物語を書くよりもずっと高いレベルの技術が求められるのです。

というわけで、繰り返しになりますが小説において文章は絶対ではないけれども大切な要素です。物書きならば誰もが卓越した文章力を身につけたいと思うのですが、残念ながら世の中には「文章の上手い人」と「文章のヘタな人」が存在します。どうすれば上手い文章が書けるのか。

誤解を恐れず衝撃的なことを言いますが、

『文章は才能が大きく左右するので、本質的に上手くなりません』

「そんなことはない！」

「修練すれば絶対に上手くなる！」

きつと皆様そう思われるでしょう。私もそのように信じています。でも文才というのは生まれ持つた才能、センスであって、容姿と同じで美男、美女もいれば、どうしてもその……という人もいるのです。上手い人は最初から上手いし、センスのない人はいくら修練を積んでももちろんそれなりの上達はあるにしろ いつまでたつても垢抜けない。

華やかな文章が書ける人、センスのある言い回しや比喩の使える人、文章の絶対音感を持ち、リズム良く的確な描写のできる人。これらはみんな才能で、文才に恵まれない人が同じように真似しようとしても無理なんです。いつだって神様は不公平です。

だいたい、文才のある方というのは私がこのエッセイで述べるようなことは最初から知っていて、

「円城寺は当たり前のことを何を偉そうに言っているんだ」か、もしくはせいぜい、

「私が漠然と感じていたことはこういうことだったのか」ぐらに思つていてることでしょう。（あ、私が上手いと言つてゐるではありませんよ。ただ理論武装しているだけですから）

といつてあきらめるのは早計。容姿だつて、自分に似合つ化粧やファッショングでいくらでも取り繕えるように、文章だつて「へタな部分の隠し方」というものがあります。それに、先程も申しましたが「文章の上手い小説が良い小説」ではありませんので。

「文章が……」と言われる人は、自分の弱点を知らないだけなんですね。そしてそれを取り繕う術は案外簡単だつたりします。それは本当に知つているか、いないかだけの些細なこと。誰もが簡単に「プロっぽい」と言われる文章が書けるようになります。（当然ながら「プロっぽい」というだけでプロの文章が書けるようになるわけではありません）

それではさつそく、前回同様、上から目線でいきます。とりあえず文章の「身だしなみ」を整えることにしましょう。人様に小説を読んでもらつ、人前に出るですから身だしなみは大切です。

『文章は見た目と中身がよく似ている』

という格言があります。人を見た目で判断してはいけないとしますが、人間だつて案外見た目と中身は乖離しないものです。

文章も同じ。

一文( )と改行する箇条書き、

無駄な改行や

一行空きを乱発するスカスカの文章は

中身もスカスカ。（こんな感じ）

反対に、段落の少ないぎゅっと詰まつた文章を書く人は、純文氣取りの難解な文章を連ねている。

もちろん効果をはかつて、あえてそういう書き方をする場合もありますが、とりあえず「文章が……」と言われるような人はやめた方がいいです。

だいたい、一行空きの文章が読みやすいなんて勘違いするのは普段から小説を まともな小説を 読んでいない証拠ですからね。

それから、一般的な表記原則を守ること。さいわい「なるう」には多くの指南書が存在し、その多くが原稿の書き方を説明していますので、すでに「存知の方も多い」と思います。軽く復習しておきましょうか。

- ・書き出しへ一行空けて二行目から。
- ・改行後は台詞も含め、一マス空ける。（注1）
- ・『　』、『　』……『　』は、二個一セツトとして使用する。
- ・『？』、『！』の後は一マス空ける。
- ・台詞の最後の「。」は不要。

「こんなところでどうか。まあ、これを書つと必ず「そんなルールはない」という人もいますけどね。

でも、ルールと言われるものは確かに存在します。「戦後出版業界表記原則」ともいすべきルールが。前述を含め、『当て字、難読漢字の使用を避け、接続詞、基本名詞、基本代名詞、副詞はひらがなで』というものです。

「どこにそんな記述があるか」って？ ありませんよ。物書きを

自認する者にとっては「常識の範疇」ですから。

人に会つたら挨拶をする。

食事中、喋りながらものを噛まない。

公共の場で騒がない。

「へいう事柄に対し、「そんな法律じゃある」って言つてているのと同じです。

「俺は別に出版するつもりはないし、そんなことを言われる筋合いはない」

という方もいるかもしません。しかし出版するかどうかはともかく、たとえWeb掲載であろうと、「読んでもらうために」投稿しているわけですよね。読んでもらいたいなら、ルールを守り、礼節をわきまえ、「どうか読んでください」と作品を差し出すのが道理ではないでしょうか。

すみません。話が逸れました。

少し補足しますと、「程<sup>ほど</sup>」、「等<sup>など</sup>」、「様に<sup>よつ</sup>」は、基本的にひらきます。ひらがなにすることを「ひらく」と言います。「兎に角」、「折角」なども今さら漢字で書いてはいけません。

もちろん、時代物などで演出効果を出す場合などはこの限りではありません。これを含め、表記原則を破るのが許されるのは

・説明できるだけのちゃんとした理由があり、

・それが自己満足に終わらず確かな効果をあげていると認められる。

といつ場合です。

無駄な行きをなくした上で、これら表記原則を守り、段落をこまめにつける。段落は原稿用紙一枚につき四つが目安ですね。でき

れば五つか六つ。これ以上だとアマチュアの文章は密度が薄いので、読みやすいを通り越して薄っぺらい文章になってしまいます。

これだけで、見た目はほしいぶんとプロっぽくなつたのではないでしょうか。

前回の視点でも申しましたが、けつきょくこれらは読みやすく、伝わりやすくするためのルールですので、自らを天才と自負している人以外は守つた方が無難です。

今回はあまり大したことは書けませんでした。すでにこんなことは出来ていて、退屈な話だつたという方もおられるでしょう。次回は「描写」について語つてみます。

## 第四回 プロっぽいと言われる文章（文章作法）（後書き）

（注1）・製本されたとき、カギ括弧が天から（一番上のマスから）始まるか、一マス空いているかというのは出版社ごとに異なる校正規則の違いで、本来は原稿は例外なく一マス空けるのが基本でした。しかしながら、現在はほとんどの出版社において「台詞は天から」に統一されており、原稿も台詞は一マス空けなくてもよいというの主流です。私は古い人間なので空けています。

## 第五回 それは小説ではありません（ありすじ文体とは）

『田城寺まどかの悪文排戻』 第五回で「」あります。 今回は「描  
[写]とは何か」について語ります。

まずは私の新作小説からご覧ください。

ぼくはどこにでもいる平凡な高校生だ。学校が終わつたある日、  
ぼくは家までの道を急いでいた。しかし、途中で工事現場に遭遇し  
たのでいつもと違う道を行くことにした。

するといつもの間にか、知らない道を歩いていふことに気がついた。  
ぼくは少し悩んで、今来た道を引き返した。

しかし、どこまで行つても知つた場所に出ない。

焦つたぼくは通りすがつた男に道を聞いた。

「すみません、……町に行くにはどうすればいいですか？」

「……を右に曲がれば行けるよ。」

肝心なところが聞こえない。しかし、聞き直そつとしたら男はも  
う立ち去つていた。

ぼくは再びあてもなく歩き出した。しばらく知らない町をさまよ  
つていたが、ついにA……町にたどり着くことはなかつた。ぼくは  
疲れて、その場に座り込んでしまつた。

気がつくと、いつの間にか日が暮れてくる。

……いきなりの駄文で申し訳ありません。なんとなくホラー仕立  
ての物語。さて、この文章を読んでどう感じたでしょうか。

読みやすい？ 単調な文章？ なかなか味わい深い？ ヘタくそ？  
感じ方は人それぞれです。しかし、少なくとも「上手い」とは思  
わなかつたはずです。どこがヘタくそなのでしょう？

お分かりの方も多いと思いますが、実はこれを「小説」とは言いません。こんなものは小説以前、ただの「あらすじ」です。こんな文章に、上手いもへタもありません。

どこがどう、なぜこれが小説ではないのか。わからないという人はちょっとヤバイですよ。

なぜなら、

『説明ではなく、描写をしないと小説にはならない』

といふことがわかつていながらです。これは小説を書き始めたばかりの人がやりがちな、「あらすじ小説」なんです。小説の骨組みだけ。これに肉付けし、血を通わせないと小説にはなりません。こんな書き方をしたら、歴史の年表だって小説になってしまいますよ。例えば

昭和六年、日本は中国の排日運動と経済的大恐慌を解決するため、満州事変を起こし、翌年中国北部を分割し、満州国を建国した。さらに昭和十一年、日華事変に突入。中国侵略への泥沼戦争に突き進んでいった。

これに対し、中国は共産軍と蒋介石のひきいる国民政府との内乱を一時中断し、一致団結して排日運動に立ち上がった。

日本は石油などの資源を必要とするため、昭和十六年、日本軍は仏印に侵略し支配下におさめた。

……ね、こんなものは小説じゃないでしょ？　これと同じ書き方をしているのが、私の書いた小説（と思って書いたあらすじ）です。

冒頭の「ぼくはどこにでもいる平凡な高校生だ。」なんて一文はもつともいけない。平凡な高校生ならば、平凡であることを描写しなければ小説にはなりません。

ではどういう書き方が描写なのか。

お手本として、立川マナ先生の『鈴木君の平均的な非日常』というコメディ小説から、平凡な高校生、鈴木君を描いた一文を紹介します。もちろん立川先生の許可は取ってあります。

(中略)

平均といえば、彼の見た目もそうだ。保健の教科書に描かれるイラストのような、一般男子の体系。中背中肉。顔は目立つわけでもなく、かといって、ブサイクでもない。おそらく、ランダムに三十人ほどの男子生徒の顔写真を用意して、その平均値を割り出せば、彼の顔になるだろう。似顔絵が描きづらい顔、といえば分かりやすいだろうか。とにかく、特徴がない。だから、なかなか覚えてもらえない。それなのに、ショッちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

(後略)

これは私が絶賛した一文です。いやー、上手い。お見事！  
どこが上手いのか。

「メディならではの軽快な文体はもちろんですが、しかし私が感心したのはそこではありません。特徴がない人の特徴として、「似顔絵が描きづらい顔」だとか、「なかなか覚えてもらえない」ということは、案外多くの人が思いつくことでしょう。しかし、

それなのに、ショッちゅう、見知らぬ通行人に声をかけられる。よくある顔、というのも大変なのだ。

これがすごい。これは思いつかない。少なくとも、他人を遠ざけるような生き方をしてきた私には決して思い至らない。

美男子は美男子の苦労があるように、ブ男にはブ男の苦労があるように、どこにでもいる平凡な顔の「鈴木君」にも、よく誰かに間違えられるという苦労がある。そこに気づく立川先生の人間にに対する洞察力と想像力。

この効果は絶大で、学園コメディであるはずの小説世界が、この一文のおかげで確かなリアリティを持つて感じられるようになります。

私がこれ以上のものが書ける自信がなかつたので、お手本に引用させていただきました。

じつ書かないと小説にはなりません。私が書いたものを読んで、すぐに「これは小説じゃない」と見抜けなかつた人。あなたの小説も「ただのあらすじ」である可能性があります。

抽象的な言い方になりますが、小説の文章は、そのものズバリを言い表してはいけません。核心を突いた言葉で世界を広げるのが短歌や俳句なら、小説の文章はその対極に位置します。現実と小説世界の溝を埋めるように、丁寧に言葉を敷き詰め、核心を浮かび上がらせる。それが小説における描写です。

私の書いたものと立川先生が書いたもの、どうしても違がわからぬという方は、とりあえず百冊ほど小説を読んでください。でないと、これから先、あなたの書くものはすべて「あらすじ」でしかありません。

もちろん全部を描写してゆくと大変になるので、説明で済ませてしまう部分というのあります。次回はそのあたりを、「だけ描写するべきか」を考察します。

## 第六回 描写肥大という病気

『悪文排斥!』第六回。今日は「あらすじ小説」とは反対、贅肉のつきすぎた肥満小説について語ります。

実はこのエッセイを始めてから、何を、どこまで描写すればいいのか解説してほしいという意見を数名からいただきました。リクエストは受け付けておりませんが、そういう方の参考になれば幸いです。

「何をどこまで書くべきか」

おそらくこれも、小説を書き始めた人の多くが悩むことだと思います。

そこで、今回もひとつ悪い例を出します。あ、これはもうひとりの私、矢岳秀斗が書いたものです。

「何だつて!」

ぼくは驚き、座っていた椅子からはじかれたように立ち上がった。その勢いで、グレーに塗られたスチールフレームに薄い木板を張つただけの椅子は、その値段と同じぐらいの安っぽい音を立てて床に転がった。掃除したばかりの綺麗な床に、わずかについつしまった傷がやけに目を引く。でも、ぼくも彼もそんなことを気にしている場合じゃなかった。

「すぐに行こう」

ぼくはまず右足の筋肉に力を入れて足を床から持ち上げると、前方に出して五十センチほど先の地面を踏みしめた。それと連動させ、右腕は肘を曲げて後方に振る。もちろん左腕は前だ。前方の地面をとらえた右足に力を込め、こんどは左足を持ち上げる。それを右足

より前に出し、合わせて腕の動きも逆に。繰り返すその動きは速くなり、一瞬両足は宙に浮く。

ぼくは走っていた。すれ違う十人ほどの生徒が、驚きの表情を浮かべて振り返る。階段を一段とばしに駆け下り、一階へ。降り立つた廊下を右へ三十メートル行き、突き当たりを左に折れる。すでに誰もいないはずの体育館に、ぼくは急いだ。

……（絶句）……  
アホかい！ こんなものは

「何だつて！」  
ぼくは驚いて立ち上がった。その勢いで椅子は転がり、乾いた音を立てる。

「すぐに行こう」  
言つが早いが、ぼくは教室を駆けだしていた。すれ違う生徒が、何事かと振り返る。  
でもそんなことに構つちゃいられない。ぼくは誰もいないはずの体育館へと急いだ。

で、済むぢやないかつ！

……失礼しました。

しかし笑つてはいけません。実はこういう書き手が意外に多いのです。しかも確かに長い描写を支えるだけの記述体力もあり、よく

小説というものを知らない読者からは

「豊富な語彙と圧倒的な文章力に驚きました！」

と、感嘆符をつけて褒められたりするものだから、なかなか自分がそういう書き手であるとの認識がありません。

前述の悪い例では、転がった椅子が高いか安いかなんて関係ないし、床についた傷がのちの伏線でもない限り、どうでもいいことです。

後半の走る描写など論外。『まず右足を持ち上げ、それから……』なんて、主人公がこのあと空でも飛ぶのでなければ、明らかに過剰描写ですよ。まるで『キャブン翼』のスローモーションじゃないですか。

こういう人の小説は、無駄を省けば半分、ヘタをすれば三分の一の分量で書けてしまいます。長編を書いているのに、実はそれは本来、短編のネタだったということに気づいていません。『あらすじ小説』と同じく、これも小説にはならない。

おそらく、小説をパソコンで書くようになってしまった弊害でしょう。どんな長い文章も楽に書けてしまうものだから、とりあえず全部書いてしまう。三百枚、四百枚の原稿用紙に立ち向かい、そのままススをひとつずつペンで書いて埋めてゆく、という経験のある方々には、あまり見られない傾向です。

もしあなただが、

- ・短編が書けない、もしくは苦手。
- ・公募に挑戦はしてみたいけど、俺の小説のスケールは規定枚数には収まらないぜ！
- ・書き出した小説が一向に終わる気配を見せない。（最初から大河小説として書いているなら別です）

の、どれかに当てはまるのであれば、あなたは間違いなく無駄な描写を連ねています。

こんな書き方をしていたら、小説なんてどんどん長くなってしまいますよ。そりや短編なんて書けるはずがありません。

またこういう人に限って、肝心なところを説明で済ませている傾向があります。描写しなければいけないとこらなのに、前述の「ぼくは平凡な高校生だ」という説明になつていています。

説明と描写が逆になると、実際の原稿枚数よりも物語が長く感じます。どれだけ描写を連ねても淡々としてしまう、というのもこれが原因です。読者が何を知りたいのか、与えるべき情報は何なのか、理解しないまま執筆に入るから何もかも書いてしまつんですね。

本来は小説のネタを掴んだ瞬間に、「これは原稿用紙 枚の話」ということを把握しなければなりません。それがわからないという人は、まずはきっちり五十枚で終わる短編を十本ほど書いてみましょう。

五十枚の短編に、無駄な描写を書ける余裕はひとつもありません。一語一句だつておろそかにはできない。この一文は必要か必要でないのか、見極めるための練習になります。

たしかに長編であれば、多少の無駄を交えて枝葉を茂らすということも必要ですが、基本的にはなぜこの描写は必要なのか、説明のつかないことを書いてはいけません。

執筆はもつと神経質に。トッププロともなれば、描写はもちろん、どうしてここは「 だつた。」ではなく、「 であつた。」となるのかについても説明ができるほど、文章の隅々にまで気配りを行き渡らせています。

無神経なままで小説は書けません。文章には、神経を使いすぎるぐらい使ってちょつといいのです。

しかし、前述の「あらすじ小説」は、けつこつ簡単に治りますが、「描写過多」の修正は、かなりやっかいだと思います。なんせ文章

のダイエットですから。いつだって、太ることより痩せることの方がずっと大変なのです。

短編と長編では確かに違う部分もありますが、短編が面白い人は長編を書いても上手いです。短編が書ければ長編は書けます。小説が上手くなるためにも、短編の執筆はお勧めです。

どうしても描写の取捨選択がわからないという人は、自分の崇拜する作家の小説を書き写してみましょう。もちろん「ピペじゃないですよ！」

文章の鍛錬はもちろん、「何をどれだけ書くべきか」がわかると思します。同じ文体になると恐れる人がいますが、自分がそう思うだけで、第三者が読めばまったく別物です。決して同じにはなりません。（一冊書き写したぐらいでプロの文章が書けるわけがない）

私が誰の文章をお手本にしているかだって、おそらくわかる人はいないはずです。

次回ももう少し描写について、「どのように描写するのか」を考えてみたいと思います。

## 第七回 円城寺まどかがナンボのもんじゅー（『かいな』批評公開）

『悪文排斥！』第七回。今日は予定を変更して、このHッシュセイの著者である円城寺まどかの実力を公開したいと思います。

執筆歴一年半。公募にも挑戦しておりますが、結果は残せていません。何が足りないのか、自分でも感ずるところは多々あります。一度プロの意見を聞いてみようと、公募の選考経験もある編集者に作品を見もらつたことがあります。

この経緯は自身の活報でも一部を紹介したことのあるのですが、今日は完全ノーカット、言わしたことの全てを掲載します。

今まで散々上から目線の講釈を垂れてきましたが、たまには徹底的に叩きのめされる円城寺まどかを見て、溜飲を下げてください。

批評を受けたのは拙作『かいな』です。

<http://ncode.syosetu.com/n1131n/>

批評されるのは大きく分けて記述、人称、構成の三点。各項目では『』のついているところが私の評価です。それでは行きます。

\*\*\*\*\*

記述面について

文法精度が確保された安定感のある日本語です。

- ・といひる語詞の重複、主語と述語の不整合、能動態と受動態の混在、文意の飛躍および断片などが見られます。

問題ありません。違和感を誘われる読点利用が皆無なのは、作者が充分な「構文解析力」をお持ちだからだと思います。また、漢字の使い分けも水準をはるかに上回るレベルで、作者の丹念に辞書を引く姿勢が窺えます。

ただ、たぶん「力所だけ「主述不整合」と考えられる記述が見られました。この「文章冒頭に『は』を配置しながら、それを主語として扱わない書き方」は、力不足の書き手の特徴とも言えますので再確認してください。

×空はどんよりとした灰色の雲が覆い尽くしていた。  
どんよりとした灰色の雲が空を覆い尽くしていた。

×平日のこんな時間に家にいると、奇妙な解放感と、まるで社会から取り残されたような孤独感が入り交じった、奇妙な気分だった。

平日のこんな時間に家にいると、奇妙な解放感と、社会から取り残された孤独感が入り交じった、奇妙な気分に襲われる。

ラノベで多用される「……」「」ですが、これは一般賞への応募を考えた場合、利点になりません。現状の本作でも利用頻度が多すぎる印象で、再確認をお勧めします。また、「一行空けの代わりに『……』を挿入」も、「意図がよくわからない」と判断されるリスクをはらみます。

よほど特殊な読ませ方をさせるのでない限り、名前の初出時のルビは不要です。煩わしいと感じる人もいると思います。

### 人称面について

- ・「セリフの味」「地の文の声」とともに実現された真性三人称小説です。

- ・「客観的に書こう」という意図が窺える記述もありますが、「自由間接話法（＝地の文における独白）の多用」+「地の文の主観、すなわち記述者の視点が作中当事者となつていて記述も目立つ」+「地の文において『声』を持つに至らない説明のための説明が多く行われている」という理由で、「疑似から真性への過渡期にある混合人称」と考えられます。

地の文が作中当事者の主観で書かれており、また、それが作者の意図だと考えられることから、疑似三人称作品と判断できます。

- ・他者への目配りができた、きちんとした一人称です。

- ・「他者への感心・洞察の不足（＝事実上の欠落）」が特徴的で、初心者と女性応募者に目立つ「自分語り一人称」と言えそうです。
- ・「描写の不足（＝事実上の欠落）」+「地の文のほぼすべてが『説明のための説明』である」という理由で、「初心者に多く見られるあらすじ文体」・「三人称」と感じられます。

典型的な疑似三人称作品で、「疑似三人称のルールから外れる記述」は見られませんでした。

ただ、本作の場合はすべての場面に主人公・理沙が登場していますので、「一人称の方がすつきりする」、「記述を主人公の知覚の範囲内にした方が恐怖感の醸成に効果的」とも感じました。

### 構成面について

- 吟味されたストーリー展開と感じられます。

読者に違和感を与えてしまうと思える要素が散見します。

記述レベルが相當に高いため、読むこと自体に晦渺が伴うことはありません。しかし、「なにを・どのように書くか」＝「事件のどの部分を切り取つて読者に提示するのか」といった部分の理解度、実践度に関しては、多くの応募者と同レベルにあると感じました。

以下、箇条書きですが、気づいた点をお知らせします。

- セリフを大切にしてください

小説におけるセリフは「それぞれのキャラの人格を表現し、書き分ける」上でとても大切なツールと言えます。したがつて すべてをそうするのは事実上不可能とも言えますが 小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」であつた方が、明らかに有利と言えます。

一方、現状の本作のセリフには「はーい」「もしもし」といった、キャラの人格表現とは無関係の心底どうでもいいセリフが多く含まれており、やはり見直し（＝「自分の大切な小説のキャラに、そういうセリフはただの一言も口にさせない」というハードルを設けること＝あなたが敬愛する作家がその種のセリフを書いているか確認すること）が必要と感じます。

生きた、有効なセリフとは　　？　これはもう、「お手本となる作品」を読み込むことで身につけるしかないのかもしませんが、作者ご自身の「自分はこういう言葉を（他者に）かけてあげたい」「自分はこういう言葉を（他者から）もらいたい」という「想い」が基本になると思います。

本作で多用されている『（）』でくくつた独白体。これは本来、地の文での内面記述がしにくい真性三人称で意味を持つもので、内面記述に制約のない疑似三人称で用いるのには違和感があります。また、その使われ方の多くが「地の文の連續を避けるためのワンポイント」であるため、区分としては「独り言」となり、「応募作で書いてはいけないこと」に相当します。悲鳴や擬音とともに幼稚さ・安直さを醸してしまってこの独り言を避ける方策は実に単純、要は「主人公ひとりしか登場しない場面は書かない」です。地の文での解説や独り言ではなく、「主人公と他者の生きたやりとり」を通じて、読者に知らせる必要がある事実を提示してください。

- ・主人公のキャラ設定を見直してください

疑似三人称である本作は実質一人称ですので、私が紹介している一人称のルールが適用されると考えられ、つまり「人格的に劣つた大人を主人公にしてはいけない」に抵触しているように感じます。

「小説の主人公は際立つた才能を持つ優秀な人間しか勤まらない」

とは言い切れませんが、しかし、「どこにでもいる、つまらない女」を主人公にした実質一人称が、記述レベルはAクラスであるにしかなり得ないのもまた事実です。（作劇上つまらない人間を主人公にしなければならない場合は、真性三人称のスタイルで「書き手自身の『つまらなくない人間の声』を与える必要があります）。

キャラに魅力を与える方法は「魅力的なセリフ」、そして「魅力的な行動（＝誰でもできるわけでない、意地・価値観・想いを体現するための行動）」で、それらが可能となる形の作品構成を執筆前に吟味することこそが本来必須なのです。その観点で、現状からの改変度を最小にしながら理沙に魅力を与える方法を勘案すると、「鋭敏な洞察力ゆえに息子の犯行と察知し、『自分の腕を切り落としていい、殺していいから、これまで犯した犯罪の責任を負いなさい』と詰め寄る母の思い」を打ち出すことではないかと思えます。

- ・「読者がどこまで察知するか」と「現実世界との整合性」を再確認してください。

「母子二人しかいない家で腕が発見された」 + 「息子の部屋に獵奇的な本があつた」が提示された時点で、読者は「聖也の犯行」と察知します。したがつて、その翌日の理沙の言動は、読者にとつて「とつくにわかつていることを何ぐだぐだ言つてんだ」でしかなく、有害と言えます。つまり、「書いてはいけない」のです。

また、「校門に置かれた生首事件」ほどではないにしろ、「民家から片腕が見つかった」は大事件で、警察が早期に立ち去ることはあり得ません。（母子二人は警察によつて徹底的に監視され、大挙して押し寄せたマスコミに躊躇されます）。加えて複数連續殺人犯の特徴は「支配者と奴隸」ですので、「聖也が支配者、勇人が奴隸」という描き分けは最低限しておくべきです。（ただし、読者から見た魅力的な獵奇殺人犯は、「体に障害を持ちながらもすべての犯行を単独でやつのける優秀な犯人」なのだと思います）。

「これら「当然踏まえているべき」と」がぽつかり欠落してしまつと、やはり「現実との整合性吟味が不充分」と言わざるを得なくな るようになります。

聖也の姿・雰囲気にまつわる記述は有効で《～怜俐といつ》《～不具者ならではの艶やかさ》などは作家性を窺わせる表現と感じます。（ただし、「不具」は明らかに要注意語句ですので、使用にはリスクが伴います）

「動物が事故に遭う」にナーバスな読者もいるため、本作冒頭の記述はいかんせん避けるべき　その時点で「こんなもの読みたくない」と拒絶される危険をはらむ　と感じます。読者にとつて作品は「どこに誰が書いたかわからない、それを読むことでどんな精神的ダメージを強いられるかわからない危険物」でもありますし、読者に対する充分な配慮が必要だと思います。

「ホラーとは何か」は案外と難題で、「記述を通してぞわつとす る恐怖を味わわせる」のもありなのでしょうが、現状の本作の骨格 が「幼少期に片腕を失つた少年が成長してから連續殺人犯になつた」という獵奇性ですので、それを中心にした記述で作品を構成するの が基本となつてくるように思えます。

ある事態に直面した主人公が、その価値観を根拠にある判断をし、それ（価値観）を体現すべく行動するさまを描くのが本来の小説です。まず打ち出すべきは主人公の魅力。そして全体を通して描くべきなのは、「読者の心にある『想い』として残る価値観・情感」などと 思います。

\*\*\*\*\*

「これが言われたことのまほすべてです。そんなこ「ツマラナイ、ツマラナイ」と連呼しなくても……」

しかし、悪いところに気づかないまま、いくら書き続けたってムダですからね。

これを踏まえて改稿したのが、拙作『初恋』（原稿枚数98枚）です。

<http://ncode.syosetu.com/n50890/>

残念ながら力及ばず、落選しましたが。

私の実力はこの程度ですが、よろしければ引き続き本作をご覧下さい。

## 第八回 巧い文章とは？

第八回、『悪文排斥！』。このエッセイの最大のテーマでもある、巧い文章とは何か。今回はこれを交え、描写について考えてみたいと思います。

さて、「文章力のある人」や、「巧い文章」とは、いつたいどんなものを指すのでしょうか。皆様はどんな文章を読んで、「巧い」と感じるのでしょうか？

『なるつ』では文章評価という項目があり、五段階で点数が入れられるのですが、その評価は人によって様々です。同じ作品を読んで、ある人は「巧い」と感じて5点を入れても、別の人には「そうでない」と、低い点数を入れる。

私の文章に関して、思うところは様々のようです。みんながみんな最高の評価であればありがたいのですが、残念ながらそういう方ばかりではありません。「1」や、「2」を付ける人だっています。もちろん、自分の文章が万人に受け入れられるなどと自惚れているわけではないし、読む人によって評価が分かれるのはむしろ当然のことです。

思えば私が評価するときだって、明確な基準があるわけでもなく、ものすごく感情的に点数をつけていると思います。

誤字脱字が目につこうが、視点なんて無いに等しいぐらい乱れていようが、はっとさせられるような言い回しがあつたり、気の利いたセリフがあつたりすると、それだけで「5」を入れたり、反対に「巧いのだろうけど、妙に鼻につく」と感じると低い点を入れたり。客観的な評価というよりは、ずいぶんと自分の好みが反映されています。我ながら、理不尽な点数の付け方をしていると思っているのですが。

しかし、自分の中では巧い文章の定義といつのは決まつていて、『究極に巧い文章とは、文章の存在を感じさせない文章である』と考えています。

読んだ人に文章が巧いと思われるなんてまだまだ。読んでいることにさえ気づかない、空気のような文章。

「なんだ、小説なんて簡単に書けるじゃないか」と思わせておいて、やつてみるとできない。これが私の目指すところです。

例えば音楽においても、アマチュアバンドは、曲の中でひたすら超絶なテクニックを入れてきます。「どうだ、凄いだろ。参ったか」と言わんばかりに、ギターもドラムも自分が目立つことしか考えていません。

それはそれで凄いのだけれども、しかし本当の意味の巧さとはかけ離れている気がします。事実、プロの音楽というのは、やつていること自体は非常にシンプルです。できるだけ余計なものを排除し、リハーサルの中で音の調和をとつてゆくことで洗練された音楽を作り上げる。無限のパターンの中から作る音のバランス。それは、プロの耳でしか成し得ない、究極の「巧さ」なんです。

何も知らない人にとっては、一見、アマチュアバンドの方が凄いことをやつてているようですが、プロはもっと別の次元で音を聞いている。本当の巧さはそれじゃないと知っているんですね。

文章においても、それと同じ事が言えるのではないか。陳腐な形容は避けるべきですし、センスのある比喩や形容を連発すれば、「巧い文章」になるわけではありません。

- ・形容は控えめに、
- ・意識的に段落を取つて読みやすく、
- ・なるべく平坦な描写を心がける。

形容つて、ファッショ nに例えるとアクセサリーだと思います。どんな高級なものだつて、ありつたけ身につけていたらただのチンドン屋ですよ。使うなら最適なものをセンスよく。それは別に高価なものじゃなくつたつて 文章で言えば多少つたないものだつて使う場所と見せ方で、充分に効果を發揮するんです。

これは「プロっぽい文章」でお話した、「ヘタの隠し方」のひとつです。いくらダイヤモンドを持つしていても、それを他の宝石の中に置いたら目立たなくなります。でもガラス玉だつて、黒地に置いて光を当てれば人目を惹きますよね。

ところが安っぽいガラス玉しか持つていない人に限つて、文章の中に色とりどりのガラス玉を敷き詰めたがるようです。「ここ一発」の描写を浮き立たせるためにも、それ以外の文章は平坦に。これが巧い文章、少なくとも巧いと思わせるコツではないでしょうか。

平坦というのを、もう少し具体的に挙げましょう。

- ・ルビを振らなければ読めない漢字や、傍点を必要に使わない。
- ・体言止めを連発しない。
- ・擬音や、『！』、『？』を多用しない。
- ・おさないこどものせりふだからといってぜんぶひらがなにしない。（だつて大学教授の台詞に難読文字を入れたからつて、賢い雰囲気が出るわけじゃないでしょ）「モチロン外人ノ台詞ダカラツテ、カタカナデ書イタラタダノギヤグデスヨ」
- ・いくら時代物でも旧仮名使ひはやり過ぎでせつ。
- ・陳腐な文章を書かない。
- ・巧く書こうとして妙な表現をしない。

「」の中でも難しいのは体言止めでしょうか。小説を書いていれば絶対に使う場面は出てきますし、効果的に言えばリズム良く、読み

やすい文章になります。具体的に説明はしつくいのですが、いくつも連續して体言止めが続くと落ち着きがない印象になります。

擬音に関しては、一部の小説マニコアルにあるように、絶対禁止とは思いません。ただ、使うならよほど神経質に。使う場所を間違えなければ、センスのない形容詞を連ねるよりずっと効果的です。しかし不用意に擬音を使えば、その一文で小説全体がぶち壊しになります。

陳腐な文章というのは、今まで散々言い尽くされてきて、「またこれが」と思わせてしまつものです。例えば……

『その岩壁は、まるで嘗々と築き上げてきた人類の英知を嘲笑うかのように傲然とそびえ立つっていた。』

とか、  
『もちろん、 あつたのは言つまでもない。』

とか、  
『桜花爛漫の春の訪れ』

などなど……

じついう類のものは書いても書かなくても一緒。紙とインクのムダ。だつたら書かない方がいいです。読んでいて興醒めしてしまいますので。

「妙な表現」というのは、なかなか自分では気づかないものです。二重形容だつたり、相容れない言葉で意味不明になつてしたり、違和感が感じられる文章のことです。これも例を挙げると、

・「真夏の暑い盛りに」

真夏が暑いのは当たり前です。

・「私を見据える黒曜石のような双眸は、冷たく青い光を放つていた。」

いや、そりやあ青い黒曜石だってありますけど、普通は黒曜石と言つたら黒を想像するんじゃないでしょうか。これは別のものに例えるべきだし、どうしても「青い黒曜石」にならざるのであれば、

『私を見据える双眸は、稀に見る青い黒曜石のような冷たい光を放つていた。』

とするべきじゃないでしょうか。

・「凛とした、涼やかな眉を大仰にひそめて見せた。」

『凛とした』と、『涼やか』が同じような形容の重複。そこにあまり良い意味ではない『大仰に』とくることで、統一感のない悪文と言えます。（これが悪文と思わない人は文章音感のない人です）

以上が、私の考える「平坦な文章」です。要はあまり肩肘張らず、カッコつけないよう」と言い換えることもできます。

『それは小説ではありません』、『描写肥大という病氣』、そして今回の『巧い文章とは』で、悪い例ばかりを挙げてきました。描写をそき落とした「あらすじ」はダメで、無駄を連ねる描写過多もダメ。ついでに陳腐も美文調もダメとなると、「じゃあどうやって書けと言つんだ！」ということになりますね。

私自身が巧い例文を書けないのはもちろん、「小説はこう書かねばならない」と決めつけることは、発想や表現の幅を狭めることになり、自戒としてそういう考え方を持たないようになります。ただ、「こう書くのは望ましくない」ということは確かにあると思つてい

ます。

そういうわけで、私が具体的に「いつやつて書くんだ」とこうい  
とは言えません。強いて言つなら、「女直に言葉を選ばない」とい  
うことではないでしょうか。

## 与太話　その？　読むことと書くこと

『小説が上達する上で、読むのと書くのどっちが大事だと思つ？』

なんて会話をよく聞きます。この質問に、「読む」と答える人は執筆量が足りない人、反対に「書く」と答える人は読書量の足りない人ではないでしょうか。

結論、というか私の考えを申しますと、当然ながら「どちらも同じくらい大事」であつて、もし毎日一時間小説を書く時間があるのなら、一時間読書して一時間執筆するのが理想だと思います。現実には難しいですけど。

しかしあま、「読むのと書くのどっちが大事だ」なんて疑問を持つこと自体、明らかな読書量不足だとは思いますけどね。

だって、小説なんて、読むことに飽き足らなくなつたから書くんじゃないのですか？

### 「小説家は読書家のなれの果て」

とは、プロ作家・清水義範氏の言葉ですが、小説の巧い人、ましてやプロになる人というのは例外なく読書家であります。現在の流行作家、東野圭吾氏は「あまり本を読まなかつた」と公言していますが、それは「他のプロ作家と比べて」という意味で、間違いなく千冊単位の本は読んでいると思いますよ。

「本は読んだことないし、たまたま書いて応募したら入選。プロになつちゃつた」なんて言葉を本気で信じている人は、「街を歩いていたらスカウトされて芸能人になつた」っていう話を鵜呑みにしているアホと同じ。そんなことはあり得ません。まあ、そう公言し

た方がかっこいいですからね。いかにも才能があるみたいで。

「読む」と「書く」とは違う、といつのは確かに事実ですが、「読まなきや書けない」というのもまた真理です。

ただ、「どれだけ読めばいいんだ」と聞かれても、それこそ数量の問題ではありませんし……少なくとも「活字中毒を自認するぐらいには」だと思います。というか、それほどまでに小説が好きでない人がどうして小説を書こうと思うのか、私には理解できませんが、別に自己表現の手段は小説だけじゃないですからね。

「音楽は聴かないけれど、作曲が好き」と言つてこらのと回じです。

確かに「とにかくたくさん書くのが上達の近道」ではあると思うのですが、ただそれには条件があって、「自分がちゃんと小説の審美眼を持った上で」のことだと思います。何も知らずに、もしくは何も考えずにたくさん書いたって、ヘタのまま固まってしまうのではないでしょうか。それを避けるには、たくさんの中を読むしかないと思います。

でも、何事も例外があるて、「なるつ」においても「く良い小説を書いているのに、自己紹介欄に「あまり小説は読みません」なんて書いてある方もいます。思わず「本當かよー」と驚くのですが、事実、そういう文才のある人はいらっしゃるようです。

もちろん、「例外」ですけどね。とりあえず自分がそういう天才だとは自惚れない方がいいし、小説を書く上で読書が役に立つか立たないかは、たくさんの本を読んだ後に判断しても全然遅くないと思います。

私はたくさん読んでいてもこの程度ですが、それでもやはり、書くことよりも読むことが大切と考えております。

## 第九回『KAG ROU』は読みやすい？（小説における文体とは）

『読みやすい文章は巧い文章なのか』

話題作、『KAGEROU』の文章を例に取り、これについて語りたいと思います。

小説が人に読んでもらうものである以上、文章が「読みやすい」ということはとても大切な要素です。このエッセイでも申し上げてきた、人称と視点、基本的な記述の仕方や段落を意識的に取ることも、すべては読者に読みやすく、わかりやすいと思ってもらうための配慮です。

ただ、読む人によって「読みやすい」の基準は違いますし、中には「読みやすい」の意味を履き違えている人もいるようです。

よく言われることですが、物語を伝える手段として、小説は漫画や演劇、映画よりもとつつきにくく、敷居の高いメディアです。

その理由は、小説は単に文章を読み流しただけでは理解できない読んでから文章を映像なり、画像なりのイメージに置き換えるという、読解力を必要とするからです。映画や芝居の鑑賞のように、一方的な受け身では何も入ってきません。読むことが苦手という人は、結局のところ読解力の無さが原因なのです。

と言つてしまつては身も蓋もないのですが、ともかく普段から活字に馴れていない人にとって、「読んで理解する」、「読解する」ということは、ことのほか面倒な作業のようです。

以前、私は「小説の描写は核心をついてはいけない。堀を埋めるように周りを囲み、言いたいこと（＝核心）を浮かび上がらせるのだ」と申しました。

しかし、活字が苦手、読解力のない人にとっては、そういう書き

方をしたものは難解に感じるのでしょ。」（もつとも、難解である原因は書き手にあることもあります）

・彼はいつも清潔な白いシャツを身につけている、銀ぶち眼鏡の似合つ男だった。

という文章より、

・彼は神経質な男だった。

と一言で書いた方が、「読みやすい」、「わかりやすい」と言われてしあわ。

おそらく、『なり』においても多くの方が否定的であるケータイ小説。

あれを「読みやすいから」と好む若者が大勢います。しかしながら、多少でも小説というものをたしなんだ人ならば、「読みやすいの意味が違うよ」と、嘲笑を交えて一蹴するでしょう。文章に何の技術もこだわりも感じられない、情景も心理も作者の身勝手な「説明」に終始する、「ほとんど中」「ポエムでしかない文字の羅列」。

あんな書き方をしたら、読者は何も考へる必要がありません。そもそも文章の中に読解しなければならない情報はほとんど含まれていませんから、あまりに稚拙な言い回しに思わず意味を考えてしまつことがあります、「読みやすい」となるのでしょうか。

（ケータイ小説は小説とは違つ「別物」とすれば、あれはあれで楽しめますが）

ケータイ小説は極端な例ですが、一般的な小説においても読解力を必要としないがために、「読みやすい」と言われるものはあるようです。

やつ玉に挙げて申し訳ないのですが、少し前に話題作となつた『KAGERO』。ご覧になつた方も多いと思います。少し前に、

私も読んでみました。某レビューでは散々にこき下ろされていて、いつたいどれほど酷い小説なのか、やつかみも多分に入っているのではないかと思っていたのですが……

なるべく先入観を持たず読んだつもりですが、その内容はともかく、やっぱり残念な文章でした。この小説の褒め言葉として、「読みやすい文章」というのがよく挙げられていましたが、これは「読みやすい」ではなくて、先ほど申した「中身のない」文章だと思うんですね。

小説の文章というのはただ状況を描写すればいいのではなく、文章そのものが小説世界を内包する小宇宙でなければならないというのが、僭越ながら私の持論です。

文体は書く小説によって使い分けるべきですし、学園ものと同じ文体でSFは書けません。

例えば『昨日の夜に出会った女はとても美しかった。』ということを書くのにも、その描写の仕方はジャンルごとに異なるはずです。わかりやすい一人称で、ちょっと実践してみましょう。

#### ・SF

私がその美しい存在に遭遇したのは、たしか昨夜のことだった。わずか数時間前のことなのに、今となつては夢か現実か定かではない。それは彼女の美しさがおよそ人の想像を超越するもので、そのせいか、私は次元を越えた世界に迷い込んだような錯覚に陥ったからだ。

#### ・中世ファンタジー

私がサーラの化身とも呼ばれる彼女に出会ったのは、昨夜のこと

だった。サーラとは、美を司る円の女神のことである。それは彼女が物腰と微笑の優にやさしく、類い稀なる美貌の持ち主でもあったからだ。尊じおりのその美しさに、私は言葉を失った。

#### ・学園もの

ぼくがさいしょに彼女と出会ったのは、昨日の晩のことだ。出会った瞬間、ぼくは馬鹿みたいに口を開けたまま、その場に固まってしまった。なぜって、こちらにむかって颯爽と歩いてくる彼女はあまりにきれいだから。

#### ・時代もの

わたくしがあるお方をお見受けしたのは昨夜のこと。円に照りそれがるそのお顔は、夜目でもわかるほどつづくしいものでした。

#### ・ハードボイルド

俺があの女を見たのは昨夜のことだ。  
美しい女だ。

朴念仁と揶揄される俺でもそう思つた。

#### ・エッセイ調

昨夜、確かにひとりの女性と出会ったはずなのに、今となつてはあれは夢ではないのだろうかという気がする。というのも、私は生まれてこの方、あんな美しい女性にお目にかかることがないからだ。

……と、まあ巧いかへタかは別にして、なんとなく違いはわかるのではないか。」の例で言えば、時代ものの文章では

- ・話者は女。
- ・おとなしい、内気な女性。
- ・教養のある喋り方をすることから百姓女ではない。おそらく武家か、商家の内儀。
- ・「お見受け」と言つてことから、相手は自分より身分が上。という情報が含まれています。

小説世界とキャラクターが決まれば文体はおのずと決まるし、小説世界と乖離した文体で小説を書くことはできません。（面白いかもしれないけど）

特に一人称小説においては、不用意な文末ひとつで小説そのものをぶち壊してしまうこともあります。言葉遣いはもちろん、改行のタイミングや、何を漢字で何をひらがなにするか、それによつて文体のニュアンスを作り上げていきます。

『夜目でもわかるほどつづくしいものでした。』が、『夜目でも判るほど美しい物でした。』となつては、雰囲気がまるで違つてしまします。

ハードボイルドの例文だつて、

オレがあのオンナを見たのは昨夜のことだ。  
うつくしいオンナだ。

と書いては、同じ文であつても文章のトーンの違いから軽薄。ボルノみたいになつてしましますよね。

あまりに流暢な文章に、あえて違和感を伴つ言葉や漢字を入れて目を止めさせるという高等テクニックもありますが、それこそ「この人は悪文でさえ巧く使いこなせるのだ」ということが見抜けるほ

どの読解力を持つ読者でないと、単に「へたくそ」と言われてしまします。

「何を、どれだけ描写するか」というのも以前に少しお話しましたが、本来はそれだつて書くものによって変えてゆくべきです。学園ものなんかでは人や風景はあまりぐどぐど書かず（というか、できる限り排除して）「くつきりした顔立ちが印象的な背の高い女性」と、一言で済ませてしまうような投げやりな書き方に、心理描写は感傷的な言葉で綴ると雰囲気の醸成に効果的です。

反対に中世を舞台のファンタジーなんかでは、人物や風景はぐどいぐらに書き込み、人の生死や運命をあつさり書くことで原始心性を浮かび上がらせます。少しごとに小説から近代臭さが抜けます。

で、翻つて『KAGEROU』です。読んでみて、「文体で小説世界を構築する」なんて芸当はまったくできていません。妙なところが力タカラになつていて鼻につくし、書かれていること以上の情報が何もない、中身がない文章だから、普段あまり本を読まない人にとっては「読みやすい」となるのでしょうか。でも、それは決して褒め言葉ではないと思います。

ただ、文章はともかく、物語自体は面白いと思います。伏線の張り方や、破綻のないストーリー運びはさすがプロだと感嘆します。「よくある話」という意見もあるようですが、小説のテーマが人々の憎愛に集約される以上、「よくある話」がもつとも面白い話でもあるのです。しかし、本来それにはオリジナリティ溢れる小説よりも、ずっと高いレベルの文章力を求められるのですが。

小説にしろ何にしろ、ヒンターテイメントにおいては「面白いこ

と「が第一条件ではあります、『面白い小説=良い小説』ではありません。

単純に面白い話が作りたいのなら、何も小説である必要はありません。漫画だって映画だって、それこそシナリオライターだって、面白い物語、感動する話はいくらでも作れます。

どうして小説なのか。自分を、物語を表現する手段としてどうして小説を選んだのか。小説が文芸、文章の芸術である以上、文章に対するこだわりや技巧のない小説は、いくら面白くとも「良い小説」とは言えないのではないでしょうか。

## 第十回 キャラクターのDQNネーム

「悪文排斥！」第十回。早くも書くネタがなくなってきたので、今日はキャラクターの名前にについて語つてみます。

「キャラクターの名前なんてテキトーだよ」とか、「名前なんて何でもいいんだよ」と言う人もいるかもしれません。

もちろん、ほとんどの作者はこだわりを持ってキャラクターの名前をつけていると思いますが、残念ながらじく稀に主人公の名前を知った瞬間に萎えてしまつ、読む気が失せてしまつような作品もあります。

「名は体を表す」という言葉もありますが、すべてを文章で表現する小説において、キャラクターの名前は「顔」であり、特にプロほどのくつきりした性格心理によるキャラの書き分けができるないアマチュアにとつては、「誰が誰なのか」を見分ける上でとても重要なファクターです。

極端なことを言えば、『沙也香』という女の名前で男のキャラだとしたら、違和感があるどころか感情移入なんてとてもできません。 そうでなくとも、『雄介』や、『強志』なんてイカツイ名前で、 「病弱で蒼白い顔をした」とか、「怜悧」という言葉がぴつたりの「」という描写をいくら重ねても、説得力はないでしょう。

反対に、さわやかで明るく、友達も多い男が『颯太』だつたりしたら、（なんて安直な名前だ……）それほど多くの描写を必要としなくとも、なんとなくイメージは湧きやすいのではないでしょうか。

現代が舞台なのに決してあり得ない名前というのも、はなつから

「『Jの世界は嘘だ』と言ふらしてこるよつなものです。

『皇城紫音』

『海那月命』

いつたいじこの暴走族ですか？

しかもこんな名前のキャラが「じこにじこもいる普通の高校生」だつたりした日には！

……まあ、リアリティを持たせる筆力に自信があるなら結構ですが。

ファンタジー小説においても、主人公や主要キャラはすぐかっこいい名前がついているのに、王様がしょぼいネーミングだつたりすると一気に興醒めです。

あり得ないでしょ、『サム』なんて庶民的な名前を王様につけてはいけません。（例え本当に『サム』という王様が実在したとしても！）どんな重々しい台詞も、すべて上滑りしてしまいます。（コメディならいいかもしね）

以上は極端な例ですが、案外やりがちな失敗を挙げてみましょつ。

・ひとつの中でも名前の語感が被るキャラが存在する  
『聖也』と、『誠司』、もしくは『康生』など。

・同じく漢字が被る  
『征哉』と、『征志』など。

・語感が悪い

『レカ』、『藤木芳樹』など。

・小説に限らず、漫画や映画に登場したキャラクターの名前に似ている。もしくはまったく同じ名前のキャラクターがすでにいる。

意図的でなくとも偶然の一致はあると思います。しかし、みんなが知っているようなキャラクターを連想させてしまったような名前は、いくらオリジナルを謳ってもそれまでのイメージが強すぎて、なかなか「別人」として認識してもらえない。

もちろんこれを逆手に取ることもあって、例えば実在するする人物をモデルした場合などは、その名前も似せておくと書き手も読み手もイメージしやすくなります。

これは例えば、東野圭吾氏の『ガリレオ』における主人公、『湯川学』も、物理学者『湯川秀樹』をもじっているのでしょうか。

ちなみに私のペンネーム『円城寺まどか』は、少女漫画『ガラスの仮面』に出てくる登場人物と同じだそうですが、これは偶然であり、何の関係もありません。

アマチュア作家が完全に人物の書き分けができるのは四人が限界、と言われます。読者が混乱しないためにも、主人公を含めて主要な登場人物はちゃんと見分けのつく、特徴的な顔（名前）を付けるべきです。

もちろん、「あり得ない名前」特徴のある名前ではありません。よく言わることですが、推理小説における名探偵の多くは、「特徴的な姓+平凡な名前」です。

『明智 小五郎』

『金田一 耕助』

『伊集院 大介』

『江神 一郎』

『巫 弓彦』

決してこんな名前の人はないのだろうけど、リアリティはある。過不足のない、絶妙のネーミングですね。

話は少々脱線しますが、昨年の『日本ホラー小説大賞』受賞作、『お初の繭』まゆに出てくる脇キャラの名前が最高でした。

物語は明治の製糸工場を舞台にしたホラー小説なのですが、繭を買い付けに来たロシア人バイヤーの名前が、なんと『フルチンスキー』。 (笑)

「フ、フルチンスキーさん……！」

文章のセンス、文章音感の有無というのは、こんなところにも出てしまうようです。

## 第十五回 痛々しい台詞

第十五回『悪文排斥!』。今回は台詞について。

台詞と言えば私、円城寺まどかの苦手とするところで、第七話の『円城寺まどかがナンボのもんじやい!』でも散々に突っ込まれていました。自らの傷をえぐるようですが、もつ一度蒸し返してみます。

### ・セリフを大切にしてください

小説におけるセリフは「それぞれのキャラの人格を表現し、書き分ける」上でとても大切なツールと言えます。したがって すべてをそうするのは事実上不可能とも言えますが 小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」であった方が、明らかに有利と言えます。

一方、現状の本作のセリフには「はーい」「もしもし」といった、キャラの人格表現とは無関係の心底どうでもいいセリフが多く含まれており、やはり見直し（＝「自分の大切な小説のキャラに、そういうセリフはただの一言も口にさせない」というハードルを設けること＝あなたが敬愛する作家がその種のセリフを書いているか確認すること）が必要と感じます。

……と、いうことだそうです。

そんな私がおこがましくも台詞について講釈を垂れようというんですから、説得力なんぞあるはずもありません。言えることも基本以下の低レベルなことにどどまるでしょう。

「痛々しい台詞」。充分に自戒を込めています。

## 痛い台詞 その一

「「ええ～～！」」

と、カギ括弧を重ねる台詞。

『異口同音』という言葉を知らないのでしょうか？ どうしようもなく稚拙に感じます。じだい「こんな日本語表記は「無い」のですよ。

しかし『なれい』の作品において、確かに「カギ括弧を重ねることでしか表現できない台詞」というのをお見受けしたことがあります。（厳密にはカギ括弧ではありませんが）。それは設定や諸々の条件が重なつてのことですが、一概に禁止とは言えないのかなとも思いました。まあ、極めて例外的なことですが。

## 痛い台詞 その二

「ワハハハハハハ！」

「うわあああ！」

と、台詞で笑いや悲鳴を表現する。

いや、これも絶対ダメとは言い切れないかな。笑いはともかく、悲鳴は私もやつてしまつてしているし。でも読む人によつては

「無神経な日本語」

「デリカシーの欠如」

に、感じられるようです。とりあえずやらない方がいいみたいですね。（なんか弱気だ……）

### 痛い台詞 その三

「いやあ、今日もいい天氣だ」

ぼくは窓を開け、伸びをして咳いた。

「あれ、なんだこれは」

窓辺に見たこともない虫がとまっている。ぼくは不思議に思つて顔を近づけた。

「何だろう。見たこともない虫だ」

見る角度によつて羽の色が変わる。赤いと思つと次の瞬間には緑色に。そしてすうと色が薄くなる。

「辞典に載つてないかな。調べてみよう」

ぼくは書棚に手を伸ばした。

台詞がイタイといつよりはキャラがイタイ。こんだけ独り言の多い奴つていつたい……。

そういえば、「三人称・神の視点は地の文で心理描写ができないから」と言つて、思つたことを全部台詞で独白している自称、神視点の作品があつたつけ。作法としては間違つてないけど、小説としては間違つている気がします。

### 痛い台詞 その四

「あ、あれは確か昨日ぼくが作ったカレーライスじゃないか。朝

出かけるときはちやんと口綴まりを確認したはずなのに。隣の鈴木さんがどうしてこの公園で食べているんだ？」

台詞の状況はさておき、キャラクターに都合良く説明的な台詞を吐かせてはいけません。

「まさか……どんな巨大なドラゴンも一撃で倒すと言われる伝説の剣がこんなところに……。」

誰がそんなこと言つたんだよ。伏線もなしに。

「誰が、その子を捕まえて。私のお姫ちやんが三年も可愛がつている黒猫が……！」

だから、台詞で説明しちゃダメだって。やるなやせめて自然な会話の中で。

### 痛い台詞 その五

「七瀬美波って言つたっけ、アイツ。ちくしょう、惚れちまつたじゃねえか！」

のたつちまわるほどじつ恥ずかしい台詞を吐かせてはいけません。

「実は俺、君のこと……」

「え？」

「いや、なんでもない」

やめてください。ジノマシンが出来ます。

「見るよ、夕日が真っ赤に燃えてるぜ」

おまえも燃えてしまえ！

台詞を書くときはまず自分で書いてみましょう。恥ずかしくなければOKです。

### 痛い台詞 その六

「いいわ。それじゃ あ約束は明日でも良くてよ」

今どきさあ、「良くてよ」なんて言つ女いの？ 見たことあります？

ねえ、あなた。おあつになつて？ 私、知らなくつてよ。

おやか台詞の末尾を「れまわ」にしたらマダムの言葉になるとか、「いざる」をつければ武士の言葉になるなんて思つてている人はいいでしょうけど。

ついてに言うなら特徴的な話し方をさせればキャラの書き分けにつながるわけでもありません。これらは全て知識と想像力の貧困によるものです。

## まとめ

いろいろ言つてきましたが、私もほとんどに該当する「痛い台詞」を書いてきたみたいです。集約すれば、冒頭の指摘になるんでしょうか。

- ・小説におけるセリフは「それぞれのキャラの価値観・社会観・人生観などを内包した、読者の内面にも届くだけの効力を持つもの」とする。
- ・キャラの人格表現とは無関係の台詞はただの一言も言わせてはならない
- ・当然、独り言はダメ
- ・会話は一定数繰り返し、ひとつつのシーンとして成立させる」と

はい、出直してきます。

## 第十一回 巴城寺まどかの良文万歳！

『悪文排斥！』第十一回。今回ば「巴城寺まどかの良文万歳！」と題して、私が感銘を受けた文章、描写を紹介します。

まずはプロの作品から。プロなんだから、どこの一文を切り取つても上手いのは当たり前ですが、その中でも「絶品」を選びすぐつてみました。

ジャンルも合わせて記載します。それでは行きます。

グイン・サー・ガ外伝 『十六歳の肖像』「闇と炎の王子」ナリス十六歳」より（ファンタジー）

「とにかく印象的なのはその双の眸である。それは十六歳にしてはあまりにも底深く、考え深く、静かだった。どこか、悲しみに似たものさえはらんでいる。生来の気品と誇りの上を、けだるい、ものに倦んだようなおちつきがおおつているので、よけいかれは大人っぽく、他の十六歳の少年たちとはまるつきり別の生き物のようさえ人々の目にうつるのである。

ほつそりとやせたからだはいかにも病弱そうな感じを『』えた。かれには、じつと見つめていると、ついと溶けて消え去つてしまいそうな、はかなげな、少女めいた感じと、非常に賢い少年に特有のひそやかで確固たる自負、そして年に似あわぬ、何か諦観に似た老成が、奇妙に混ざりあつていた。その三つの相容れぬものが、とけあうことなく混ざりあつて、その結果として、甘やかでつかみどころのない、さし入る光によつてたえずそのひらめきを変える貴タンパク石にも似た、ちょっと例のないこの少年の個性をかたちづくつていたのである。

白い絹のチュニックに、黒ビロードのサッシュをぎゅっと結び、美しいつややかな髪をぱつぱつと肩で切りそろえた、十六歳の病弱で聰明な少年　かれこそは、中原の大國パロの王子アルド・ナリスであった。白くなめらかなひたいを飾つている銀の、宝石を編みこんだ『王家の環』が、かれほどに似つかわしく、かれほどにその血を誇つているものも他になかったであろう。

#### ・解説

個人が書いたものとしては世界一長い小説、『グイン・サーラ』の外伝より抜粋しました。物語において重要な役割を果たすパロの王子、「この世でもっとも美しい」と言われるナリス様の描写です。「筆舌に尽くしがたい美しい」を、筆舌に尽くしてみたのだとか。（笑）

当然、これ以外にもナリス様の描写は随所にあるのですが、よく考えると「絶対にこんな奴いない！」と断言できます。なのにこのリアリティ……。「文章力」って、あると便利ですね。

### アルスラーン戦記？　『風塵乱舞』より（ファンタジー）

ダリューンは人間の形をした災厄であった。力強く、しなやかな腕が宙で舞踏すると、陽光を弾いた長剣が海賊たちの頸部を両断し、潮風に濃い人血の匂いをまじえるのだ。海賊たちは腕力にすぐれ、身も軽かつたが、ダリューンの剣に対抗できる者はひとりもいなかつた。右に左に倒され、血の匂いを濃くするばかりである。

ダリューンの後方につづくふたり、ギーヴとジャスワントの剣技も、海賊たちを圧倒した。流れるように優美なギーヴの剣さばきは、流血の四行詩を歌い上げ、ジャスワントの剣勢はシンドウラの太陽のように激烈だった。

海賊たちの屍は、甲板に次々と横たわり、彼らは天国の寸前で地獄へと追い落とされた。ギーヴが甲板上を走り出す。せまい階段の上に舵輪があり、それを動かしている海賊を斬ろうとしたのだ。階段段下に着くまでに一度、刃鳴りがひびき、階段を駆け上がろうとしたギーヴはさりに上方から刃を突き出された。

落下する剣を受けとめ、飛散する火花をあびながら、そのまま自らの剣を突き上げる。強烈な手ごたえが、ギーヴに勝利を知らせた。頸すじから血を噴きあげて、海賊は階段を転落していく。

この間、ファランギースの弓弦が潮風に共鳴し、死の曲をかなでている。

#### ・解説

アルスラーン一行と海賊との戦闘シーン。たつたこれだけの文章に四人の個性的な戦いぶりを描き、風景の描写まで織りまさる。まつたくムダがないですね。

他にもダリューの獅子奮迅の戦闘シーンを描いた一文で、『その様子を未熟な吟遊詩人であれば、「斬つて斬つて斬りまくつた」としか表現できなかつただろつ。』

なんていうのがありましたけど。初めて読んだのは二十年以上も前ですが、今も心に残る一文です。

凡人が真似すれば「形容が多すぎる」、「まわりくどい」と感じる文章も、田中芳樹先生が書くとなぜかそれを感じさせません。やはり天才です。

『しあわせは子猫のかたち』より（ファンタジー・推理）

子猫、死んでしまったね。本当に残念。もしかすると、自分が死んでしまったということに、今は気付いていないかもしれない。わ

たしも最初のうち、自分が殺されたことに気付かず、普通に生活を続いているつもりだつたから。

でも、子猫もやがて、自分が死んだことに気付くにちがいない。そしてきみのもとを去ると思う。でも、その時が来てもあまり悲しまないでほしい。

わたしも、子猫も、自分が不幸だとは思っていない。確かに、世の中、絶望したくなるようなことはたくさんある。自分に目や耳がついていなければ、どんなにいいだろうと思ったこともある。

でも、泣きたくなるくらい綺麗なものだつて、たくさん、この世にはあつた。胸がしめつけられるくらい素晴らしいものを、わたしは見てきた。この世界が存在し、少しでもかかわりあいになれたことを感謝した。カメラを構え、シャッターを切る瞬間、いつもそう感じていた。わたしは殺されたけど、この世界が好きだよ。どうしようもないくらい、愛している。だからきみに、この世界を嫌いになつてほしくない。

今ここで、きみに言いたい。同封した写真を見て。きみはいい顔している。際限なく広がるこの美しい世界の、きみだつてその一部なんだ。わたしが心から好きになつたもののひとつじやないか。

#### ・解説

『失踪HOLIDAY』、および『失はれる物語』に収録されている乙一先生の短編。

人目を避けて生きる大学生の主人公と、何者かに殺され、幽霊になつた雪村サキ、そして彼女の飼つていた子猫との共同生活が始まつる。

抜粋したのはラストシーンで、雪村サキが主人公に宛てた手紙の一部です。

小説に年齢は関係ないけれど、若くして乙一先生の目に映る世界はすでに芸術家のそれであることに、深く感じ入つたものでした。ストレートな言葉が、胸に突き刺さります。

『ヘヴンリー・ブルー』より（恋愛）

（赤ちゃん……て？）

信じられない、とか。

（誰と……誰の、赤ちゃん？）

認めたくない、とか。

そんなこと以前に、脳みそが麻痺してしまって、うまく働かなかつた。いろいろな考えの断片は浮かぶのだけれど、そのすべてが、まるでビー玉みたいに頭の中のテーブルをころころと転がつて、何ひとつ意味をなさないまま向こうの端からぽとりと落ちる。ぐずれおちるよつに枕もとの椅子に座ると、お姉ちゃんの横顔が近くなつた。

（中略）

心はもむろんずたずたに傷ついていたけれど、お姉ちゃんのことは今でも好き……なんだと思う。歩太くんにいたつては、憎いけれど、本気で憎いけれど、それでもやっぱり好きで好きでたまらない。その気持ちはどうやらもほんとうなのに、そもそも歩太くんからはとつこの昔にきつぱり振られているというのに、どうして私は、二人のことを許してあげられないんだろう。

自分自身があまりにも見苦しく感じられてたまらなかつた。あんたにはプライドがないのか、と思つてみる。

ないのだった。少なくとも歩太くんのことにに関する限り、私にはとつこの昔にプライドなんかないのだった。

・解説

恋愛小説のバイブルと謳われた、『天使の卵』のアナザーストーリー。『おいしいコーヒーの入れ方』シリーズでもおなじみ、村山

由佳先生です。透明感のある、「バルトブルー」のような文体が大好きです。意外性のストーリーよりも、とにかく「文章で読ませる」。憧れます。

『樂園に酷似した男』より（恋愛・官能）

金を掛けねば掛けただけ執着するというつまらない言い回しはしかし私の身の回りではいかにも本当らしく口にされていた。

やらせてもらえないキャバクラだのクラブだの女の子に大金を費やして費やして費やしただけきっと大きく元は取れるとほとんど新興宗教のいじらしいじましい信念で今夜も金だけ払いに行く男達とか。

人が見ても神様が見てもただの無職の低脳の癖に性欲と虚妄だけは人一倍だという自称実業家だ芸術家だ役者だの男に貢いで貢いで貢いだけ必ずや薔薇色の未来となつて彼ではなく私がその薔薇色の人生を甘受できると思い込んでいたあんたの方がろくでもない奴かもと周りに呆らされている女達とか。

一回騙されたら懲りればいいのに元ヤンキー姐ちゃんが売り捌いている原価の百倍の値段がついた補整下着だの商品を売つてているんじやありません愛を夢を売つて分けて差し上げてているんですけどアダムとイブを騙した蛇の口調で迫つてくるマルチの商人にデモンストレーションされる洗剤だのを屠られる子羊の如き眼差しで買つて買つてただ買わされるだけの主婦達とか。

けれどそんな奴らに囲まれる私だつて決して高處から彼らを笑つて笑つて笑つているだけで済むはずがないのは誰よりも私がわかっていることなのだからせめて私は私を笑わないでいられるようにしたかったのに。

・解説

はい、とっても読みにくい文章です。これは冒頭ですが、この小説、なんと全編にわたって読点がありません。一冊丸い」と、ずっとこの調子の文体が続きます。セオリーで言えば悪文なのですが、なぜかイメージは心地よい音楽のように頭に流れ込んでくる。

作者は岩井志麻子先生で、もちろんこれ以外は普通の文章でお書きになります。超絶技法を持つ、じく一部のプロだけに許されるお遊び。生まれ持った文才というのではなく、努力じゃどうにもならんのだなあと、打ちひしがれた作品でした。

かなり私の趣味が出てしました。もっと紹介したいのですが、とりあえずこの五作品で。どれも個性的な文体、そして、密度の濃い文章ですね。好みの違いはあるかもしませんが、誰が読んでも「上手い」と感じるのではないでしょうか。私もこのレベルに、少しでも近づきたいものです。

## 第十二回 ファンタジーは何でもあります！？

お久しぶりの『悪文排斥！』第十二回で『あります。

前回の続きで『良文万歳？』をやるつもりでしたが、ちょっと予定変更。今回はとても大切な小説の基礎を語りたいと思います。

というのは、先日、「なるつ」においてとても興味深いエッセイを拝見しました。作者様の許可を取つていないので作品名は挙げませんが、「なぜ『なるつ』では異世界ファンタジー作品が多いのか」ということを語つたエッセイで（あ、ほとんどタイトルそのままかな……）、その内容を要約すれば、「ファンタジー＝何でもあり」と勘違いしている人が多いのではないか、ということでした。（思いつきり要約しました。実際には、この作者様独特の言い回しでファンタジーを語つた面白いエッセイです）

なるほど……。確かにファンタジーに限らず、ある意味小説は「何でもあり」ですよ。物語のルールなんて存在しません。ただ、そこにはひとつ条件がありますて、

『小説は例えファンタジーであれど、現実の社会を映し出していく』ことが基本中の基本

なのです。

いや、別にとんでもない設定がいけないと言つているのであります。十八歳の女社長が存在しようと、魔王を一撃で倒す勇者がいようと、ある日突然異世界に迷い込もうと、それは一向に構わないのです。

ただし、「ちゃんと納得できる理由があれば」。別の言い方をすれば、「矛盾のない世界設定で、ちゃんと筋が通つていれば」。

『視点』のときにも言いましたが、小説は読者が手に取った瞬間、作者との間に「どんな設定も無条件で受け入れる」という暗黙の了解とも言える契約を交わします。ですから提示された設定世界を「ありえない」と突っぱねることはできません。

ただ、明らかな設定の矛盾や掘り下げの甘さは「何でもあり」とは許されない。なぜなら、（これも繰り返しになりますが）現実の世界も小説世界も、「ちゃんと筋が通っている」とが最も大切なことだからです。

例えば、殺人がいけないというのはこの世の倫理であって、異世界を舞台にすればそれがまかり通る世界であつてもいいのです。

では、果たしてそんな世界で、人々はどんな生活をしているのか。人を殺すことさえ許されるなら、文字通り無法地帯です。人殺しが許されて、ものを盗むことは許されないなんてことはないでしょう。強い者しか生き残れない。そんな世界に女性や子供は生きていなし、つまりは遠からず滅亡を迎える頽廃の世界です。

百歩譲つて、その世界では性別の区別なく『強い者は強い』のだ  
としましょうか。生まれたときから強い奴が生き残る！

……もはや住んでいるのは人間じゃありませんね。（笑）

設定が現実離れするほど、説得力を持たせる文章力は高いレベル  
が求められます。

それをも無理矢理説得させたとして、いつたい誰がそんな世界や  
キャラクターを自分の身に置き換えて共感するんですか？

よく言われることですが、異世界に飛ばされた主人公が、どうして言葉が通じるのか。通じるならなぜなのか。高度な文明を持っていて、異人との言語障害がないとか。であれば、他のことはどれだけ発達しているのか。そんな世界に飛ばされた現代人は、どう感じ

るのか。

例えば、黒船を初めて見た日本人がどれほどびっくりしたのか、想像はつきますか？

「正しく想像」するには、当時の時代背景の知識はもちろん、人間への深い理解が必要になります。これは異世界を描くにしたって同じことです。

（うん、これはとても大切な事だと思う。文章が云々、視点が云々よりもっと大切なことだ）

『現代物は書けないからファンタジー』という人もいるのかもしませんが、現代物が書けない人に異世界ファンタジーは書けません。以前も言いましたが、あり得ない世界にリアリティを持たせるという点で、ファンタジーは現代物とは比べものにならないほどの筆力を必要とするのです。

#### ・なぜファンタジーに現実社会が関係あるのか

それを語るには、まず「小説とはなんぞや」ということですね。かなりの難題でいろんな答えがあると思いますが、私はその答えのひとつに「小説とは人を描くことである」というものがあると考えます。

それには、自分のキャラを生きた人間として扱うこと。（これは多くの方が賛同していただけるのではないでしょうか）

そうすればおのずから、その人にどんな感情があつてこの台詞を口にするのか　ということは、この人はどんな性格で、どういう境遇で　するとその人格が形成するに至つたどんな『社会』が背景にあるのか、が問題になつてきます。

つまり、ちゃんと生きた人間を描こうと思つたら、矛盾のない世

キャラクター

界を作り上げ、その社会で育つたことを人間に反映させることが必要となるのです。

そして、小説というのは書き手による現実社会と人間への理解度が、まともに小説世界を形成してしまいます。

一般的に『ライトノベル』を大人が読まない理由は、「現実の社会を映し出しているとは言えない」からです。もちろん、すべてがそうだとは言いませんし、一般小説であつてもそれができていないものは小説として失格ですが。

しかし、例えば「すぐに異世界に適応できるなんて、どんな神経で、どういう育ち方をしたのか」という根本的なことさえ解決しないものを、多少なりとも社会というものを知っている大人は、小説として面白いとは思わないんです。

架空の世界だから　いや、架空の世界だからこそ、虚空であつてはならない。そこはちゃんと感情を持つた「人」が住む世界であり、「社会」を形成していなければなりません。

よく、「小説を書くには人生経験が必要である」なんて言われます。人生経験とは、すなわち社会常識の把握と人間への洞察力のことです。もちろん、ただ歳を食えればいいというわけではありません。無駄に年を重ねた大人だつているし、若くても人や世界に対する洞察力を持つた人はいますからね。

私が好きな『なるい』の作品に、おこき先生の『ミリオン』というSFファンタジーがあります。技術的なことを言えば、正直申し上げて、これより上手い作品は多々あると思います。しかしながら、これが文章云々なんて言わせないほど面白い。理由はやはり、おこき先生の世界と人間への深い理解度、そしてそれを根本とした確かな想像力があるからなんですね。だから私のような中年読者も虜になる。

「現代が舞台の小説は書けないから」、「ファンタジーなら何でもあり。いざとなれば『魔法』の一言で片付くから」という逃げの理由でファンタジーを書いているなら、そんな小説はろくなものではありません。自らの無知と稚拙さを糊塗するために、異世界ファンタジーを選んではいけない。

……とは言つても、私自身も中高生の頃はファンタジーばかり書いていました。それはやっぱり「現代物なんて書けないから」だったし、自分の書いている世界と現実社会がどう違うのかさえわからませんでした。ファンタジーが理解できないという大人たちを「想像力の貧困」と決めつけていました。今から思えば、自分が何も知らないことさえ知らなかつたのです。

社会常識を身につけ、ちゃんと人と付き合い、世界と人間のやることに共感しようと努めること。

ファンタジーに限らず、良い小説を書くためにもっとも大切なことだと思います。

## 第十四回 小説のオリジナリティとは

『悪文排斥』第十四回です。今回も文章ではなく、良い小説とは何か。ことに、小説のオリジナリティについて考えてみたいと思います。

### ・オリジナリティの意味

物語のパターンは、無限にあるといえば無限にあるし、限られているといえば限られています。

「物語は一つのパターンしかない。すなわち穴に落ちる話と、そこから這い上がる話」とか、

「ストーリーはとっくに出尽くした」

なんて言われるとおり、正直、今さら完全なオリジナルの小説なんて書けるはずもありません。

書けたとしても、一生のうちでせいぜいひとつか二つでしょう。また、そう幾つもオリジナルの物語が書けるのだとしたら、とっくにプロになつてこるはずです。

そんな独創的な話は誰も望んでいないし、訳のわからん独自の世界を造るより、誰かの世界観（設定という意味ではなく、例えば「世界」と言われるような、物語の雰囲気）を踏襲する方が、ずっと有効的で理解が得られやすいはずです。

『なるべ』においては、「似たような話」は、そこらじゅうに溢れかえり、別の人気が書いた違う小説なのに「どこかで読んだ気がする」ものが多いようです。

ファンタジーでは異世界もの、ホラーではゾンビですか。別段、それが悪いわけではないのですが。

ところが、同じような話でも、片やたくさんの支持が得られ、一方はアクセスが伸びないという現象が起きます。もちろん、文章力や構成力といった技術の差もあるでしょう。

しかし、肝心なのは技術ではありません。

私は以前、「もつとも面白い話や感動する話は、この世で一番ありふれた話だ」ということを申しました。

言い換えると、「人間の感情で重大なものはすべて、一番ありきたりで普遍的なものだ」ということです。

例えば、恋。  
誰かを好きで、嫌いで。好きな人に、自分のことを好きになつてもらえない。好きな人に嫌われた、去つていった、死んでしまった。親子の情や嫉妬。または欲望、金銭欲、情欲、独占欲など。

小説というのは基本的にはこうした人間のもつともありきたりな感情を描くもので、決してそつ多くのバリエーションがあるわけではありません。

思いついたとした凄く独創的な話  
例えば、ある日突然、巨大な昆虫になつてしまつたなんていうのは、文学かもしれないけれど、いつたい誰がそんなのを我が身に置き換えて感情移入するのでしょうか？

これは文章に関してもそうですが、個性を標榜するあまり、とんでもない形容詞を編み出そうとしたり、理解不能の世界を造るなんていうのはアホのやることです。

ともかく、小説の描く感情が普遍的なものである以上、それをもたらすシチュエーションというのは、やはりいくつかの人間関係に収斂されるということです。

そうしてます、あまりにパターン化されつくして、今さら自分のテクニックではどうにもならないような話はとつと諦めましょ。

好きな人が不治の病にかかるて、残された日々を一生懸命生き、愛し合ひとか。

まあ、『セカチュウ』や『美丘』以上のものが書ける自信があるなら別ですが、まず無理でしょ。

長編なら、多少ありきたりでも展開を売りにすることもできますが、中、短編ではたつたひとつ売りが命です。このキャラ、この台詞、このシーン。それがすでに誰かがやっていたのだとしたら、その話はおしまい。書いても意味はありません。

・ではどんなものが「オリジナリティのある小説」なのか

一番大切なのは、「自分はこの小説の、何を一番書きたいのか」を考えることだと思います。いや、『テーマ』なんていひ「大層なものではありません。

自分が惚れたこのキャラクター、この決め台詞、感動するに違いないこのワンシーン。何でもいい、何かひとつでいいから、「自分が書きたいもの」があること。そして、それをどう書いたら読者に一番伝わるかを考えること。

ただ何か書きたいだけ。

書きたいものはないけど、小説が書きたい。

みんな、どんな小説が読みたいですか？

こんな動機で書かれた小説は、ただのゴミです。書くのも読むのも時間の無駄。自己満足で書くならいいけど、『ならう』た（もち

ろん公募にも）投稿してはいけません。

なぜなら、小説とは人に何かを伝えるものだから。小説は、読者のために書くものではありません。小説を通して、自分をわかってほしくて書くものです。自分の中に伝えたいイメージがないのなら、小説を書く必要はありません。

ダメな小説とは、ヘタな小説でもなければ平凡な小説でもありません。書き手の感動がないままに書かれた、「伝えたい」という気持ちのないものや、誰にも理解できない独りよがりの小説です。

あんな話がウケるだろ？。いや、こっちの方が面白そうかな。こうした安直なストーリー選びはそのまま中身の薄さに直結し、「またこの話か」と思われるのがオチです。これがオリジナリティの欠如です。

作者自身が自分の作品に惚れ込んでいないままに、読者の共感は得られません。

物語を思いついたら、書く前に「自分の書きたいものは何なのか」を明確にする。そして、それを読者に一番伝わるように書く。

それが、「物語のオリジナリティ」ではないでしょうか。

## 第十五回 小説と作者

お久しぶりです。円城寺まどかです。『悪文排斥』も第十五回を数えました。

ネタはとっくに死きてるのに、「書きたいことが出できたら書く」つもりで、完結させないまま放置プレイしています。おかげで約三ヶ月ぶりの更新となってしまいました。

今回はまたも小説の精神論を語ります。「はじめに」で申し上げたとおり、実力のない人ほど精神論が大好きなんです。ええ、私のことですよ。

このエッセイも、もはや酔っぱらいオヤジの戯言たわいごとと化してきましたが……とりあえず自分のことは棚に上げ、今回も立派なことを語つてみせましょう。

すみません、前置きが長くなりました。それでは行きます。

### 『小説には自分が表れる』

いえ、小説に限らず、絵画や音楽など、芸術と言われるものには自分の心が映し出されます。小説とは自己表現なのだから、自分を出して当然。小説を書く人は、誰だって自分の考えた物語に共感してほしくて書いているはずです。

「でも、本当の自分をさらけ出すのは恥ずかしい」

「こんなことを書いて、嫌われたらどうしよう」

そんな心配をして、自分を出せずにはいと感じている人もいるのではないか。

もしくは、「小説の中でだつたら違う自分を出せる」と思つてい

る人もいるかもしません。

でも大丈夫です。「自分を晒せ」と言っているのではありません。小説には「自分が出てしまう」と言っているのです。

作品と作者は別物とする人もいますが、私はそうは思いません。むしろ小説こそは何よりも雄弁に本人を語ります。普段、どんなに良いことを言っている人でも、根が嫌な奴は嫌な小説を書くし、ケチな奴はしみつたれた小説を書きます。

いくらそれを隠そうとしたところで、偽つてことそのものが本人を表してしまっているんです。

そもそも本来の自分がそうなのだから、自分を出していることにも気づいていません。小説に表れる人柄こそが、その人本来の人間性なのです。（だからって作者の人格否定までしていいって意味じゃないですよ。念のため）

小説とはただ紙に（パソコンに？）向かって書けばいいというものではなく、壮大な小説を書こうと思ったら、小さな自分が大きくなるほかはありません。志が卑しいままに、素晴らしい小説を書くことはできないのです。

これは別段、「立派な人間になれ」という意味ではありません。「立派な人」の書く小説なんて、きっと最高にツマラナイですから。そうではなく、小説を通して読者に自分がどう見られるかを恐れなくて済む人間でありたいのです。

私は、陰惨なホラー小説ばかりを書いています。生まれつき腕がない不具者。病弱な薄命の美少年。受け入れがたい不条理な運命。

「ありのままの自分」がどうしてもそういうものに惹かれてしまうのだから、それを一番に出してゆくほかはないのです。

書いていて楽しくないことは、一行だつて、一文字だつて書いて

はいけない。それが、自分の書いたものに責任を取るところではないでしょうか。

もちろん読者に対しても、気に入られようとして自分を上げてはいけません。誰が、何をどう書いたところで、百人が百人に気に入られる小説などどうして書けるでしょう。全員の意見がぴったり合うことなど、決してないのです。

どう見られるかを気にするより、どんな批判を浴びようとも「これが自分だ」と言い切れる自信を持ちたい。しかし、そのためには自分を磨きたい。センスや好みが違うのは仕方ないけれど、無知や非常識をそしられたくはない。そのときのベストの自分を読者の前に出せなければ恐ろしくて裸の心を晒せるものではありません。

「私が書きたいのは私小説や純文学でもなければ、エッセイでもない。だからこんなことは関係ない」と思うでしょうか。

自分自身と作品を別物ととらえるかもしれません、むしろ無意識に選ぶ言葉やストーリーにこそ「本当の自分」が出てしまうものなのです。それが怖い。だから小細工などせず、どこからどう見られてもたじろがぬ自分になるよりほかはないのです。

「小説とは、その人の内面をすべてつりし出す鏡である」

これは私が崇拜する作家の言葉です。実は私は今でも、「小説に映し出される自分」が恐ろしくて仕方ありません。だからアクセス数や評価ポイントに一喜一憂するし、寄せられる感想を読むのが嬉しくもあり、怖いのでしょうか。「どう見られてもたじろがない自分」になるためには、まだまだ修行が足りないようです。

## 与太話 その？ 役に立たない応募原稿のルール

今さら基本的な原稿の書き方について、べべべべ述べるつもりはありません。『プロっぽい文章』でも申しましたが、改行ごとに一マス空けるだの、カギ括弧の最後は「。」をつけないだのというのは、物書きにとつて至極当然のこと、いわゆる文章の身だしなみです。

ただ、身だしなみやマナーというのは、正式なもの求めてゆくと実に細かく、「今さら誰もそんなこと気にしねえよ」というものまであるのです。

公募に出す原稿においても、本来は細かいルールがあります。ただ、これらを守つたところで、選考に有利になるようなことはまったくありません。今回はそんな「どうでもいいルール」を紹介します。

ワープロ書体を避け、正字で書く

正字とは、新聞類がようやく採用を始めた本来の漢字です。

- ・「頬」 「？」
- ・「哩然」 「？然」
- ・「掴む」 「？む」
- ・「噉む」 「？む」
- ・「顛末」 「？末」
- ・「体躯」 「体？」
- ・「蠅燭」 「？燭」
- ・「壺」 「壺」

と、まあこんな感じでしょうか。出版されている本を見ればわかるとおり、ほとんどは正字が使われているはずです。ワープロ書体でもまったく問題はありませんが、正字を使うことにより、より高い国語見識をアピールできるそうです。

(縦書きPDFでは、正字は文字化けして「ご覧になれます」。『なり』に投稿の際は、むしろワープロ書体でないといけないようです)

### 禁則処理の体裁

禁則処理というのはおわかりですね。行の冒頭に、句読点やカギ括弧の「閉じ」があつてはいけないです。

これらはパソコンで執筆すれば自動で処理してくれるため、普段は特に気にすることはありません。

しかし、この禁則処理には二種類あるのを「存知でしょうか？」無理やり文字を詰めて句読点を入れる「追い込み」と、原稿の欄外に入れる「ぶら下げ」です。文芸出版物では「ぶら下げ」が一般的なので、応募原稿を印刷する際にも「ぶら下げ」とすることをお勧めします。

(『一太郎』の場合、「文書スタイル」の「体裁」で設定できます)

### 傍点：

言葉を強調したいときに、文字の横に傍点を振ります。あまり多いと文章がうるさくなりますが、効果的に使えば非常に有効なアイキャッチチャーポイントになります。

この傍点、『なり』では黒点を使っている人がほとんどですよ

ね。応募原稿は明朝体で書いていると思いますが、本来、明朝体に振る傍点は、『ゴマルビ』、・、・、『』です。些細なことで、これこそ選考にはまつたく影響ありませんが念のため。

### 原稿用紙換算

公募の要項には、次のようなものがあります。

- ・原稿枚数及びフォーマット

400字詰め原稿用紙換算200枚から400枚。

データ原稿の場合の出力形式は、A4用紙ヨコにタテ書き、適宜の行間をとり、40字×40行で出力してください。  
タイトルの横に、原稿用紙換算枚数をご記入下さい。

このような場合、普通は単純に一枚を原稿用紙四枚に換算します。つまり、 $40 \times 40$ のフォーマットで百枚書けば、規定の原稿用紙換算400枚ちょうど。

しかしこれ、実際に原稿用紙と同じ $20 \times 20$ で置き直すと400枚に満たないのです。

いったいどちらが本当の枚数なのか？

答えは、「どちらでもよい」です。そもそも枚数規定というのはいい加減なものらしく、中には350枚までの規定なのに700枚の作品が一次を通過した例もあるのだのか。

まあ、さすがにそれはやりすぎとしても、一割程度の規定オーバーは許されるようです。（もちろん規定枚数に満たない場合も）ですから、「 $40 \times 40$ を四枚分とする」としたら規定を越えてしまった、という場合は $20 \times 20$ での置き直しを根拠に、逆にちょっと少ない場合は「 $40 \times 40$ を四枚分とする」を根拠に算出すればOKです。

変に書き加えて文字通り「蛇足」となるよりは、そのまま送つてしまつた方がいいですね。もちろん、そのときは正直な原稿用紙換算枚数を書く必要はありません。規定枚数に収まらなくとも、規定内の枚数を表記しておきましょう。

### 梗概って何？

たいていの公募には、1200字程度の梗概を添付するように指示があります。梗概とは、つまり「あらすじ」です。

『なるつ』の「あらすじ」とは別物です。

「果たして彼の運命は！ 続きは本文をご覧下さい」

なんていうのはいけません。ちゃんと最後まで書いてください。

例えミステリーであっても、ネタバレを嫌がって

「 の正体は実は で、それを知つた に無理矢理 × × ×

……！」

と、肝心なところを伏せ字にするのも御法度です。（なんですかつ、このヒロイナラすじは！）

ちゃんと要領よく、原稿用紙三枚程度にまとめることが。これも、「1200文字に空白は含めるかどうか」なんてことなど「でも」いです。文字数は、あくまで田安なので。

ちなみに、梗概を書くのが苦手という人。どうして苦手なのか教えましょう。（厳しいことを言います。泣かないでね）

それはすばり、「あなたが書いた小説は、1200字のあらすじを書けるだけの中身がない作品だから」です。

何ひとつ重要なシーンがないから、何をどう書けばいいかわからぬ。（はつきり言つてどうでもいいストーリー）自分で書いた梗概を読むと、あまり面白やうに感じられない。（間違いなくつまらない作品です）

だいたい、小説は書けるけどあらすじが苦手なんてあり得ないです。それは自ら「私は小説がヘタだ」と言っているようなものですからね。

梗概ところのは応募前のやつつけ仕事になりがちですが、苦手な人は最初に書いてしまうのもひとつ手です。面白そうなあらすじが書ければ、きっと作品も面白いものができるのではないでしょうが。

### 手書き原稿

今どき少数派だと思いますが、「応募はワープロ原稿に限る」という記載がない限り、原稿用紙に手書きで書いて応募してもOKです。ただし、選考には不利です。（どう考えたって読みにくいですからね）

手書きを理由に落選することはありますんが、よほど面白いものでない限り、読んでもらえないと思つた方がいいです。それでもえて手書き原稿で応募する人は、次のことにつけてください。

- ・丁寧な、読みやすい字で書く
- 字のウマヘタは関係ありませんが、殴り書きみたいな原稿はやめましょ。また、いくら達筆だからといって、草書で書き綴るもの控えてください。読めません。

### ・黒のペンで書く

鉛筆はもつてのほかですが、ボールペンも読みにくいのでやめましょう。必ず、「黒インクのペン」で。昔は「黒、もしくは青のペン」と言わされました。今は黒に限つた方が無難ですね。ちなみに鉛筆がNGなのは、何枚もコピーを取つた場合に[写]りなくなるからです。

- ・修正箇所のある原稿を送らない
- ・締め切り間際のプロの原稿じゃあるまいし、斜線で消して欄外に修正文を書いたような原稿を送りつけてはいけません。もうそれでけで読む気をなくします。
- ・本来は修正液を使うのも不可。一文字でも間違えたら、原稿一枚全部を書き直してください。小説を書く者が、その程度の手間を惜しみでいるかもしれません。
- 応募原稿に限っては、手書きは百害あって一利なし。小説を書くなんてほとんどお金のかからない趣味だし、まして公募を指すのならば、パソコンとワープロソフト、プリンタぐらいはそろえましょう。（あと国語辞典もね）
- その他注意点
- ・ページナンバー
- 原稿には必ずナンバーを振ってください。万が一バラバラになつたら、誰にも元に戻せません。
- ・右肩を閉じる
- 原稿の右肩を閉じてください。紐で縛るなら、穴を開けてL字形に。ダブルクリップが無難です。厚くなりすぎる場合は二つに分けてもOKですが、必ずひとつの中に入れください。リングはまとめが悪いのでNGです。
- ・余計なものを添付しない
- 編集部への挨拶文は不要。設定資料やキャラクター紹介、世界地図も入れてはいけません。（そんなものを見ないと理解できない小

説を書くんじゃないよ。小説のことは全部小説の中で決着をつけるのー。)

- ・へんな匂いをつけない

昭和のラブレターじゃあるまいし、まさかこいつそり香水を忍ばせる人はいないと思いますが。よくあるのがタバコの臭い。封筒から出したとたん、「臭えー」と辟易することがあるそうです。これも読む気が失せるということ。気をつけましょう。

## 与太話 その？ 役に立たない応募原稿のルール（後書き）

今回の内容は、半分以上が『円城寺まどかがナンボのもんじゅい！』でお世話になった下読み編集者様の話が元になっています。『～だそうです。』、『～らしいです。』と伝聞系の文章が多いのはそのためです。

また、これらはあくまで一個人の見解のため、原稿応募の際は主催者発表の要項をよくご確認ください。

## 第十六回 円城寺まどかをフルボッコ！？（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

「悪文排斥」第十六回。今回から数回にわたり、再び拙作の書評を公開します。

批評作業をしていただいたのは『円城寺まどかがナンボのもんじやい！』でお世話になった編集者様。（公募の下読み経験もある現役のプロ編集者です）

評価を受けたのは拙作、『霧乃宮一族の滅亡』。怪談をテーマにした公募の落選作です。

<http://ncode.syosetu.com/n98199/>

すでに「文章、視点に関する基本的なことは問題ない」とのこと

で、今回は「読みながら指導が入る」という形式になりました。

（指導をよりわかりやすくするため、「作品も含わせて全文掲載」の形を取りました。数回にわたって連載するほどのボリュームになってしまったのはそのためです）

より実践的な内容ではありますが、相変わらず台詞や構成については同じことを言われています。サブタイトル通り、『円城寺まどかをフルボッコ！』の状態ですね。

レポートでは編集者様が言及した部分を色分けしてわかりやすく記載していたのですが、画面上ではそもそもできません。編集者様の言葉は『編）【】』として、それに対する私の言葉は『ま）』とします。

それではさっそく行ってみましょう。

編) 【おもむか】

作業の最初に「表記揺れ」を実行しました。応募作は外行きの文章ですので、やはり事前に「最低限の瑕疵つぶし」を経ていたほうが印象はよくなります（一太郎／ATOKという優れたツールを使いなのですし）。お手許の元原稿と履歴なしファイルでの表記揺れ／文体実行の結果を見比べてみるのもおもしろいと思います（「履歴なしファイル」作成後にも手を入れているので、「履歴のない修整点」が何箇所かありますが、これについてはご容赦ください）。

また、「作品内容から漢字表記を多めにした」との」とですが、これには疑問が残ります。言葉は単なる暗号、読者の脳の中で文意（＝書き手が暗号に封入したもの）がデコードされて初めて「存在」となるもののですので、表記体裁にこだわってもほとんど意味がないと考えられるからです。例えば、「平易かつ明快な文章でありながら、ぞつとするような恐怖を誘つ、「」んな観点を持つたほつが有意義なのではないでしょうか。

ですので、「多くの『プロ作家』の原稿にも散見する、どうにも違和感の残る漢字表記（これは編集・校正に携わる者特有の感覚かもしれません）」については、ひらがなに置換しました。特に「云う」、これは辞書類に規定のない「非正式の漢字表記」ですので、「多数表記」ではありましたが置換しました。

ま）作品の時代背景からあえて難読文字を多用したのですが、さ  
つそくダメ出しされましたね。

しかし、僭越ながら、

く表記体裁にこだわってもほとんど意味がない

とは思いません。「平易かつ明快な文章でありながら、ぞつとするような恐怖を誘う」のはまさしく私の目指すところですが、文体とは小説世界に則した言葉の選択や、何を漢字で何を平仮名にするかといった些細なことから構築するものだと思っています。

まあ、きっと今のこところは「そんなことにこだわっても自己満足の域を出ない」ということでしょうね。そんなわけで、ここに掲載された作品は全文にわたって校正が入っています。

よろしければオリジナルの原稿と見比べてください。（『なるつ

投稿分とは章立てが異なります）

\* \* \* \* \*

## 序章 霧乃富紗江子の死

やわしい母でした。

つららかな春のそよ風のよう、その顔にはいつも柔らかな微笑みを浮かべていました。

着物を着て庭の桜の木の下に立つその姿は、まるで一幅の絵画のように美しく、私たち子供にとつても温かの母でした。

江戸時代から薬問屋として栄えた名家、霧乃富の末裔。大正の御代となつた今ではすっかり落ちぶれてしましましたが、気高い矜持だけは失わなかつたのでしょう。年老いても、その立ち居振る舞いには優雅なものさえ感じられました。

長らく患つていた肺病のせいで、一年前、ついに床に臥せつてしまふまで、母はある古く薄暗い霧乃富邸で、孤独な毎日を過ごしていました。

家を出でいつた彰一兄さんへの恨み言は、たまに訪ねていく私にも、玲子姉さんにも漏らすことはありませんでした。思い浮かべる

母の顔は、いつも慈愛に満ちた微笑みを浮かべています。本当に、やさしく誇り高い母だったのです。

だから。

だから今、死の間際にある母の姿が、私にはどうしても信じられないませんでした。いえ、私だけではありません。姉夫婦の屋敷、矢野邸。その離室に集まつた誰もが、玲子姉さんも、亮平義兄

（編）【応募原稿でのルビは、よほど特殊な読ませ方をする場合以外避けたほうがベターと思います。読む側としては正直煩わしいですし、「ルビで小細工するより前にやるべきことがあるんじゃないの？」が、下読みの偽りざる実感だと感じます】

さんも、そうして、駆けつけたお医者様までも、その顔に恐怖と驚愕の色を浮かべ、たじろぐように後ずさつたのでした。

「こんな……こんなことがあるのですか」

亮平義兄さんが、かすれた声で言いました。布団に横たわる母を指す手が、目に見えて震えています。亮平さんにすがりつくようになっている玲子姉さんの顔は、薄暗い洋燈の下でもわかるほど蒼白で、声も出ないようでした。無理もありません。三日前に吐血して以来、意識のなかつたはずの母は、低い呻き声を上げながら、射抜くような目で私たちを見ているのです。血走った双の目。白髪は逆立ち、唇はめくれ、それはまるで鬼が乗り移ったかのような、恐ろしい怒りの形相でした。

「突然意識が戻るのは、そう不思議なことではない。人間には、まだ説明のつかないことがいくらもあるからのう。きっと、紗江子さんは何か言い残したいことがあるのではないか？」

傍らで見守る、年老いたお医者様の声は冷静なものでした。しかし、落ち着いた口調とは裏腹に、いちばん驚いていたのはお医者様自身だったのでしょう。もう決して目覚めることはないと自ら診断し、死を迎えるとしていた母が、いきなりカツと目を見開いたの

ですから。肺病特有の壊れた笛の音のような呼吸と、土色にむくれた両の足。死は、すでにそこまで迫っているというのに。

それは、目覚めたというよりは、何かが憑依したといったほうが正しいのかもしれません。眉間に皺を寄せ、大きく見開かれた目。獰猛な鼻と、今にも？みつかんばかりの口。昔日の面影はどこにもない鬼の形相。こんな恐ろしい顔をした母を、私たちは見たこともありますでした。

地の底から何かが這い出てくるような獣じみた呻き声は、離室の窓を叩きつける春の夜の嵐と、闇を引き裂く雷光と相まって、今にも姿の見えぬ魔物が現れる前触れのようです。私は思わず、『ぐりと睡を？み込みました。

本当に、これが母なのでしょうか。あのやさしく、凛とした表情の裏に、今まで鬼の顔を隠していたのでしょうか。私は霧乃富紗江子の娘として、三十七年もの間まつたく氣づきませんでした。まさに命の灯火が消えようとしている瞬間、どういうわけか母はついにその仮面を脱ぎ捨てたのかもしれません。

「お母ちゃんが言いたいことって……？」

亮平さんの腕をぎゅっと？んだまま、玲子姉さんが上擦つた声で、誰にともなく問いを発しました。

「そこまではわからん」

枕元で見守るお医者様が、答えにならない言葉で返します。

母の心残りが何なのか、私は何となく予測もついていました。私たちに一言も愚痴ることはありませんでしたが、

？それはおそらく、霧乃富の家に戻つてこない彰一兄さんのことでしょう。二十年前、放蕩にふけっていた父がついに帰らなくなると、それを機に、彰一兄さんも母と私を残して家を出ていきました。カフェで出逢った、女給との駆け落ちでした。

女学校を出た私も、その一年後には結婚し、母は長い間、あのただつ広い霧乃富邸で、孤独な毎日を送ることになりました。

あれつきり、一度も姿を見せない彰一兄さん。母はきっと、最後に息子に一田会いたいのに違ひありません。？【この箇所の指摘については後述】

私は怖いところよりも氣の毒で、母が横たわる病床にじり寄りました。

「お母ちゃん、どうしたの？ 何か欲しいものがあるの？」みんなここにいるよ。お母ちゃんのために、みんな集まつたんだよ」

私は幼い子供に言い含めるような口調で話しかけました。すると母は、そんな私さえも般若の面のようにつり上がった目で見据えるのです。真つ赤に充血した田の奥には、確かに憤怒の炎が渦巻いていました。

そうして、あれ?とか母はその口から言葉を発したのです。

「……まあだ……ここに来ておらん者が……おる」

それは、明らかに母のものではない、ひどくしわがれた低い声でした。さすがのお医者様も、思わず小さな悲鳴を上げます。あまりのことに、亮平さんと姉さんは馬鹿みたいに口を開けたまま、声も出ないようでした。一人寄り添い、田の前で起きている恐ろしい事態に震え上がっています。

私は、怖いとは思いませんでした。どんな変貌を遂げようと、ここにいるのはたった一人の母。もう、余命幾許もない私の親なのですから。

「お母ちゃん、みんないるよ。私も、お姉ちゃんも、亮平さんも」

「嘘をつけ！」

母はぴしゃりと言いました。その顔が、さらに怒りに引き裂みます。

「まだ……みんなそりつてはおらん」

どうしてそんなことがわかるのでしょうか。どうして、私の言ひつけとに答えるのでしょう。もつ、とつて田はこの世を映していないはずなのに。耳は轟く雷鳴さえ聞こえていないはずなのに。そ

うして、死期はすぐそこに迫っているのに。それなのに母は、今にも？みからんばかりの勢いで吠え立てるのです。本当に、悪い憑きものにでも取り憑かれたようでした。

「まだ、誰か来ていない親族がおられるのか？」

少し冷静さを取り戻したのか、お医者様が声を潜めて尋ねました。姉夫婦は互いに見交わし、首を振ります。答えるつもりはないようです。

「実は、長男が」

私は姉夫婦を気に懸けながら、遠慮がちに口を開きました。

「香奈恵！」

「香奈恵ちゃん　！」

\*\*\*\*\*

### 【（このままで感じる）ことをお伝えします】

まず、作品冒頭から多数の固有名詞（＝人物）を登場させるのは定石から外れます。読者が一度に識別できる人数はせいぜい3人、それも各人物のキャラ立てがすぱっとおこなわれるのが前提で、名前／立場だけでは識別できないのです（現状では「キャラ立て」の要素はほぼ皆無、例外的に言葉が費やされている「母」についても悪言をお許しください　美文調の記述と感じます）。したがって、この時点で「『誰が誰だかわからない』なにがなんだかわからない』事態が発生しつつある」と言えるようなのです。読者の側には「繰り返し読んで『誰が誰か』を記憶しなければならない義務」はないですから、「読者にすんなり記憶してもらう工夫」を心懸けてください。

また、この場面が冒頭に配置された理由は、「基本的な事実関係を読者に提示する」だと思えますが、ならば、その「伝えておかなければならぬ事実」を、潔く、すぱっと、主人公自身の「声」で伝

えるのが、これも基本です。

「実は重要な場面をだらだらと進行させながら、強引な回想を繰り返して解説をする」。これもお伝えしにくいことですが、現状の書き方はまさにその「多くの応募者が犯す誤り」に当てはまってしまうようです（「書き手の都合のみで『読者の都合を考慮しないで 提示されている解説』と考えられる部分を『』で表示したので参考になさってみてください」）。

いざれにせよ、作品冒頭に関しては読者も覚悟しているので、「書き手の都合による解説」もある程度は受け入れてもらえます（ただ、その「解説」そのものにできるかぎりの魅力を与えるのが書き手の義務とも言えるのですが）。とにかく、「場面記述と解説の混在（…や、のちの…の記述が作品もしくは各ブロックの冒頭もしくは末尾以外にある）」、「」だけは避けるようにしてください。

以下、編集者によるリライトです。

『一家・一族の歴史や確執などというものは、他人から見れば実にどうでもいい話だろう。実際、わたしの一家に起こったもうもの出来事はいくぶんの教訓、そして現象面での獣奇性のようなものを含んではいるものの、それを他人に伝えることに関しては正直躊躇せざるを得ない。

ただ、最初から最後まで「それ」に立ち会つたがゆえの鮮烈な印象といったものがあるのも確かで、この感覚をなんとかしてわかつてもらいたいという否定しがたい感情があるのも事実なのだ。

だから、拙い筆と自覚しつつも、あえて「それ」を書き記してみたい。

前提になるのは、絶望の中で死んだ母の憎悪、そしてその怨嗟の対象である私の兄・彰一の放蕩だ。

いまから一十年前、明治三十六年の夏のある日、明け方にこつそり戻ってきて着替えなどを漁りはじめた兄を、激昂した母がなじつ

た。

「おまえは本当に理解しているのかい。いま出ていったら、この家の敷居は一度とまたがないんだよ。しかも、相手があのあばずれの女給とあつては、もう世間の笑いものじゃないか。この家を守るために、おまえの戸籍さえ抹消するしかなくなるんだよ」

当時九歳だった私は兄の部屋の向かいで寝ていたわけだが、細く開けた障子の隙間から見える寝乱れた寝間着姿の母は文字通り般若の形相で、手許に包丁でもあればためらいなく刺し殺していただろう。以上は結末を読まない時点（＝ここより前だけを読んだ時点）で書いてみました。

\* \* \* \* \*

案の定、姉夫婦は血相を変えて異口同音に私を咎めます。私は口を噤み、力なくうなだれました。

?姉夫婦の前で、彰一兄さんことは禁句なのです。

それは、仕方のないことかもしません。家を出た彰一兄さんに代わり、動けなくなつた母の面倒を看ていたのは、亮平さんなのですから。年老いた病気の母を、ひとりで放つておけない。といって、姑のいる家に嫁いだ私にもどうすることもできません。私は唯一の寄る辺として、亮平さんを頼つたのでした。

亮平さんは、母を自分の家で看ると言つてくれました。自らの親はいなとはいつても、妻の親を引き取るなんてことはなかなかできません。地元の名士、霧乃富の者が、孤独な最期を遂げるなど世間の恥。いえ、母の自尊心だつてそれを許さなかつたでしょ。本当に、亮平さんには感謝してもしきれません。私たち霧乃富家の者は、亮平さんに頭が上がらないのです。

その亮平さんが母を引き取る条件として挙げたのが、彰一兄さん

との関係を絶つことでした。実は、私たち妹には、彰一兄さんは自分の居場所を告げていたのです。それはここからさほど遠くもない場所で、ハイヤーで迎えに行けば、母の死に由に間に合つかかもしれません。

しかし、季節の折の手紙のやりとりさえも、この一件があつてからは、亮平さんに禁じられていきました。それは、自分勝手に家を飛び出した彰一兄さんに対する報いなのです。母が臨終の間際にあっても、彰一兄さんは呼ばないこと。死に由には会わせないこと。?

「どんな事情があるのか知らんが、最後【最期】死に由まゝ死の瞬間】の望みぐらいかなえてあげるのが子のつとめではないのか？」

このままでは、紗江子さんが氣の毒じやうひつ

何となく、事の次第を察したのでしょう。お医者様の口調は、諭すようでした。それは言われるまでありません。私自身が、どれほど口惜しいことでしょう。恩ある母の、最後の願いさえ聞き届けてあげられないなんて！

私はすぐるような思いで、亮平さんを見ました。しかし無情にも、亮平さんは頑として首を縊には振りませんでした。人の死を、母の死を持つてしても許せないことなど何があるのでしょうか。

所詮、これが赤の他人と血のつながった親子の情の違いなのでしょう。でもそんなこと、口が裂けても亮平さんには言えません。孤獨な母の看病を引き受けてくれたのは、他ならぬ他人の亮平さんなのですから。

「早く、呼べ……あの子を、早くここに呼んでくれ」

ぞつとする、悪魔めいた声が狭い部屋に木靈します。窓から差し込む稻妻が、暗い離室の中に夜叉のような母の顔を蒼白く浮き立たせました。ひょつとして、母の魂はすでに黄泉への旅路に向かっていたのかもしれません。私たちの目の前にいるのは、老婆の姿をした鬼 悪鬼そのものでした。

私たちは恐れ、戸惑い、絶句するばかりです。

「おつて……」

また、母が何か言つています。

「何？ お母ちゃん」

「たばか謀りおつて……おまえらは、よつてたかつて儂を謀りおつて

私は心底驚きました。何を言つているのでしょうか。母は、いつた  
い何を恨んでいるのでしょうか。それはあまりに呪詛の響きに充ち満  
ちていて、死の間際の意識の混濁の中で発せられた台詞とはどうて  
い思えませんでした。やはり、母は何かを恨んでいるのです。

「お母ちゃん、何を言つてるの？ 私たちがお母ちゃんを騙すなん  
て、そんなことするわけないじゃない」

玲子姉さんは遠巻きに、弱々しく言いました。すると母は、そら  
に眉根を寄せて玲子姉さんを睨め付けました。

「黙れ」

私たちは戦慄し、動くこともできません。もう、半ば死んでいる  
老婆に、誰もが逆らえずにいたのです。爛々と狂氣の光を放つ目で、  
射すくめられたみたいです。さすがの私も、手はじつと汗ばみ、  
背筋に冷たいものを感じました。

「姉さん、お母ちゃんは何のことを言つているの？ 謀るつて  
「そんなこと私が知るわけないでしょ！」

玲子姉さんは半狂乱になり、泣きわめくばかりです。

「亮平さんは？ お母ちゃんの言つてることに、心当たりはないの  
ですか。それとも、やつぱり彰一兄さんに会いたいのでしょうか？」

「し、知らん。俺は知らんぞ。恨まれることなど何ひとつない。だ  
いたい、人に世話になつておいて何て言い種だ。彰一君に来られた  
ら、俺の立場がない」とぐらりわかるだらつ。えい、こんなことな  
ら……！」

母など放つておけばよかつた さすがにその一言は娘の私たち  
の前で言つてはいけないと気づいたらしく、亮平さんは口を噤みま  
した。かれがただの憐れみや義憤に駆られて母を引き取つたわけで  
はないことはわかつっていました。

亮平さんはただ 。

「 いえ、今はよしまじょう。どんな理由があれ、母が世話になつたことには間違いないのですから。それに、今さら彰一兄さんにこのこに来られては、亮平さんの立場がないことも確かにです。生きて彰一兄さんに会えないことは、母も承知の上ででしたし。 」

「 きっと私たちは親不孝な子供なのでしょう。死の床にある母の、最後の願いをえかなえてあげられないなんて。窓硝子に激しく叩きつける雨音は、彰一兄さんとの邂逅を果たせぬ母の、慟哭のようでした。 」

「 おまえたち よくも…… 」

母の恨みは、よほど根深いのでじょうか。ついに、動かぬはずの体を起こそうとします。私たちは恐怖に怯え、身動きすらできません。まさか、本当に獲つて喰われるのでしょうか。しかし、それが母の最期の言葉でした。次の瞬間、母は奇妙な音とともに、大量に吐血したのです。

「 お母ちゃん！ 」

布団に撒き散らした鮮血は、まるで地に落ちた紅椿。肺が溶ける餒えたような甘い匂いは、花瓶の中で腐つた切り花と同じ匂いでじた。

地獄の花畠と化した布団の上で、母はカツと目を見開いたまま、苦悶の表情で事切れていきました。

「 ( い ) 臨終です 」

枯れ木のような手を取り、お医者様は厳かに告げました。それを聞き、私たちは悲しむどころか安堵の息を吐いたのです。

春の夜の嵐は、さらに激しさを増したようでした。

\*\*\*\*\*

＊＊

（編）【 結末まで読んだのちの印象として、「序章はそもそも不

要？』と感じます。】

ま) ふ、不要ですか！ 情報の開示とそのやり方がマズかったのかな。しかし初っぱながら容赦がないですね

## 第十七回 川城寺まどかをフルボッコ！？（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

「悪文排斥」第十七回。引き続き、批評の掲載です。

### 第一章 桜の下に棲まう鬼

（一）

母、紗江子の遺体は、葬儀のために霧乃宮邸に戻つてまいりました。

（編）【物語をこの一文から始めても問題ないようになります】

久しぶりに訪れた、私の実家。堀に囲まれた重厚な日本邸宅は、先代の霧乃宮家第三代当主、霧乃宮篠太郎が建てたものでした。門をくぐると玄関まで飛び石が続き、左右に広がる庭には、松の木やら、椿やらが立ち並んであります。もう少し春が深まればツツジが咲き誇り、見事な色合いで庭を染めるのでしょうか。

しかし、そんな自慢の庭も長い間手入れがされておらず、今では枝も伸び放題に伸びています。昨夜の嵐から一転した春晴れもその陽差しを遮られ、広大な屋敷は鬱蒼とした印象を与えるのでした。そのせいか、季節外れの寒さがいつそう身に滲みます。縁側から見える庭の桜は五分咲きでしょうか。天気はよくとも思わぬ花冷えに、せつかく咲きかけた花びらは縮こまつてしまつたようでした。

玄関をくぐると、家の中は湿氣つた黴臭い空気が漂っていました。霧乃宮邸は広く、部屋は大小合わせて十一を数えます。かつて薬問屋として栄えていたときには、屋敷の中に幾人もの使用人を住ませ、寝起きを共にしていたのでした。しかし、それも霧乃宮紗江子

が養子として迎えた第四代当主、つまりは私の父である竜二に代替わりしたときを境に、商売は立ち行かなくなってしまった。

何のことはありません。父、竜二は突然手に入った莫大な金にたがが外れ、放蕩にふけるようになってしまったのです。

霧乃宮の財産をほとんど食い潰し、挙げ句の果てに出奔してしまったとき、母はむしろ、ほっとした顔を見せておりました。大切な家屋だけは失わずに済んだ と。

女郎に入れ込んで出ていったと聞かされたのは後年のことです。そんな頃、時を同じくして彰一兄さんがカフェの女給と駆け落ちしたというのは皮肉なもので、口さがない近所の人々からは、「親子そろつて商才よりも色事に長けている」と、侮蔑を込めて噂されたのでした。

やがて私も嫁いでいき、一人残された母が暮らすには、霧乃宮邸はあまりに広すぎました。部屋のほとんどは文字通り開かずの間だつたようで、家の中の空気は淀みきっています。取り敢えず、雨戸も障子も開け放たねばなりません。私たちは時季外れの寒さに震えながら、家中の襖を開けて廻りました。そうして仏間に布団を敷き、母の遺体を北枕にして安置します。霧乃宮紗江子逝去のお触れは、すでに廻っていたのでしょう。葬儀の段取りをする「お取り持ち」と呼ばれる近所の方々が、次々と屋敷を訪れていました。

私たちは仏壇に?燭を灯し、死臭を隠すための香を焚くと、あとはもう、することがありません。死者の体内は葬儀に手も口も出さないのが、この地の仕来りでした。

「お婆ちゃん、ねえ、どうして起きてくれないの? 由希子が来たんだよ。由希子だよ。ねえ、お婆ちゃん」

物いわぬ骸と化した母に、姪っ子の由希子ちゃんがすがりつきます。

「由希子と遊びよう。お手玉しようよ、お婆ちゃん」

「由希子、やめなさい」

涙まじりに呼びかける由希子ちゃんを、玲子姉さんはそつとなだ

めました。舌つ足らずな子供のような喋り方ですが、由希子ちゃんはもう十九歳です。生まれつきおつむりが弱く、体は大きくとも三、四歳の知恵しかありません。色白でおかっぱの由希子ちゃんは、まるで日本人形のよう。しかし切れ長の目は赤ん坊のようだ無垢そのもので、何となく倒錯めいた感じのする子でした。

そんな由希子ちゃんを、母は不憫だと言つてたいそう可愛がつていたのでした。もちろん由希子ちゃんも懐いていましたし、ですから突然訪れたお婆ちゃんの死を受け入れられないのでしょうか。必死に呼びかける姿は、涙を誘わずにいられません。

しかし、姉さんと亮平さんにとつて、由希子ちゃんは尽きることのない悩みの種でした。特に亮平さんは、由希子ちゃんが自分の娘であることを未だに受け入れられないようで、事あるごとに由希子ちゃんを折檻していると聞きます。亮平さんは鉄鋼の貿易によって一代で財を成した方で、ゆくゆくは養子を迎えるつもりでした。ですが由希子ちゃんが白痴

（編）【白痴は要注意語句です。時代設定を考えれば「さほど違和感はない」とも言えますが、あえて使用する必要がある?とも感じます】

ま）はい、承知の上です。香奈恵の一人称といつことで、私の中では必要を感じました。

とあつては、それもままなりません。

霧乃宮の末裔である私たち兄妹は、ここに来てなぜか子宝に恵まれませんでした。彰一兄さんのところも子供の話は聞いたことがありませんし、私も結婚して十九年目になる夫、頼長聰太郎子爵との間に、ついに子供はできませんでした。霧乃宮の血縁としては由希子ちゃんは唯一、姉夫婦が授かつた子なのです。かつて栄華を極めた霧乃宮家は、その没落と時を同じくして、一族の血さえも途絶えようとしているのでした。

「お婆ちゃん、起きてよ、ねえ」

「やめんか、由希子!」

なおも亡骸にすがる由希子ちゃんに苛立つを覚え、亮平さんは彼女の?をぴしりと打ちました。たちまち由希子ちゃんは幼子同然に、火がついたように泣き出します。「じつして由希子に限つてこんな子に生まれてきたのだ」とは、未だ亮平さんが口にする繰言で、幼少の頃から秀才の名をほしこまあ

### 〔編〕【恣／辞書を引いてみたください】

にしてきたかれにじつには、自分の子供がじつであるじうどが耐えられないのです。亮平さんはよき人でありましたが、娘のことに関する限り、じつにも我慢が利かぬようでした。

「由希子ちゃん、じつにこらつしゃい」

私はそつと自分の胸に由希子ちゃんを抱き寄せました。

「お婆ちゃんはねえ、もつ由希子ちゃんとお話できないの。遠いところに行つちやうんだよ」

ひとつと諭すその言葉は、自分自身に言い聞かせていたのかもしません。母が亡くなつたことを未だ受け入れられないのは私も同じです。

「遠いところ?」

「やう、遠いところ。お星様になるの」

由希子ちゃんは、私の言つひとをどれほど理解しているのでしょうか。泣き腫らし、鼻水でぐしゃぐしゃになつた顔で、ほんやりと私を見つめています。

亮平さんは、そんな私たちを忌々しげに見ると、露骨に舌打ちをして立ち上がりました。所詮、義理の親でしかない霧乃宮紗江子の死は、かれにとつてはそれほど感ずるところもないようです。私は何だか腹立たしくなり、座したまま亮平さんを睨め付けました。

「香奈恵ちゃん、仏さんの前やから……」

玲子姉さんは困惑気味に、場を取りなそとします。悪いのは明らかに亮平さんなのに、私のせいだと言わんばかりに。私はそんな姉さんに対しても怒りが湧き起こり、思わず口を開きかけました。しかし、私の怒声が口をついて出ることはありませんでした。座敷に漂う不穏な空気を打ち消したのは、誰かが玄関を慌ただしく駆け込んでくる物音でした。

私も、亮平さんも、玲子姉さんも、開け放たれた襖の向こうに訝しげな目を向けています。やがてそこに現れた人物を見て、居合させたみんなが息を？みました。

「彰一兄さん……」

思わず咳きが漏れました。ひどくげっそりと瘦せ細つた？、広くなつた額と真っ白になつた髪。気弱そうな目には涙を浮かべて、それは変わり果てた姿ではあつたけれども、霧乃宮彰一 彰一兄さんには間違いありません。

お互い、会おうと思えば会える距離にいたのですが、兄も駆け落ちという後ろめたさがあつたのでしょうか。この二十年、一度も姿を見せたことはありませんでした。それにしても長い年月の間、彰一兄さんはどんな人生を歩んできたのでしょうか。確かに私より一回り以上も上、すでに五十を過ぎてはいますが、その容姿はさらに十も年老いたかのようです。刻まれた皺が苦労の数だとすれば、とてもしあわせな人生を送つてきたとは思えません。

その彰一兄さんは息を切らしながら、呆然と立ち尽くしていました。

「おふくろ」

横たわる母の骸を凝視したまま、彰一兄さんが力なく呼びかけます。次の瞬間、彰一兄さんはわつと喚いて遺体に駆け寄ろうとしました。

「おふくろ！」

しかし部屋に入ってきた兄の腕を、亮平さんが？んで止めました。

「何しに来た？」

泣きすがりつとする兄の前に、血相を変えた亮平さんが立ちはだかります。

「勝手に家を出ておいで、今さら君が霧乃富家の敷居をまたぐ資格はない。お引き取り願おう」

「ごめんなさい。私が 彰一兄さんには、私が連絡しました！」

私は亮平さんに対しての怒りも忘れ、必死に一人の間に立ち入りました。

「母がいよいよ危ないとなつた三日前、禁忌を破つて手紙を出したんです。このまま今生の別れとなるのはあまりに忍びなくて。母が可哀想で…… ですから……！」

しかし、亮平さんは私の言葉など耳に入らないようでした。

「さあ、帰つてくれ。彰一君にいられては、取り仕切つている私の立場もないものでね」

「お義兄さん！」

私はなおも亮平さんに取りすがりつと、その黒袖を？みます。

亮平さんの言い分もわかります。矢野家の者が、矢野亮平が霧乃富家の葬儀を取り仕切るのは、跡取りがいないからこそ。長女の夫としての義務であることが建前です。家を出ていつたとはいえ、長男である彰一兄さんに出でこられては、亮平さんの立場がありません。

ただし、私はそれすらも建前であることを知つていました。亮平さんの本当の狙いは、霧乃富の財産、霧乃富家を我がものとすることなのです。放蕩三昧の父のせいでお金はありませんが、この帝都の一等地に構える百数十坪の土地と屋敷、さらに先代が集めた骨董を含めれば、優に一財産はあるのです。病氣の母を引き取つたのも、そんな計算があつたからに違ひありません。

しかしそれも、彰一兄さんが出てきたとあれば、話は簡単に進まなくなつてしまします。亮平さんは、どうにかして兄を追い返そうと、躍起になつていました。

「お義母様だつて、君みたいな親不孝者の顔など見たくないだらう

からね。もつ、じじには来ないでくれないか

「申し訳ありません」

泣きじやくりながら、彰一兄さんは地に頭をこすりつけ、土下座しました。

「許してもうえないと」はわかっています。しかし、どうか焼香だけでも。 いえ、片隅に座らせていただくだけで構いません。最後に母を見送らせてください。どうか、どうかお願ひ致します!」

「お義兄さん、私からもお願ひします。母だって、彰一兄さんに会いたかつたに違ひありません。何があろうと、やはり親子なのですから」

私も兄と並んで土下座し、必死に懇願しました。いくら広い屋敷といえど、すべての襖を開け放した家の中で、声は筒抜けです。騒ぎを聞きつけ、数人のお取り持ちがいつたい何事かとのぞき込んでいました。心配してというよりは好奇の目です。亮平さんは頑として譲らぬ構えでしたが、それを見ると苦い表情になり、「勝手にしろ」と言い捨てて部屋を出てきました。

?然とする人々の間に、白けた空気が漂います。

「済みません。お騒がせしまして。何でもござりませんので、どうか心配なさらずに」

私は努めて明るく言い、もう座敷の風通しは終わつたと言わんばかりに、襖や障子を閉めて廻りました。久々に顔を会わせた霧乃宮一族には、まだまだ波乱が起きそうでした。

仏間に戻ると、彰一兄さんは正座したまま嗚咽を漏らしていました。手紙を見て、慌てて出てきたのでしょうか。死に日には間に合つと思つたのか、黒の喪服ではなく絢の着物を身につけています。玲子姉さんは、二十年ぶりに再会した兄にどう声を掛けていいのかわからぬようで、居心地が悪そうに俯いたままでした。由希子ちゃんは事の成り行きがまったく理解できず、鼻歌まじりに縁側に座っています。

「兄さん。お母ちゃんの顔、見る？」

彰一兄さんがこの二十年間どうしていたのか、私はあえて聞きませんでした。それはあとでじっくり話せばいいことですし、せっかく駆けつけてくれた兄をこれ以上追い詰めたくないのです。

彰一兄さんは私の言葉に頷くと、顔に白い布がかぶせられた母の亡骸に近づきました。少し長い合掌の後、ゆっくりと布をめくります。

「ひつ……！」

その死に顔を見て、彰一兄さんは悲鳴と共に思わずのけぞりました。噛みつかんばかりに開かれた口腔。障子紙を丸めたように白く、皺の刻まれた顔。見開かれた目は、憤怒を宿したまま天井を見ています。それは、母が死に際に見せた苦悶の形相を呈したまででした。

「……」

あまりのおぞましさに、彰一兄さんは絶句したまま唇をわなわなと震わせていました。

「お母ちゃん、最後はずいぶんと苦しんだんや」

私はそうだけいいました。母の最期を、彰一兄さんに詳しく語る気はありません。鬼が乗り移つたような形相でこの世を、彰一兄さんを恨んで死んでいったと知れば、兄は未來永劫、罪の意識に苛まれるでしょう。彰一兄さんはそつと白布を戻すと、声を上げて号泣しました。

「おふくろ……堪忍してくれ 堪忍……」

彰一兄さんは、それだけ言うのが精一杯のようでした。それは悲しみと共に、親の死に目にも会えないような人生を歩んでしまった自らを悔いる涙でもあつたのでしょう。私は居たたまれない気持ちになつて、もらい泣きしながら目を逸らしました。こんな兄の姿を、見ていられなかつたのです。

私が幼い頃、まだ祖父の篠太郎が健在だつた頃は、しあわせな家でした。私たち兄妹も仲がよく、特に彰一兄さんには可愛がつてもらつた記憶があります。長い糺余曲折の果てにこのよつたな再会を果

たすなど、あのとき誰が想像したでしょう。季節の折りに咲き誇る霧乃富邸の庭の花は、その記憶さえも極彩色に彩っていたのに。今年の桜は、深い悲しみと共に墨染の花を咲かせるのでしょうか。私は涙を拭いながら、縁側に目を向けました。

曇下がりの、やわらかい春の陽差し。堅い蕾が開きかけた桜の木の下に、誰かがしゃがんでいます。白い着物を着ていますが、後ろ姿からは誰なのかわかりません。いつたい誰なのでしょう？私は訝しみ、首を傾げました。縁側に腰掛けている由希子ちゃんがそのほうを指さします。

「お婆ちゃん！」

嬉しそうに駆け寄つていく由希子ちゃん。そんなはずはありません。母はここに、永遠の眠りについているのですから。私はぞつとしながら、その光景を呆然と眺めていました。

白い着物の人物は立ち上がり、こちらを振り向こうとします。誰なのでしょう。見てはいけないような気がします。しかしその瞬間、かれ　あるいは彼女　の姿は、忽然と搔き消えました。

「あ」

驚愕の声は、私と由希子ちゃんの口から異口同音に発したものでした。？然として立ち戻く由希子ちゃんの上に、一片の花びらがひらりと舞います。花冷えの帝都は、さらに冷え込んできたようでした。

\*\*\*\*\*

（編）

「プロローグ後の最初の場面」の枚数は1行空けを含めて約17枚、「明らかに少ない」とは言えませんが、「不足気味」ではあります。また、セリフの数は文字通り不足、「ひとつの場面にセリフ50を

配置する」を観点に加えてみてください。さらに、そのセリフもで  
きるかぎり「生きた」ものである必要があり、「……」「お婆ちゃん!」「あ」などはふさわしくありません（キャラの人格・内  
面が反映した＝各キャラの思惟・思考の結果「選ばれた」言葉では  
ないからです。残念ながら、これらは「配置すべき50のセリフ」  
にはカウントされません）。「自分の作品にどうでもいいセリフな  
どただのひとつも配置しない」、そんなこだわりにも目を向けてみ  
てください。

経過時間については、主人公が家に戻る 彰一が帰還 開着  
で実質約3分程度でしょうか。言つまでもなくこれでは不足で、1  
7枚を費やしながら「連續した経過時間」が3分にしかならないの  
は、「それだけ重要でないことが書かれているからだ」となります。

現状では「地の文での主人公の独白で解説をおこなうこと」に作  
者の主たる関心が向いていて、セリフには「地の文の連續を避ける  
ためのワンポイント」以上の役割が与えられていない印象ですが、  
本来はこれが逆にならなければいけません。

読者にすんなり記憶してもらうためにも、基本的事実の解説はセ  
リフ（それも「生きた」）を通じておこなう。

地の文での独白／解説は可能なかぎり避ける。  
ひとつの場合には最低でも10分の「連續した経過時間」を「え  
る。

美文調の描写は読者をうなざつせんだけ。そもそも「その場面  
の雰囲気／ムードの醸成」に役立たない描写は無意味であるばかり  
か有害（現状での「視覚イメージの提示」は特に作品後半の部  
分で 有効と感じますが、肝心の「そこにいる人物の姿・表情」  
がまだ見えてこない印象です）。

繰り返しになりますが、現状地の文で書かれている諸要素をセリ  
フと人物の描写に織り込む、つまりそれらを通じて読者がみずから

解釈・理解できるような書き方にするより心懸けてみてください（もちろん、「地の文でしか書けない」とは、すぱっと潔く解説してくださー）。

ま）「ワンシーンには最低一十枚以上を費やす」でしたね。  
その中で、一流の人間による一流のやりとりで表現すること。「生きた台詞」とか、前回とまつたく同じことを言われてる。進歩ないなあ……。

第十八回 巴城寺まどかをフルボッコ！？（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

「悪文排斥」第十八回。今回はほとんどの文章の校正のみです。あまり中身はありません。

(一)

私は吃驚して、縁側に駆け寄りました。右も、左も、誰かが潜んでいるのではと庭を見渡しますが、桜の下はもちろん、ツツジの茂みにも灯籠の陰にも、やはり誰もいません。帝都に吹きつける冷たい風だけが、私を嘲笑うかのように？を撫ります。思わず身震いしたのは、その寒さのせいだったのでしょうか。私はなおもぼんやりと口を開いたまま、立ち尽くしていました。今は何だつたのでしょうか。桜の木の下に現れた人影。しかし、それは一陣の風に吹き飛ばされたとでもいうように、忽然と搔き消えたのです。

「ねえ、お婆ちゃんは？ デコに行ったの？」

由希子ちゃんも不思議そうに辺りを見回しながら尋ねます。

「お婆ちゃん だつたのかな？」

私は？が引きつるのを感じながらむりやり笑みを浮かべ、由希子ちゃんに聞きました。

「わかんない。でも、きっとお婆ちゃんだよ。あたしを見て笑つたもん」

そう言つて、由希子ちゃんは屈託のない笑顔を見せます。それじゃあ、由希子ちゃんは白い着物の人の顔見たのでしょうか。そうして、それは母だったのでしょうか。遺体は仏間で眠りについているというのに、魂は成仏しきれず屋敷を彷徨つているのでしょうか。それは自分の親といえど

(編)【漢字で書くと「雖も」になるので、「ええど」はやはり誤用

と考えられます】

何となくぞつとずるものがあります。

「お婆ちゃん、どこ行つたのかな」

死を理解していな由希子ちゃんは、まるで隠れん坊でもしているかのように無邪気に亡靈を捜しています。どこに行つてしまつたのかはわかりません。私が聞きたいくらいです。でも、由希子ちゃんも見たということは、あれはただの幻惑ではないのでしょうか。

「香奈恵ちゃん、どうかしたの？」

玲子姉さんがそばに来て、怪訝そうな顔をしました。

「今、確かに誰かがここに立つていたんだけど……」

「ここの庭に？」

眉根を寄せ、玲子姉さんも探るように辺りを見回します。

「誰もいないじゃない」

「ええ、でも」

「見間違いやないの？ きっと光の加減か何か。硝子に反射した太陽のせいでそう見えたんではなくて？ それより、もうそろそろ縁側の戸も閉めてちょうどいい。寒くて仕方ないわ」

玲子姉さんは決めつけると、もうそれには興味をなくして奥の座敷へと戻つていきました。由希子ちゃんは他のことに気を取られてか、それとも本当にお婆ちゃんを捜すつもりなのか、気がつくとどこかに行つてしまつたようです。私は言われたとおり障子戸を閉めながら、もう一度だけ桜の木を眺めました。確かに、姉さんの言うとおり見間違ひだつたのもしれません。本当に、光の加減か何か。

私も、由希子ちゃんも、それが白い着物を着た人に見えたのでしょう。私は納得しないながらも、自分に言い聞かせることにしました。言い聞かせながら思い出したのは、幼い頃に母が語つてくれたあるお話です。

桜の下には、鬼が棲まうんじや。

その鬼は、蒼白い顔をして庭の桜の木の下に立つてゐるのだそうです。

家に死人が出そつになると決まって現れる。抜け出た魂を喰らおうと、じつとこつちを窺つておるんじやよ。

私と由希子ちゃんが見たのは、母の魂を獲つて喰おうとする鬼だつたのかもしません。

私はこの出来事が妙に気になつていましたが、やがて日暮れ前にお寺の住職が到着し、通夜の段取りを話し合つ頃になると、もうそれどころではありませんでした。

線香の煙る座敷の中で、慌ただしく色々なことが決められていきます。そんなとき、亮平さんの発した言葉に私は驚き、繼いで怒りが込み上げてきました。何と亮平さんは、霧乃宮紗江子の葬儀に喪主を立てないというのです。

「生憎、霧乃宮の家を継ぐ者は誰もおりませんので、務める者がおらんのですよ」

その言葉に住職も腕を組んだまま、渋い表情で考え込みました。

「どうしても喪主は立てないと言われるのか」

「ええ」

「しかし、そんな葬儀は聞いたことがない。身寄りのない無縁仏ではあるまいし、霧乃宮家ともあろう方が喪主を立てないなど、世間体というものがあるでしょうに」

「いや、私の妻も今は矢野家の者ですし、香奈恵さんも頼長の家に嫁いでおります。霧乃宮家の人は、もう誰もおりませんので」

「彰一兄さんがいます！」

私は思わず口を挟みました。

「彰一兄さんは霧乃宮家の長男です。兄さんではどうしていけないのでですか？」　　といつより、彰一兄さんが喪主を務めるのが筋ではありますか！」

亮平さんは鼻を鳴らし、憤る私と、そして部屋の片隅で縮こまつてゐる彰一兄さんをじろりと一瞥しました。その日は、まるで虫

けらでも見るような冷酷な光を宿しています。

「親を捨てて勝手に出ていったくせに、こんなときだけ我が物顔をされてもな。いくら霧乃宮の姓を名乗っているとはいえ、彰一君は自ら縁を切つたのではないか？ 見捨てられた息子に喪主を務められては、お義母様だつて浮かばれんと思つが」

亮平さんはつけつけと言いました。

「そんなこと

「香奈恵、いいんだよ」

なおも言ひ返そとする私の裾を引っ張り、彰一兄さんは止めに入りました。

「亮平さんの言つとおりだ。俺には喪主を務める資格はない

「兄さん！」

自嘲めいて唇の端を引きつらせ、力なくうなだれる彰一兄さん。

私は助けを求め、正面に座る玲子姉さんを見据えました。

「姉さん、何とか言つてよ。お母ちゃんの葬儀がこんなことでいいの？」

玲子姉さんは氣まずそつに私から口を逸らし、旦那である亮平さんをちらり、ちらりと見ながら、言いにくそうに口を開きました。

「そうねえ……でも、やつぱり、家を出ていった彰一兄さんが喪主

とこつのもおかしな話だし」

「どうして寒の息子が喪主を務めるのがおかしな話なの！」

玲子姉さんにとつては、夫の亮平さんの機嫌を損ねることのほうがずっと罪悪なのでしょう。そんな姉さんにも腹が立ち、私はつい、声を荒らげて

（編）【「あら、うなづいて」です】

しまいました。気がつくと、閉じた襖の向ひで、集まつたお取り持ちの方々が耳をそばだてている気配があります。お家騒動は、かれらにとつて蜜の味。舌なめずりをしながら聞き入つては、ついで

す。仕方なく、私は声を潜め、小むく毒づいてしかできません。

「お母ちゃんが浮かばれないわ」

しかし、私は結局、亮平さんの決定には逆らえませんでした。亮平さんにとつて、これは霧乃富家を手中にするための大きな布石だつたに違いありません。喪主を立てない つまりは、霧乃富家の者はもう誰もいないと、世間に明言したのです。

\*\*\*\*\*

（編）枚数10枚。やはり不足です。

（ま）ここも前回と同じことですね。「枚数の不足」と、「十分に満たない経過時間」。

（一）、「（一）と分けず一ブロックにして、  
基本的事実の解説はセリフ（それも「生きた」）を通じておこなう。

とすればよかつたのかな。言つのは簡単だけど、実践は難しい。改稿するにしても、相當に難儀しそうですね。

しかしこの場面、改めて読み直すと退屈なシーンです。ひょっとしてこれも「必要ない」のかもしれません。

## 第十九回 円城寺まどかをフルボッコー？（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

第十九回「悪文排斥」。まだまだ続く『霧乃宮一族の滅亡』、批評レポートです。今回は長すぎる気がする第二章。とりあえず全文掲載しますが、飛ばし読みでも構いません。肝心な編集者様の一言は最後にあります。

# 第一章 閩體もの言ひ帝都の月夜

二

こうして、霧乃宮紗江子の通夜が始まりました。参列者の少ない、侘びしい通夜でした。襖を取り払った六畳二間の仏前に座っていたのは、私たち親族を含めても十二、三人でしょうか。二十二年前、祖父、簾太郎の亡くなつたときは、ひつきりなしに弔問客が訪れていました。なかには

（編）【文頭に配置される「とりわけ」という意味の「なかでも／な  
かには」については、ひらがな表記をお勧めします】

財界で名を馳せるような大会社の社長様やら、地元の代議士の先生やらもおりまして、その顔ぶれはまさしく「綺羅、星の如く」でしたのに。母、紗江子の葬儀は、霧乃宮家の没落をまざまざと見せ付けられたようでした。

母の死を本当に悼んでいる者は、むしろ少ないのでしょう。亮平さんは言つに及ばず、玲子姉さんもほとほと看病に疲れ果てていた

せいか、打ちひしがれている様子はありません。その中で、もつとも悲しんでいたのはやはり彰一兄さんでしょうか。読経の間、じつと仏壇の奥を見つめて、いつたい何を思つていたのでしょうか。憔悴しきつた表情からは、悲しみよりも後悔の念のほうが深いような気がします。死の間際、恨み言を並べた母ですが、今の彰一兄さんを見たら何と声を掛けるのでしょうか。何だか、母の御靈はまだこの座敷にいるような、そんな気がします。

部屋に漂う乾いた腐臭。肉の臭いを含んだ焼香の煙は、やがて彰一兄さんの座る部屋の片隅に部屋に流れていきます。それはまるで、母がようやく会えた彰一兄さんを慈しんでいるようで、かれの体を包み込むように渦巻いていました。揺れる？燭の炎は、邂逅を果たした歓喜の震えでしょうか。風のない部屋であんなにも火が揺らめくのは、まったくおかしかった。

そして、かすかに聞こえる子供のよがな甲高い笑い声。母のものではありません。母は、こんな下品な笑い方をしないのですから。ひょっとして、昼夜がりに見た白い着物の鬼が嘲笑つているのでしょうか。その障子を開ければ、夜桜の下には蒼白い顔をした鬼が立つているのかもしれません。縁側のほうからは先ほどからずっと視線を感じていますが、私は怖くてそちらを見ることができませんでした。まるで詠々と読み上げられる経文が、亡靈を呼び寄せていくようです。

何となく嫌な胸騒ぎのする、落ち着かない通夜でした。息苦しくて、目眩がしそうです。母の通夜だというのに、私は悲しみに暮れるどころか早く終わつてほしいとさえ念じていました。よからぬ予感がするのは、私だけでしょうか。ちらりと周りを窺いますが、みな神妙な面持ちでうなだれ、意味のわからない念佛に聞き入つていました。喪服姿が並ぶ沈痛なその光景は、並ぶ参列者さえ死んでいるみたいです。まるで座したまま息絶えた即神仏のよう。

反対に、仏壇の前で眠る母は、今にも起きできそうです。死に装束から伸びる干涸らびた手足。白い布が掛けられた顔は、まだ苦悶

の表情を残したままなのです。母に死の安らぎは訪れていないようでした。未練を残した母の怨念が屋敷に漂い、私を落ち着かない気持ちにさせるのかもしれません。

永劫とも思える長い時間の果てによつやく通夜が終わつたとき、私は呪縛が解けたようにほつと胸を撫で下ろしたのでした。

わざかばかりの参列者は、明日の葬式の来訪を約束し、帰つていきました。そうすると、たゞ広い霧乃宮邸には、私たち親族だけが残りました。今夜は仏の御守りをするために、一晩中母の遺骸と過ごさねばなりません。線香と？燭の火を、絶やしてはいけないです。

「亮平さんと姉さんは帰つて休んでください。今夜は私と彰一兄さんがここに泊まりますので。兄さん、それでいいでしょ？」

私は勝手に決めつけ、兄を見やりました。

「ああ、もちろん。姉さんと亮平義兄さんにはお世話になりっぱなしだし、これぐらいことはお役に立たないと」

「そうかい。まあ、そうしてくれると助かるね」

亮平さんはそう言って、おだてられて喜んでいるときの癖である鼻の穴をひくひくさせながら、満面の笑みを浮かべました。

「久しぶりに彰一兄さんと話したいこともあるけれど、まだ明日があるのだし、今日のところはお暇<sup>いとま</sup>させていただわくわね」

玲子姉さんも、亮平さんに続いて立ち上がります。確かに姉さんも帰つてくださいとは言いましたが、玲子姉さんはいてくれてもよかつたのではないでしょ？亮平さんはともかく、姉さんは霧乃宮紗江子の実の娘なのです。

しかし私は言いたいのをこらえて、笑つてみせました。もともと兄と姉はあまり折り合いがよくなかったし、事実、一十年ぶりの再会だというのに、今日も一人はほとんど口をきいていません。姉さんがいないほうが、彰一兄さんとも気兼ねなく話せるでしょう。それに、その代わりと言つては何ですが、由希子ちゃんが一緒に泊まつていくと言つてくれました。

「あたしもお婆ちゃんの家に泊まつていいく。ねえ、いいでしょ?」  
由希子ちゃんは単純に喜んでいます。屈託のない笑顔。由希子ちゃんにとつては、お盆の里帰りとなんら変わることはないのです。しかし、玲子姉さんは困惑し、亮平さんは眉をひそめました。

「由希子、おまえがいては迷惑だる。一緒に帰るんだ」

「嫌だ、泊まつていいく!」

黙々をこねる由希子ちゃんに、亮平さんの顔がさらに険しくなります。

「大丈夫ですよ、お義兄さん。やることといつても、線香の火を絶やさないようにするだけです。由希子ちゃんが寝る部屋も布団もいくらでありますから。それに……ここに泊まるのも最後でしょうから」

また由希子ちゃんが殴られる前に、私は慌てて口を挟みました。母だつて、最後の夜ぐらい可愛がつていた由希子ちゃんがいてくれたほうが喜ぶでしょう。亮平さんは仕方なさそうに溜息をつくと、渋々承諾してくれました。

「わかった。言うことを聞かなかつたら、遠慮なく殴つてやつてくれ。口で言つて理解できる子ではないんでネ。まつたく、お義母様が甘やかしたせいだ」

「そんなこと……！」

？然とする私をよそに、姉夫婦はそそくさと帰つていきました。静寂に包まれた霧乃宮邸は、たつた三人だけになつてしまいました。まるで、無人の孤島に取り残されたようです。こんな空寒い屋敷に、母はたつた一人で暮らしていたのかと思うと、その虚無感に押し潰されそうです。どれほど寂しかつたことでしょう。私は居たまれない気持ちで、母の前に座りました。彰一兄さんも、由希子ちゃんも、私の隣に腰を下ろします。死に装束の母を、無言で見つめる三人。仏壇の？燭が、横たわる母の骸を仄暗く照らしています。畳に映る影が、揺らめく？燭の炎に合わせて形を歪めました。それはあるで、姿の見えぬ魔物のようです。どこからか、先ほどと同じ

甲高い笑い声が、私の耳朶じだを鳴なぶりました。

(一)

「香奈恵、ずいぶんと迷惑をかけたね」

姉夫婦が帰ると、彰一兄さんは憔悴きじみしきつた様子で言いました。  
「俺のことを恨んでるだろ? 突然出ていつたきり、二十年間一度も戻らなかつたんだ。許せないのは当然だと思う。言い訳をするつもりはないよ。本当に済まないことをした。香奈恵にも、おふくろにも」

自嘲氣味に唇を歪めたその横顔を、洋燈の光が照らします。落ちくぼんだ?に影を落とし、それはさながら髑體のようでした。広くなつた額と真つ白になつた残りの髪が、二十年という時の流れを物語っています。特徴的だつた大きく聰明な印象を与える双眸さえも、人生に疲れ切つたようにかつての光を失つていました。霧乃富の家にいた、まだ青年だつた頃の彰一兄さんの面影はどこにもあります。

兄さんの目に映る私の姿も、同じように変わり果ててているのでしょ?。兄さんと最後に会つたのは、私がまだ女学生だつたときです。学校から帰つてきたある日、この家に彰一兄さんの姿はありませんでした。あれから二十年 時間は残酷にも、人の若さを喰らい尽くしていました。そしてそれは、兄への遺恨に凝り固まつた心境に変化を及ぼすのにも充分でした。

「確かに、少し前までは兄さんのこと恨んでいたわ。兄さんが戻つてくれれば、お母ちゃんだつて寂しい思いをせずに済んだだろ? し、お父ちゃんの代わりに薬問屋を継いでいれば、霧乃富の家だつて存続できたのについて。自分勝手な彰一兄さんのことは許せなかつたけど、でもそれも兄さんの人生かもしれないね。今までこれからも、ずっと罪の意識を感じながら生きていくのは辛いことだらうし、そう考えると自分の生きたいように生きるのも樂じやないんだ

るつなかつて「

「……」

彰一兄さんは何も答えませんでした。責めるつもりはありませんし、兄さんも言い訳じみたことは言わないと決めていたようでした。

「清花さんだつて？ 元気にしてるの？」

駆け落ちしたと聞かされた、カフュの女綺。その名を口に出すと、兄を奪い去られた憎しみに身が焦げそうです。私にとつては、霧乃富家を破滅に導いた悪魔の名でした。一度も会つたことはありませんが、きっと獰猛な猛禽類のよつな顔に違ひありません。赤い口をぱつくりと開け、高らかな笑いを発してゐるのです。

「清花は……彼女は？」

彰一兄さんは初めて私を正面から見据えました。

「いや、そうだな。仲良くやつてこるよ」

そう言つたきり口を噤んでしまいます。その目は明らかに何かを訴えようとしていたのに。私は訝しましたが、それ以上追及することとは憚られました。

「それより、聰太郎さんは？ おふくろの葬儀には顔を出さないのかい？」

兄さんは自分の話題を避けるように、私の良人のことを尋ねました。季節の折の手紙で、兄妹の近況は伝えております。彰一兄さんは夫との面識はありませんが、聰太郎という名前や、私より十五歳も年長であること、爵位を持つ華族であることは知つていました。

「あの人は独逸アーヴィングに行つてしまつて、来月しか戻つてこないの。知らせを出したところで、間に合つわけないし」

「そうか……。せつべくお会いできると思つたのに残念だな。でも、香奈恵はしあわせそつでよかつたよ。子爵の奥様なら、きっと何の苦労もないのだろうね」

嫌味ではなく、妹のしあわせを心から喜んでいるように彰一兄さんは言いました。実際には華族であろうと「何の苦労もない」ということはあり得ません。毎日、毎日、特にやることもない、うんざ

りするほど退屈な口々。話題といえば「令女界」に綴られていくような、どちらの伯爵邸でどのような会合があり、どちらの奥様とどちらの令嬢がどのような絢爛な装いで姿をお見せになつたか、という「シップばかり。ほとほと倦み果ててはいても、華族の世界で生きていくには避けて通れませんでした。それはある意味、無為に時間が過ぎるのを待つ牢獄と同じです。

しかし、私は何も言わず、曖昧に微笑んでみせました。彰一兄さんがどのような人生を送ってきたのかはわかりませんが、私の苦労など、そもそも住む世界が違うかれには決して理解できないことです。同じ家で幼少時代を過ごしながら、大人になつてしまえば兄妹は他人も同然でした。

「おふくろは何か言つていたかい？ 僕の、恨み言とか。それとも……」

「ずっと、彰一兄さんに会いたがつていたわ」  
死の間際は、鬼が乗り移つたような姿だったことは言えません。これ以上、兄を罪の意識に苛ませることもないのでしょう。

「他には？」

「他つて？」

「何か俺に伝えたい」とがあつたとか  
妙に、彰一兄さんは問い合わせてきます。

「言いたいことはたくさんあつたでしょうけど、私は何も聞いてないわ。最後にお母ちゃんに会つたときは、もう意識をなくしていたのだし。玲子姉さんに聞けば何か知つてるかもしれないけど」

「そう」

彰一兄さんは、失望とも安堵とも言えぬよつた溜息をつきました。  
「お母ちゃんの口から、何か聞きたいことでもあつたの？」

「いや、何でもないよ」

怪訝な顔をする私を「まかすよ」と、兄はつと視線を逸らしました。

「……」

何となく、彰一兄さんは態度が腑に落ちません。根が単純というか、正直者の兄さんは隠し事ができないたちで、すぐに顔に出てします。歳を取つても、その性格は変わらないようでした。私は、兄が何か秘密を抱えていることを察しました。でも、言いたいことはたくさんあつても、やはり久しぶりに再会した彰一兄さんを追い詰めることはできません。その代わりに秀先は、兄さんを奪つた女へと向かいます。

「それより、清花さんは来ないの？ 霧乃富家の長男の嫁が姿を見せないなんて、世間に示しがつかないのでなくして？」

彰一兄さんは困つたように頭を搔きながら、『まざまざ』と俯きました。

「清花はお母ちゃんが死んだことは知らないし。俺も、香奈恵からの手紙を見て、慌てて出てきたから。せめて死に日に会えればと思つていたけど、間に合わなかつたな。本当に済まなかつた」「じゃあ、明日の葬式には清花さんもいらっしゃるの？」

何となく清花さんのことから話題を逸らそうとする兄を、柔らかく引き戻します。彰一兄さんはまたも何か言いたげに私を見つめ、しかし結局、口を閉ざしてしまいました。

「……兄さん……」

「済まない、香奈恵。もつ、何も聞かないでくれないか。霧乃富家の者として、責任は取るつもりだ。それに、おふくろには申し訳ないけど、亮平さんの仕打ちにはどんなことでも耐えるから。俺を喪主に立てないのならそれでもいい。だから

「わかった」

何だか彰一兄さんが氣の毒になつて、私は遮りました。

「もういいよ。さつと兄さんは一生会えないと思つていたけれど、こうして来てくれたのだし。いいよ、もう何も聞かない。その代わり、ちやんとお母ちゃんの供養をしてあげてね」

彰一兄さんは唇を？みしめ、体を震わせていました。

「済まない。本当に済まない、香奈恵……」

兄にとつては、激しく罵声を浴びせられたほうが楽だったかもしれません。私が許したせいで、彰一兄さんは私に聞いてほしかったはずの二十年を語る機会をなくしてしまったのですから。その、決してしあわせではなかつたであろう人生を。

「あれ、そういうえば由希子ちゃんは？」

兄との話に夢中になつていていたせいで、いつの間にか隣に座つていたはずの由希子ちゃんがいなくなつていてことに気づきました。

「兄さん、由希子ちゃんがどこに行つたのか知らない？」

彰一兄さんも、はつとして辺りを見回します。私たちは完全に由希子ちゃんのことを失念していました。

「どこに行つたんだ。さつきまでそこにいたじゃないか」

彰一兄さんは立ち上がり、襖を開けて隣室をのぞき込みました。私も縁側の障子を開け、庭を見渡します。

「由希子ちゃん、どこにいるの！」

暗闇に向かつて大きな声を出しますが、返事はありません。広い霧乃宮邸ですが、私と彰一兄さん以外に人の気配はなく、闇と静寂、そして焼香の匂いだけが漂っています。由希子ちゃんの姿はどこにもありません。

「外に出ていったのかな

「こんな時間にか？」

彰一兄さんは不安そうな顔で玄関先を見やりました。私も兄さんの傍らに立ち、土間を見下ろします。草履は残っていますが、幼子同然の由希子ちゃんのこと、裸足で出でていったとも限りません。

「『赤マント』にでも搔つ攫われたらどうするんだ」

『赤マント』。それは最近、新聞を賑わせている誘拐犯のことでした。帝都ではこのところ若い女が何人も行方不明になつており、それは裏地が赤いマントを羽織つた、洋装の紳士の仕業だと噂されるのです。こんな時間に外に出れば、由希子ちゃんも『赤マント』に攫われてしまうかもしれません。

「俺、心配だから見てくるよ」

彰一兄さんはそう言つて、玄関を下ります。

「一人で大丈夫なの？」

「出でいったとしても、まだそれほど遠くには行つていらないだろう。ひょっとして庭先にいるのかもしれないし。香奈恵はここで待つていてくれ。どつちみち、おふくろを一人にすることはできないだろ」確かに彰一兄さんの言つとおり、仏様を放つておくわけにはいきません。

「わかった。私も、もう少し家中を探してみるわ」

「そうしてくれ。由希子ちゃんがいなくなつたなんて、亮平さんに何て言い訳していいかわからいからね。大丈夫、必ず見つけてくるよ」

由希子ちゃんが失踪したと聞いたつて、亮平さんは意に介さないでしようけど。しかし私はその言葉を？み込み、黙つて頷きました。

彰一兄さんが出でていつてしまつと、霧乃富邸はやけにがらんとしたようでした。？燭の芯が燃える音が聞こえるほどに静かです。昼間でも寂しくなるほどに広い屋敷は、夜になると発狂しそうな寂寥感に包れます。私は仏間に戻つて手燭の？燭に火を灯し、隣室の襖を開けました。しかし、押し入れもない六畳の和室には、誰もいません。

「由希子ちゃん、どこにいるの」

自らを鼓舞するように、ことさら大きな声を張り上げます。返事はありません。発した声が、木靈しているよつた錯覚に襲われます。空気は冷え冷えとして湿り気を帯び、自分が生まれ育つた家でありながら、どこか薄気味悪さを感じさせました。

「由希子ちゃん！」

私はさらに大声で、姪っ子の名を呼びました。手燭の光が襖に私の影を大きく映し、嘲笑つかのように揺らめきます。やはり返事はありません。人が住まうには広すぎる霧乃富邸。今ここにいるのは、私と母の遺体だけなのでしょうか。不意に心に湧き起る猛烈

な孤独感と恐怖。私はそれをむりやり押し込め、荒々しく南側の障子戸を開けました。暗闇に手燭の炎を掲げますが、ここにも人の気配はありませんでした。

失望と安堵の入り交じった溜息を吐き、私はさらに屋敷の奥へと向かいます。しかしそのとき、誰かがゆっくりと歩く足音が耳につきました。

「由希子ちゃん？」

答えはありません。しかし確かに、衣擦れと畳を踏みしめている音です。近づいているのか、遠ざかっているのかわかりません。静寂が押し包む屋敷の中で、その音はやけに大きく聞こえました。

「ねえ、由希子ちゃんなの？ そうなら返事をしてちょうだい」

言いながら、私は自分の発した台詞に何だか笑いが込み上げてきます。由希子ちゃんでないなら、いつたい誰がこの家にいるというのでしょうか。自嘲しようとして失敗し、唇の端が引きつるのを感じました。戦慄しながらも、正体を確かめずにはいられません。何しろ、存在がわからないものほど怖いものはないのですから。たとえ

（編）【仮令／辞書を引いてみてください】

ま）引いてみました。『仮令たとえ もしそうであつても。仮に。』…』の場合、「例え」じゃないんですね。勉強になりました。

それが、死に装束に身を包み、夜叉の形相を呈したまま徘徊する母だつたとしても。

それは、霧乃宮に生まれ育つた者としての矜持だつたのでしょうか。没落した旧家とはいえ、他人に土足で上がるような真似を許すわけにはまいりません。私は意を決し、足音の聞こえる炊事場のほうへと向かいます。

私は一旦、仏間から縁側へと出ました。桜が見える家の東の縁側は北へと延び、突き当たつて左に折れています。足音が聞こえるのは、その先にある炊事場のほうでした。しかし炊事場は土間ですか

ら、実際にはその隣にある、かつて使用人が寝起きしていた部屋の辺りを誰かが徘徊しているのでしょうか。私は手燭に灯る小さな炎を頼りに、暗い回廊を進んでいきます。障子から差し込む月影は蒼く、いつそう闇が深まるようです。

北の、東西に延びる縁側は、炊事場に辿り着く手前に屋敷の南へと通じる廊下とも通じており、かれ は、それとも彼女 は、そこを歩いているようです。ひびく、ゆっくりとした足取りです。

私は必死に恐怖をこらえ、縁側から廊下へと向かいました。

「そこにいるのは誰？」

毅然とした声で誰何しました。掲げた？燭が、怪しい人影を映します。照らし出されたのは黒い髪と黒い着物、それと対照的な、夜目でもわかるほど白い肌。しかし、それが誰なのかを理解したとき、私は拍子抜けして大きく息を吐いたのでした。

「由希子ちゃん……」

体から、一気に力が抜けてしましました。思えば至極当然なことです。この家に残ったのは、私と彰一兄さんと由希子ちゃんだけだったのですから。呼んでも返事がないことから、闖入者が、はたまた幽霊かと思つていましたが、よく考えればそれは由希子ちゃんに他なりません。

私はもう一度溜息をついて、彼女に歩み寄りました。

「由希子ちゃん、こんなところはどうしたの？ 突然いなくなるから心配したじゃないの。まあ、お婆ちゃんが寂しがつているから、あっちの部屋へ戻りましょ。」「う。

呆けた表情の由希子ちゃんの手を取り、私は諭すよつて言いました。

「助けてって……」

「え ？」

「女人がね、助けてって言つてているの」

由希子ちゃんは何を言つてているのでしょうか。私は眉をひそめ、まるでどこかで聞いた怪談でも話しているような姪っ子を見やりまし

た。彼女の目は、悪意の欠片もない澄んだ眸をしています。

「女人が私を呼んだのよ。寒いんだって。暗くて、息が苦しいって」

由希子ちゃんが虚言を吐いたり、私を騙そうとしていることは考えられません。【白痴】である彼女には、他人を謀るような知恵はないのですから。信じられませんが、由希子ちゃんは本当に幽霊でも見たのでしょうか。白昼に現れた桜の木の下の鬼といい、この屋敷にはいつたいどれほど亡靈が巣くっているのでしょうか。本当に、長い歴史のある旧家などろくなものではありません。その歴史は、数多の人の血にまみれているのに違いないのですから。それは、私が嫁いだ頼友家とて同じでしたけれど。

「とにかく、お婆ちゃんのところに戻りましょう、ね。由希子ちゃんがいないと、お婆ちゃんだって寂しがるわよ」

もう一度言い、由希子ちゃんの手を取つて仏間へ向かおうとします。しかし、由希子ちゃんは抗うようにその場を動こうとしません。「可哀想だよ。寒いんだって。真つ暗で苦しいんだって。ねえ、叔母ちゃん、助けてあげてよ」

真剣な眼差しで、なおも繰り返します。私は自分が粟立つのを感じながら、むりやり由希子ちゃんの手を引きました。叫びだしたいのを必死でこらえているせいで、呼吸が荒くなります。普通なら馬鹿馬鹿しい話と一蹴したのかもしだれませんが、壮絶な母の死を目の当たりにして、ずいぶんと気が立つていたのかもしだれません。思えば昨日だってほとんど寝ていないのでから。恐怖は苛立ちとも、怒りともつかぬ感情に変わり、思わず由希子ちゃんを睨みつけてしまいました。由希子ちゃんもそんな私から険悪な雰囲気を察したのでしょうか。もう、何も言わず導かれるままについてきます。

仏間に戻ると、私はその白い手を握ったまま、仏となつた母の前に座りました。

かつて、たつた一人でこの家で暮らしていました母は、屋敷の中に何かがいることを知っていたのでしょうか。由希子ちゃんの前に現れた幽霊、そして桜の木の下に立つ鬼は、お母

ちやんの前にも姿を現したのでしょうか。しかし、そんな話は聞いたことがありません。もつとも、私には隠していたのかもしれませんが。

隠しているといえば、彰一兄さんは何を隠しているのでしょうか。お母ちやんも、彰一兄さんも、玲子姉さんも、みんな昔から私には肝心なことは何ひとつ話してはくれませんでした。上の二人とは歳の離れた三人兄妹の末っ子で、両親にとつても、兄さんや姉さんにとつても、私はいつまでも幼い子供の「香奈恵ちやん」なのです。私は長いこと何も知らないふりをして、じつと霧乃富家を見てきました。母は養子に迎えた父、竜三を決して愛しておらず、使用人の一人と通じていたこと。そんな母を、玲子姉さんは軽蔑していましたこと。

玲子姉さんは女学校を出てすぐ、霧乃富家から逃げるようにならざるを得ませんでした。玲子姉さんは、亮平さんと結婚したのはそのせいです。

彰一兄さんはおかしいくらい父とそっくりで、とても霧乃富家を背負つていけるような甲斐性はないこと。そして、そのことを祖父の籐太郎はずつと憂いていたこと。どのみち、霧乃富家は没落の一途を辿っていたのです。

私は結構な歳になつてからも、何も気づかない、無垢な「香奈恵ちゃん」を演じてきました。自分が無邪気な子供でいることが、崩壊しそうな家族をつなぎ止める唯一の鍵であること、それが私の役割であることを、幼少の頃から知つていたからです。

そうして、遠からず霧乃富家は終焉を迎えることも……。

白い布がかぶせられた母の遺体。それに目をやりながら昔に思いを馳せると、私の双眸にはようやく悲しみの涙が溢れたのでした。

\*\*\*\*\*

分量があり、その多くが「行動の描写」であることから、この場面は興味を持続したまま　ただし、それぞれの固有名詞（＝各登場人物）の識別はまだできませんが　おもしろく読めました。

ま）おおっ！　ひょっとして、初めて褒められたのでは！？  
自分の中では「描写過多」ぐらいに思っていたので、意外なお言葉です。これぐらいじっくりと小説世界を見据えて書き込まなければダメなんですね。このへんの感覚が自分じゃさっぱりわからなくて、今ひとつ自信が持てないでいました。なるほど、今まで「行動の描写」が足りなかつたようです。

しかしこれでも「誰が誰だかわからない」とは。自分ではかなり意識的に書き分けたつもりでしたが……。  
キャラの書き分けって、難しいですね。

（どうでもいいけど、サブタイトルぐらい校正の手を入れてほしくなかつたなあ。『髑髏もの云ふ帝都の月夜』が、『髑髏もの言つ帝都の月夜』って、なんか間抜けだ……）

## 第一十回 巴城寺まどかをフルボッコ！？（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

「悪文排斥」記念すべき（？）第一十回。『霧乃宮一族の滅亡』第三章からの批評レポートです。

\*\*\*\*\*

### 第二章 血染めの系譜

（一）

せびなくして、彰一兄さんが駆け込んでくる足音が聞こえました。私は慌てて田元を拭<sup>ぬぐ</sup>います。

（編）【「拭」は新常用漢字ですので、その意味でもルビ不要です】

息を切らせて部屋に入ってきた彰一兄さん。

「由希子ちゃん！」

何事もなかつたかのように私の隣で正座している由希子ちゃんを見て、彰一兄さんは安堵の笑みを浮かべました。

「よかつた。由希子ちゃん、いたのか……」

心優しい兄のこと、姪つ子を心配してそこらじゅうを奔走したに違いありません。外は今日も冷え込んでいるのに、その額には汗が滲んでいました。

「家のいちばん奥 茜、使用人が寝起きしていた部屋の前にいたのよ。足音が聞こえてきたから、最初は幽霊でもいるのかと思ったわ」

私は先ほど感じた恐怖を冗談に紛らわそうと、努めて明るく言い

ました。少し声が震えていたかもしません。

「幽靈なら、足音なんてしないのじゃないのかい？」

彰一兄さんはそれには気づかなかつた様子で、鼻で笑つて私の戯言を一蹴します。

「それにしても、由希子ちゃんは何でそんなに泣いていたんだい？」

「それが

私が言い淀むと、それまで慄然とした表情で座つていた由希子ちゃんは突然に立ち上がり、柳眉を逆立てて彰一兄さんを見据えました。

「女人人がね、助けてって言つたんだよ。暗いところに閉じこめられていの。苦しいんだつて」

由希子ちゃんの言葉は、まるで予言者の宣告のように薄暗い仏間に響き渡ります。そして、自らの役割は終えたと言わんばかりに、再び座り込んでしまいました。

立ちこめる麝香の煙が揺らいだのは氣のせいでしょうか。通夜の最中に聞こえた品のない笑い声が、またも耳朶をかすめます。私は戦慄して言葉を失いましたが、彰一兄さんもそれを聞き、顔色が一変します。蒼褪めたその表情から、明らかな動搖が見て取れました。

「兄さん、どうしたの？」

私は訝しみ、じつと兄を見ました。由希子ちゃんの言葉に、彰一兄さんが本氣で恐怖を覚えたとは思えません。何か知っているのでしょうか。

「いや、何でもないよ」

むりやり笑おうとしたのか、？が引きつっています。それは昔と変わらぬ、何か隠し事をしているときの兄の癖でした。顔を背け、目を合わせようとしているのも同じです。彰一兄さんは、いつたいどれほどの秘密を抱えているのでしょうか。そして、それはどれほどの重荷なのでしょうか。

私はしばし逡巡しましたが、意を決して言いました。

「兄さん、何を隠しているの？」

「え」

彰一兄さんは心底驚いたように瞠目しました。よもや私がそんなどこを聞かれるとは思いもよらなかつたのでしきう。兄の中では、私は今でも「小さな香奈恵ちゃん」なのですから。

「ここには私と兄さんしかいないわ。由希子ちゃんは、いても問題ないでしきう。さつきは聞き損ねたけど、もう全部吐き出したら？　お母ちゃんも死んじやつたし、誰にも何も隠すことなんてないじゃない」

「隠してゐるつて……俺は別に何も」

もう言う彰一兄さんは泳ぎ、額には走つて帰つてきたときのものとは違つ、じつとりとした汗が浮いていました。

「よく考えたらおかしいものね。いくらカフェの女給との駆け落ちだからつて、二十年もの間、一度も家に戻らなかつたなんて。お母ちゃんがそこまで頑なに兄さんを許さなかつたともとうてい思えないし、兄さんは私たち兄妹とも会おうとしない。」　私ね、兄さんの家まで行つたことがあるんだよ。手紙に書いてあつた住所を頼りに。でも、そこには全然知らない人が住んでいた

「そ、それは……」

「いいのよ」

言い淀む兄さんを、私は遮りました。

「兄さんが誰どごに住んでいるかはもういいの。それより……ねえ、どうして家を出ていったの？　本当は駆け落ちなんかじゃないんでしきう。本当は、清花さんなんていないんでしきう？」

「……」

彰一兄さんは文字通り言葉を失い、馬鹿みたいに口を開いたまま呆然と立ち尽くしていました。私がそこまで見抜いているとは考へてもみなかつたのでしきう。かれは自らを落ち着けるようにゆつくりと浅い呼吸を繰り返し、やがて観念したのか、力が抜けたように座り込んでしまいました。

「いつから、知つていたんだ？」

「いつからかな。ただ、眞面目で人のいい彰一兄さんが、たつた一人の女性のためにすべてを捨てるなんて考えられなくて。もちろんそういう人もいるのだろうけど、少なくとも兄さんはそんな人間じゃないわ。そう思つと、他に理由があつたんじゃないかなつて考へるようになつたの」

私の言葉を聞きながら、彰一兄さんは自嘲の色を浮かべてうなだれました。その様子は、妹の私から見てもひどくやつれていきました。

「……わかつた。白状するよ。どうせ、もう時効なのだし」

それでも彰一兄さんは、なおも言ひのを躊躇つていうようでした。言いかけては唇を湿し、なかなか話そつとしません。私は辛抱強く待ちます。ようやく口を開いた彰一兄さん。

しかし、次に兄の口から発せられた言葉を聞いたとき、今度は私が目を見開いたまま絶句する番でした。

「俺は……実は」

意を決したように、堅く目が閉じられます。

「俺は……親父を、殺したんだ」

一瞬、私は兄が何を言つているのか理解できませんでした。父をお父ちゃんを殺した。

「そんな……そんなはずはないわ。お父さんは放蕩三昧の挙げ句、若い女郎に入れ込んで駆け落ちしたって！」

「ということになつているが

「なつているつて、だつてお母ちゃんが……！」

言ひかけて、私はふと氣づきました。思えば父が蒸発したという証拠はどこにもありません。もともと不在がちな父でしたが、ある時を境に、まつたく姿を見せなくなつたのです。訝しむ私に、女郎と駆け落ちしたと言つたのは、他ならぬ母でした。私はそれを疑うこともなかつたのです。

「まさか……」

呆然とする私に、彰一兄さんが頷きます。激しい喉の渴きを覚えながら、私はひどくのろのろと、北枕で眠る母に目を向けました。

「おふくろも知っているよ

それは、お母ちゃんも共犯ということでしょうか。さすがの私も予想だにしなかったことで、体の震えが止まりません。

「どうしてお父ちゃんを殺したの?」

信じられないのに、聞きたくもないのに、聞かずにはいられません。

「殺すつもりはなかった。と言つたところで言い訳にしかならないが。清花のことで口論になつて、つい

兄の話によると、清花さんという女性と付き合つていたのは本当のようでした。霧乃富家の跡取りともあるう者がカフフの女給に入れあげのを見かね、父が諫言した。それが口論となり、父を突き飛ばしたところ、打ち所が悪くて死んでしまつたそうです。

話し終え、膝の上で握りしめる兄の両拳は真っ白でした。まるで、死に装束から覗く母の踝のようだ。

「それ、本当なの?」

やはり私には信じられません。偶然とはいえ、氣弱な彰一兄さんが父を殺めることができたなんて。

「ああ。騒ぎを聞きつけて、すぐにおふくろが飛んできたよ。うろたえるだけの俺と違い、死体を見たおふくろは、蒼褪めながらそれを埋めることを思いついた。霧乃富家から殺人犯を出すわけにはいかない。おふくろは、親父の命より霧乃富家の世間体のほうが大事だつたんだ」

「埋める……?」

私はぽんやりと反芻しました。お父ちゃんを殺し、死体を埋める。それはまるで、いつか読んだ新聞記事のように現実味がありません。

『帝都に現る赤マント』

『忽然と消ゆる若き女性』

『依然、行方は知れず』

『殺害し、山中に埋めたか』

扇情的に書き立てる帝都新聞。それを読みながら、いつたい人を

殺して埋めるとはどんな気持ちだらう。どんな人でなしの極悪人だろうと想像したものですが、まさか自分の兄がそれと同じ所業をしていたとは夢にも思いません。

「埋めるって、どこに？」

私の問いかけに、彰一兄さんは縁側に面した障子のほうを指さしました。

「あの桜の木の下に」

「……」

私の耳朶に、誰かが生暖かい吐息を吹きかけます。一瞬、背筋がぞくりとします。思い出すのはこの季節、いつも縁側で桜を眺める母の姿でした。あれは、父の亡靈を見ていたのでしょうか。白昼に現れた鬼は、父、竜三の怨念なのかもしません。きっと母もあの鬼を見ていたのでしょう。

出奔したと思っていた父は、ずっと庭の下にいたのです。その遺体は土の中で腐っています。蛆虫は父の腐肉を喰らい、脳漿を啜り、どす黒い血に濡れて蠢いていたのです。恨みを込めた眼球は溶け、呪詛の言葉を凍り付かせた舌は抜け落ち 丸々と肥えた蛆虫は眼窩を這い、暗い口腔を舐め、やがて蠅となつて屋敷を飛び回っていたのでしょう。

母はすべてを知りながら、色づく桜を眺めていました。思えばそれは何とおぞましい光景でしょう。父は今もこの庭に、白骨死体となつて埋もれているのです。

私は絶句したまま、いつまでも彰一兄さんを見ていました。本当に、かれは彰一兄さんなのでしょうか。気のせいか、障子の隙間から誰かが覗いている気配がしました。

\*\*\*\*\*

人物の数が絞られたこと、十分な「連續した経過時間」が展開されていくこと、人物たちが「落ち着いて、言葉を選びながら」やりとりをしていくことなどから、この場面は十分なレベルにあると感じます（おもしろく読めました）。

「最初の場面からこのスタイルで記述していれば……」と悔やまれます。

繰り返しになりますが、「解説すべきことはすぱつと（=映画「スター・ウォーズ」巻頭の流れ去る字幕のように）語り、あとはじつくり、落ち着いて」が大切だと思います。

ま）またも褒められた！

……と、図に乗ってはいけませんね。「よつやく、小説としての最低条件を満たしてきた」というだけのことです。

この調子でもう一ブロック行きます。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

(一)

「おふくろが生きていたときは、迷惑がかかると思つてずっと黙つてきた。でも」

そう言つて横たわる母を見やる彰一兄さん。その目に、再び涙が浮かんでいます。

「ごめん、おふくろ。やつぱり俺は、墓場まで秘密を持つていくことはできなかつたよ。せつかくおふくろが逃がしてくれたのに」

涙は止めどなく溢れ、嗚咽に変わります。彰一兄さんは、もう自責の念に耐えられなかつたのでしょう。今までただ、母のために沈黙を守つていたにすぎません。しかしその母も亡き今、彰一兄さ

「家に戻つてきたら、おふくろや香奈恵の顔を見たら、俺は心が折  
れて、何もかもぶちまけてしまつただろう。だからこの二十年間、  
一度も帰つてくることはなかつた。いや、帰ることができなかつた  
んだ」

彰一兄さんは、なおも独白を続けました。

「おふくろの死に目に会えないことは覚悟していた。兄妹にも会つ  
ことはないだらうと思つていたし、俺のせいで霧乃富家が終わつて  
しまうことも、本当に申し訳ないと思つてゐる。でも、とにかく、  
俺が秘密を守らなければ……それが　おふくろの願いだつたから。  
それが、俺のできる最後の親孝行だと思つていたから　」

苦悶の表情で語る彰一兄さんの姿は、あまりに痛々しいものがあ  
りました。二十年間、いつたいどれほどの苦しみを背負つてきたの  
が。やつれ、変わり果てたその姿が、罪の意識に煩悶した年月を物  
語つています。自首したほうが、ずっと楽だったに違ひありません。  
一人で抱えるには大きすぎた秘密。ずっと誰かに打ち明けたくて、  
そうして今、兄さんは私に話すことによつやくその咎を償い終えた  
のです。

それを思つと、私はもつ彰一兄さんを責める気にはなれませんでした。

「辛かつたね」

兄とはいえ、親殺しの犯人あまりに甘い言葉でしようか。でも、  
霧乃富家の血に翻弄された彰一兄さんの人生だつて、同情せずにい  
られません。

「済まない、香奈恵」

「もういいよ」

私は泣き崩れる彰一兄さんに寄り添いました。

「それより、そのこと玲子姉さんは知つてゐるの？」

「まさか。俺が玲子に言つわけないじゃないか。そんなことを知つ  
たら、あいつのことだ、真つ先に警察に駆け込むだらうよ。もちろん

ん、おふくろだつて玲子には言つはずない」

それは確かにそのとおりです。玲子姉さんは、自らが霧乃富家に生まれたことを憎んでいるとでもいうように、一刻も早く家を出たがっていました。ろくに仕事もしない父のことは愚弄していましたし、どういうわけか、彰一兄さんとも折り合いが悪かつたのです。

そして、外で多くの妾をつくる父への復讐のように、使用人と姉通している母を蔑んでいましたし、そのせいで母も玲子姉さんに対してはざいぶんと氣を遣つてはいるようでした。玲子姉さんが母を引き取つたのは、娘としての義務感や憐憫などではなく、含むところのある亮平さんの指図だったのでしょうか。そんな姉さんに、母がこのような大それた秘密を語つたとは思えません。

私は自分が震えていることを自覚しながら、恐る恐る母の遺体に目を向けました。誇り高い母だとは知つていましたが、霧乃富家の体裁を守るために、そこまでするとは思いもしませんでした。

でも考えてみれば、父が妾を何人も囮つていてことを知りながら、母は決して養子である父を追い出さうとはしませんでした。離婚すれば世間の笑いものになる。母にとつては、自分のしあわせよりも世間体のほうが大切だったのです。もし、霧乃富家から人殺しが出たといふことが知れ渡れば、それは耐え難い屈辱だったに違いありません。彰一兄さんの罪を隠し通すためなら、殺人の片棒を担ぐことも厭わなかつたのでしょうか。

「ねえ、あそこに誰かが立つていてるよ」

不意に、由希子ちゃんが部屋の奥を指せします。私と彰一兄さんは、思わずその方向を見ました。

「さつき私を呼んだ人だ。よかつた、助かつたんだね」

嬉しそうな笑顔を見せる由希子ちゃん。しかし、そこには誰もいません。彼女には、この世の者ならざる者が見えるのでしょうか。霧乃富家に取り憑く亡靈たち。桜の木の下で眠る父は、いつたいどんな顔をしているのでしょうか。由希子ちゃんに聞いてみたい気がします。

私は何となくうんざりして、溜息をつきました。

「私は、父の死体があることも知らずここで暮らしていたのね。亮平さんが知つたらどう思つのかな。死体のある家 それでも、霧乃富家を入れようとするのかしら」

「何だつて？」

怪訝な顔で、彰一兄さんが言いました。

「亮平さんがこの家を欲しがっているのかい？」

「そうよ。財産はほとんど残つていなければ、屋敷や広大な敷地は充分お金になるだろうから。そんな下心でもなけりや、いくら私が頼んだとはいへ、お母ちゃんを引き取つたりなんてしないわ。お金なんて腐るほど持つているのに、本当に欲深いというか……」

しかし、彰一兄さんは腕を組んで俯き、何か考えているようでした。

「それは妙だな」

「どうして？」

彰一兄さんの言葉に、今度は私が首を傾げる番でした。

「考へてもみ給え。香奈恵が言つとおり、亮平さんがこの屋敷を手に入れて、いつたいどんな得があるんだい？」

「それは……」

「確かに」

言い淀む私を、兄さんが制します。

「確かに、わざかばかりとはいへ、霧乃富家の財産は残つてゐる。しかし、亮平さんほどの人が躍起になつて奪つような価値はないはずだ。くれるというならいざ知らず、今さらこの屋敷程度の金を得るために、あと何年生きるかもわからなかつたおふくろを引き取るはずがないと思うんだが」

「……」

彰一兄さんの言葉に、私は呆然としました。言われてみれば、そのとおりの気がします。亮平さんは、打算的な人です。自分が損をしてまで人のために動くことを、何よりも嫌います。義理

立てするだけの理由で母を引き取るはずがありません。

「それじゃあ、亮平さんはどうしてお母ちゃんの面倒を引き受けたの？ 嫌がる玲子姉さんを説き伏せてまで。それに、お母ちゃんの葬儀に兄さんを喪主に立てなかつたのだけ、霧乃富家を乗つ取るための布石だつたと思つんだけど」

彰一兄さんは、眉根を寄せてなおも考え込みました。

「俺も亮平さんの性格をよく知つてゐるわけじゃないが、何かたらんでいるのは事実だらうな。まあ、喪主を立てなかつたのは、俺への当てつけとしても。田代が本当にこの家だとして、亮平さんには何の得があるのか……」

私にわかるはずがありません。兄さんも押し黙つたまま、答えを求めるように仏壇に目を向けました。漂う麝香の煙に、気まずい沈黙がまじります。燭台で燃える燭の炎は、その静寂を躊躇いがちに破るように、かすかな音を立てて揺らめきました。

「お母ちゃん、やっぱり玲子姉さんの家に行つてから何かあつたのかな」

私は沈黙に耐えかね、もうひとつ疑問を口に出しました。

「何かつて？」

「うん、実はね」

一瞬、言つのを躊躇いましたが、やはり彰一兄さんにも話しておいたほうがいいのでしょうか。

「お母ちゃんの最期【微妙ですが、「期」でもOKと感じます】、結構大変だったんだよ。意識は三日前からなかつたのに、臨終の間際になつて目を覚まして」

言いながらそのときの鬼の形相を思い出し、私は戦慄しました。思わず布団に横たわる母から目を背けます。

「それはもう、何かが乗り移つたみたいに恐ろしい顔をして、『まだ、ここに来ておらん者がいる』って

脅かすつもりはありませんでしたが、そう言つ私の口調は、昨夜のしゃがれた母の声にそっくりでした。

「お、俺のことか？」

彰一兄さんは、驚愕に目を瞠りました。私はゆっくりと頷きます。  
「多分、そうだと思います。お母ちゃんが会いたがっていた人なんて、兄さんしかいないはずだし」

「……」

彰一兄さんは、再び苦悶の表情を浮かべてつなだれました。

「いえ、違うの。兄さんを責める気はないわ。ただ、お母ちゃんは『騙された』というようなことを言つていたから……」

私の脳裏たはかに、昨夜の母の言葉が甦ります。

謀りおつて……おまえらは、よつてたかつて儂を謀りおつて

それが何を意味するのかも、ずっと気になつていていたのです。

「俺にはわからん。何しろ、一十年間一度もおふくろに会つていな  
いのは本当だ。そのことを恨んでいたと言われば返す言葉もない  
がしかし、俺は自分が一度と霧乃富家を訪れないことが最良だ  
と思つていたんだ」

「だから、兄さんを責めるつもつはないわよ。目を覚ましたといつ  
ても意識は混濁していたのだろうし、出た言葉に何の脈絡もなかつ  
たのかもしれないけど、でも、お母ちゃんの最後の言葉だったから、  
どうしてほしかつたのかなと思つて」

「たとえ亮平さんのところでひどい仕打ちを受けていたのだったと  
しても、おふくろを見捨てた俺に文句を言える筋合いはない」

彰一兄さんは、自嘲の響きを交えて言いました。

「そもそもの原因はすべて俺だからな。身から出た鏑だ。誰に何を  
恨まれようとも、仕方ないじゃないか。そりやあ、おふくろだって  
俺を恨んでいたし、失望もしていたと思うよ」

私は彰一兄さんの言葉に、どこか訝然としないものを感じていま  
した。確かに霧乃富家の矜持を重んじた母であれば、兄さんには失  
望していたのかもしれません。しかし、『謀る』とはどういうこと  
なのでしょう。彰一兄さんが、いつ母を謀ったというのでしょうか。

もつとも、死の間際の讐言であれば、何の意味もなかつたと考えるのが筋かもしませんが……。

薄暗い座敷を、再び沈黙が支配します。畳に落ちる影が、大きく揺らめきました。気がつくと、仏壇に灯された？燭が消えかかっています。私は立ち上がり、燃え尽きようとしている線香と？燭を取り替えました。本来は金箔で塗られていたはずの霧乃富家の仏壇は煤で真っ黒に汚れ、位牌の向こうは地獄へと続く通路のようです。母の魂は、すでに黄泉の旅路を歩んでいるのでしょうか。

ぼんやりと物思いにふけっていた私の傍らに、誰かが立ちます。

「由希子ちゃん？」

それまで黙つて座っていた由希子ちゃんが、突然立ち上がり、仏壇の向かいの襖を見ていました。

「由希子ちゃん、どうしたんだい？」

彰一兄さんも、怪訝な顔で言いました。お人形さんのように整つた顔立ちの由希子ちゃんは、その瞳も硝子玉であるかのように、どこかこの世ならざるものを見しているようでした。

「また、女人がいるの」

由希子ちゃんはそう言つて、部屋の奥を指しました。私と彰一兄さんは驚いて顔を見合わせます。普通であれば、そんな怪談めいた話に取り合ははずもありませんが、なんせ通夜を終えた夜。傍らには母の遺体が眠っています。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仏できぬ父の死体が埋められていました。また、庭には成仮にする戯言とはいえ、笑い飛ばすことはできませんでした。死靈がさらに靈魂を呼び寄せたのか、それとも霧乃富家には私たちの「より知らぬ死体がまだ埋められているのか。本当に、脈々と続いてきた家系などというものは、ろくなものではありません。

由希子ちゃんは何かに誘われるよう、部屋の襖を開け、ゆらり、ゆらりと歩いていきます。

「ちょっと、由希子ちゃん」

彰一兄さんも立ち上がり、彼女の後を追います。私は手燭の？燭

に火を灯し、慌てて一人を追いました。由希子ちゃんをむりやり連れ戻そうかとしましたが、なぜかそつすることは躊躇われました。

それは彰一兄さんも同じのよつで、まるで由希子ちゃんに導かれるように後をついていきます。

「兄さん、何か見える？」

私は声を潜めて問いを発しました。

「いや、何も」

答えは短く、田は前を見据えたままです。私たちは口もきかず、暗い廊下をゆっくりと歩いていきました。床板の軋む音だけが、闇に響きます。手燭の炎に照らされる兄の顔は蒼白でした。おそらく、私の顔も死人のように蒼褪めているのでしき。まるで私たちが、霧乃宮家を徘徊する幽鬼のようです。

由希子ちゃんが向かうのは、先ほどと同じ家の奥、かつて使用人が住まつた部屋が並ぶところのようでした。そこは三畳の狭い部屋が三つ続いており、由希子ちゃんが足を止めたのはその真ん中の襖の前でした。果たしてここに何がいるというのでしょうか。激しい喉の渴きと、全身が粟立つを感じます。

しかし、私の恐怖をよそに、由希子ちゃんは何の躊躇いもなくその襖を開けました。

思わず目を背けます。

「香奈恵……！」

彰一兄さんが私の手を取りました。

「大丈夫、誰もいない。いや、いるはずないじゃないか」

その言葉を聞き、私は恐る恐る田を向けました。淀んだ空氣に、餒えた臭いがまじっています。手燭が照らすその部屋は何もなく、彰一兄さんが言うとおり、誰かがいるわけでもありません。由希子ちゃんが足を踏み入れたので、仕方なく私たちも後に続きます。三畳間のそこは、大人三人が入れば息苦しさを感じるほどの狭さでした。

「由希子ちゃん、ここに何があるんだい？」

彰一兄さんが、幼い子供に話しかけるように由希子ちゃんに問いかけます。由希子ちゃんは無言で、壁の一部を指さしました。私はつられて、そのほうに手燭を掲げます。暗がりに映し出される白壁は、何となく染みで汚れているようですが、それ以外に変わったことはありません。

「何があるの？」

私は眉をひそめました。

（編）【客観的表現で、一人称の語り手にはなじみません】

ま）え、「眉をひそめた。」って、客観記述になるんですか？これは知らなかつた。何て書けばよかつたんだろう。「私は怪訝に思つた。」、「私は訝しだ。」かな。

「何もあるわけが……」

言いかけて、彰一兄さんは鋭く息を？みます。

「！」、これは「！」

何かに気づいたのか、彰一兄さんの口から驚愕の声が漏れました。壁を指さす手が震えています。私は意味がわからず、さらに一歩進み出て目を凝らしました。

しかし次の瞬間、その正体に気づいた私は、衝撃のあまり危うく手燭を落とすところでした。

「な、何なの。これは……」

その問いに答えられる者は誰もいなかつたでしょう。壁に浮かぶいくつもの染み。

おお！しかし染みと思っていたそれは、一面に若い女性の顔を描いていたのです！表情は苦悶に歪み、目は助けを求めるように私たちを見据えています。私も彰一兄さんも、蛇に睨まれた蛙のように身動きができずにいました。

「伯父さん、叔母さん、助けてあげてよ」

壁に浮かぶ女性の気持ちを代弁するよつて、由希子ちゃんが私の

裾を引きます。私は声を発することもできず、呆然と立ち尽くしていました。異様な寒気を覚え、歯の根も合わないほど震えています。

「香奈恵、行こう。ここにいるのは、まずい」

ようやく絞り出すように、彰一兄さんが言いました。

「由希子ちゃんも戻ろう、ね」

「でも、この人も助けてって言つているよ」

「大丈夫だから。さあ、行こう」

彰一兄さんは両手にそれぞれ私と姪っ子の手を引き、足早に部屋を出ます。私は必死に恐怖に耐えながらも、あの女性が追つてくるような気がして、何度も後ろを振り返りました。本当なら、とっくにこの家を出たかったのですが、母を一人残していくわけにはいきません。逃げる先は、同じ屋根の下の仏間しかありませんでした。私たちも転がり込むように部屋の襖を開けました。

しかし、そこで待ち受けていたものは、私は今度こそ、自分が発狂したのかと思いました。布団の上で、手を組んだまま永遠の眠りにつく母。なのに顔を覆っていた白い布は、まるで自らの意思で払いのけたとでもいうように、その胸元に落ちていました。そうして、あらうことか臨終の間際と同じ夜叉の形相で、仏間に戻つてきた私たちを睨んでいたのです。その目には相変わらず、憤怒の炎を宿して。

恐怖は限界を超えたのでしょ。私は自分が絶叫を発していることにも気づかぬまま、その場で氣を失つたのです。

\*\*\*\*\*

(編) おもしろかつたです！

ま) ありがとうございます！

## 与太話 その？ 神の視点・補足

批評公開の途中に申し訳ありません。次話の『円城寺まどかをフルボッコ？』があまりにつまらないから、少しまともな話でもしようと……

というわけでもないのですが、完結前にどうしても言いたいことが出てきたので。

（「悪文排斥」は、この批評公開をもつて終了です）

今さらですが、人称と視点の補足です。

第一回で詳しく解説したつもりでしたが、どうやら『三人称・神の視点』いわゆる純正（完全）三人称については、いろいろと誤解もあるようなので。

自称「小説における視点マニア」の田城寺まどかが、「神の視点」についてもう一度詳しく解説します。

そもそも現在においては純正三人称が書けない 事実上一人称しか書けない プロ作家というのもめずらしくなく、まして最初から最後まで神視点を貫く作品というのは、ほとんど絶滅してします。若い人の中には、「純正三人称の小説を読んだことがない」という方もいるのではないでしょうか。

純正三人称は、「人物の内面を表情や行動から推察させる」という高度なテクニックを必要とし、読み手にも一定の読解力を要求されるため、「出来のいい純正三人称ほど地味な印象になる」というデメリットもあります。「書いたところで誰も理解してくれない」と、今や三人称と言えば人物視点の疑似三人称（複数視点）を指し、本来の「三人称」は廃れてしまいました。ある意味、「現在は疑似三人称ができれば充分。純正三人称は必要ない」とも言えます。

しかし、作家本来の実力が如実に表れるのも純正三人称であり、本当の意味での「文章力」を身につけるには、これを体得するしかありません。

ただ、読んだこともない純正三人称には誤解も多いようで、「神の視点」と思っているものは実は違うものだった（疑似三人称だった）「ということも多々あるようです。

誤解してませんか？

基本的には全てを客観的に描く純正三人称。演劇を、観客席から眺めている自分を思い浮かべてください。その場で、自分が見聞きしていること、感じる空気、匂いを言葉によつて伝えます。ですが純正三人称であつても、

「主人公の内面を（）を使って記述すること、および、『彼はと思った。』と断定するのは、完全にOK」

です。

「感情を抑制した内面描写」ともいうのでしょうか。 田中芳

樹御大の『銀河英雄伝説』は、純正三人称で、主人公にとどまらず大勢の内面に踏み込んでいますが、この「感情を抑制した内面描写」が抜群に巧いです。ぜひ一度参考にしてみてください 神の視点と人物視点の違いは、要は地の文が「誰の声か」ということで、作中の人物の主観なら疑似三人称（三人称・人物視点）です。

なかには神の視点というには人物の視点でありすぎる（主観記述が多すぎる）、純正三人称への過渡期、「不完全純正三人称（なんだそりや？）」とでもいうべきものがあつたりしてややこしいのですが。見極め方は、自由間接話法（つまりは人物の独白）以外の通

常の地の文で『こっち・こちら』という意味合いの言葉が書かれていないかがひとつ のポイントになります。

（もつと簡単な方法は、三人称で書かれている作品の主人公の名前を、「僕」、「私」に置き換えてみてください。主人公の外見は客観的に描写しているはずなので違和感が残りますが、それ以外の部分が一人称として読めてしまうのなら『疑似三人称（人物視点）』です。それが意図的ならいいのですが、「これ以外の三人称の書き方がわからない」のであれば、「一人称しか書けない作家」ということです。主語を置き換えるだけで三人称なら誰も苦労はしません。）

繰り返しになりますが、主人公以外の人物に対しては、

「まるで　　と言いたげに」、「さも　　と言わんばかりに」、「  
と思つて いるに違ひない」

などが使えます。このような推察+表情やしぐさ、または口調、行動+台詞があれば人物の内面を描写するのは充分であり、「わざわざ読者に違和感を与えてまで主格となる人物を入れ替え、内面を独自する野暮な技法（複数主格）」は、本来必要ないのです。

複数視点、つまり主格となる人物を入れ替えることに違和感を憶えないという人は、純正三人称を読んだことがないのだと思います。もちろん三人称・人物視点は、一定の条件を満たした上で入れ替えることはOKですが、読者は面食らいます。

（しかし主人公の目線でありながら、「主人公」語り手ではない」という理由で立ち位置（視点）を変えることが許されるなんて、パチンコ屋の景品換金システムにも似た屁理屈だと思いますけどねえ。）

実際、純正三人称そのものと言える映画では、登場人物が片つ端

から内面を独白（ナレーション）するなんてあり得ないでしょう？  
そんなことをしたら、俳優の演技力 小説で言うところの文章  
力 なんて、ほとんど関係なくなってしまいますからね。

一人称や疑似三人称が悪いわけではありませんが、一度、純正三人称も書いてみることをお勧めします。書くことそのものが一人称とはまったく違いますので難儀します。しかし、「客観的に人物を描く」のは、一人称でも必要となる技術ですので。

偉そうなことを言いましたが、いつもの如く口先だけです。私も「出来のよい純正三人称」を書ける自信ははまったくありません。  
(笑)

「悪文排斥」第二十一回。『霧乃宮一族の滅亡』批評レポート、第四章からです。今回も言葉の指摘に終始し、あまり中身はありません。

\*\*\*\*\*

#### 第四章 春の火刑の焼け野原

（一）

「やあ。起きたのかい、香奈恵」

私が目を覚ますと、目の前には安堵したように笑う彰一兄さんの顔がありました。一瞬、自分がどこにいるのかわからくなり、慌てて体を起こします。

見慣れぬ木目の天井と、麝香の香り。言わずと知れた、霧乃宮邸の仏間でした。

「ああ、大丈夫か？ まだ早いから、寝ていればいいよ」

隣で静かに寝息を立てている由希子ちゃんを気遣つてか、彰一兄さんは囁くように言って私を押しとどめます。

「私は……」

どうなつたのでしょうか。事態を把握しようと、辺りを見回します。仮間の障子からはやわらかな陽が差し込み、雀の囀りが耳に届きました。どうやら気絶してそのまま朝まで寝入つてしまつたようです。昨夜、恐ろしい顔で私を睨んだ母の顔には、再び白い布が掛けられていました。果たして今も、布の下では悪鬼の形相を呈しているのでしょうか。気にはなりましたが、それを確認しようとは思いま

せんでした。小さな祭壇に目を向けると、位牌の前で焚かれる？燭と線香は火を絶やしていません。彰一兄さんが一晩中仏の守りを務めてくれたようです。

「吃驚したよ。部屋に戻つたら、突然倒れてしまつたから。前日も徹夜だつただろ？しきつと疲れていたんだな」

彰一兄さんは、明るい口調で言いました。私は氣を失う前後のことを思い起こします。由希子ちゃんに誘われるままに屋敷の奥へと行き、そこで見たもの。そして、戻ってきたときの母の顔。思わず身震いしたのは、朝の冷氣のせいではありませんでした。

「ねえ、兄さん。あれはなんだつたのかな。あの女人人はいつたい

」

脳裏には、何かを訴えようとする女の顔が今も焼き付いています。

「香奈恵」

彰一兄さんはやつれた顔に、泣くとも笑うともつかぬ表情を浮かべて私を遮りました。

「考えないほうがいい。昨日は疲れていたんだよ。あの部屋には誰もいない。いるわけないじゃないか」

「でも、兄さんだつて見たでしょ。壁一面に浮かぶ女の顔を。私だつて悪い夢だと思いたいけど、やつぱりこの屋敷には何かあるのよ」

「……」

今度は彰一兄さんが黙る番でした。「霧乃富家にある何か」

庭に埋められた父、竜三の憤怒と、仏間に横たわる母の狂気が呼び寄せた悪霊は、いくら否定しようとも確かに屋敷の中にはいるのでした。

「私、もう一度見てくるわ

障子から差し込む朝の光が、私を奮い立たせました。魑魅魍魎の跋扈する夜は終わり、霧乃富家に今いるのは、生ある者だけのはずです。私が生まれ育つた屋敷に他人が土足で踏み上がられるのは、たとえ幽霊であれ我慢がなりません。私は布団を払いのけて立ち上

がると、縁側に出る障子戸に手を掛けました。

「香奈恵！」

その瞬間、彰一兄さんは私の手を？み、再び引き留めました。

「誰もいない。俺が確認したんだ。あの部屋はもちろん、屋敷の中にはいるのは、俺たちだけだよ。だから、香奈恵が行く必要はない」

「兄さん……」

かれは、なおも何かを隠しているのでしょうか。私を見据える目は、これ以上追及しないようにと必死に懇願していました。父の殺害さえ打ち明けてくれた彰一兄さんが、今さら何を隠す必要があるのか。相当に訝しみましたが、どうやら力強くでも私を押しとじめるつもりのようです。

「わかった。兄さんがそう言つのなら間違いないわね」

私は力なく溜息をつくと、兄の手を振りほどきました。もちろん、その言葉どおり納得したわけではありません。ただ、今はその理由を聞いても、かれは何も話してくれないでしょう。

「済まない、香奈恵……」

彰一兄さんは安堵したよつて息を吐き、口に来てから何度も目かになる謝罪の言葉を口に出しました。

「もういいわ。きっと私の見間違いなのだろうし。それより、由希子ちゃんを起こして今日の準備をしておかないと。すぐに近所の方も集まつてくるわ」

十九歳という立派な娘であるはずの由希子ちゃんは、まるで純真無垢の赤ん坊のように安らかな顔で寝息を立てていました。昨夜のことは、まるで意に介していないようです。【白痴】である由希子ちゃんの世には、この世の者もあの世の者も、区別なく映るのでしようか。生きることはあまりに辛く、いつか訪れる死は幸福の安らぎになるであるつ彼女にとって、生と死の境界はあやふやなのかもしきません。

私は何となく姪っ子が不憫に思え、夢の世界から引き戻すのを躊躇いました。

そんなとき、帝都の静寂を打ち破るよつよつ、遠くから自動車の音が聞こえました。やがてそれは、霧乃富邸の前で止まります。私と彰一兄さんは顔を見合わせ、障子を開けて表を見やりました。門の前に停まっているのは、一台の黒塗りのオースチンでした。

「亮平義兄さん？」

中から出でてきたのは、まぎれもなく亮平さんです。まだ珍しい黒の洋装にステッキを持つその姿は、まるでキネマ館のスクリーンに映し出された弁士のようでした。

「もう来たのか……」

予想外に早い来訪に、彰一兄さんも驚きの声を上げました。

「早く由希子ちゃんを起こさないと。　由希子ちゃん、起きてちようだい。お父様がいらっしゃったわよ」

つい先ほどは眠りを妨げることを躊躇いましたが、もうそんなことは言つていられません。私は勢いよく布団をめぐると、寝ぼけ眼の由希子ちゃんを引き起しました。

「お父様よ。さア、お顔を洗つていらっしゃい」

今まで寝ていたことが知られれば、またどんな嫌味や折檻が待ち受けているかわかりません。取り敢えず由希子ちゃんを部屋の外に出し、慌てて布団を押し入れに仕舞い込みます。

亮平さんが入ってきたのは、何とか場を取り繕つた直後でした。

「お早うございます。朝早くからご苦労様です」

亮平さんが入つてくるなり、彰一兄さんは畳に手をついて頭を下げました。まるで主人を迎える使用人のような態度です。一方の亮平さんは、尊大な態度で睥睨していました。この場合、亮平さんも座して畳に手をつき、挨拶を交わすのが礼儀ではないでしょうか。一瞬怒りを覚えましたが、彰一兄さんがちらりと目線で咎めるのに気づき、私も仕方なくそれに習いました。

「お早う。彰一君と香奈恵ちゃんこそご苦労だった【ネ】。

(編) キヤラ表現なのかもしだれませんが、この「ネ」は奇妙に感じ

られます。

ま)すみません。これも自己満足でしかないみたいですね。

一晩中、仏の守とあつては一睡もできなかつたかつただろう。「いえ、お義兄さんにはお世話になりっぱなしで。私にはこれべりいしかできませんから」

彰一兄さんは畳に頭を擦りつけんばかりにして言いました。本来なら、いくら歳上といえど、妹の旦那である亮平さんを「お義兄さん」と呼称する道理もありません。もちろん、それは承知の上での意図的なものでしょう。霧乃富家を捨てた負い目が、自らを卑下させるのかもしれません。

しかしそれは、亮平さんの気に入るようでした。自尊心を満足させたときの癖である鼻の穴をひくつかせながら、恰幅のいい体を摇ります。

「今さら遅いかもしれないが、彰一君にとつては最後の親孝行だつたネ。きっとお母様も喜んでおられるよ。長年会えなかつた息子と、ゆつくり一晩過ごせたのだから」

「亮平さん!」

たつぱりと嫌味を含んだ言葉に、私は思わず憤慨しました。しかしそれさえも、彰一兄さんは私の裾を?み、首を振つて諫めます。

「お義兄さんには感謝しております。母の最期を看取つていただきこと、勝手に出ていつた私にも、葬儀の参列をお許しいただいたこと。本当に、何とお礼を申し上げればよいか?……。不甲斐ない私のせいで、ご迷惑をおかけしました」

「なに、義理とはい子が親の面倒を看るのは当然のことだ。だいたい、霧乃富紗江子ともあろうお方が孤独な死を遂げたとあつては、世間様に示しがつかない。それに、親戚筋にある私にとつても名折れだからね。何も案ずることはないよ。今後のこととは、すべて私が取り仕切るから。彰一君だつて、自分の生活があるんだ。今さら霧乃富家のこと、頭を悩ませたくないだろ?」

極めてもの柔らかな言い方ではありましたけれども、それは「霧乃富家の権利は自分のものだ。誰にも口は出させない」という言い條に他なりませんでした。

「そう言つていただければ幸いです。凡庸な私では、今後どうすればいいのか見当もつかず、途方に暮れていましたので。これ以上お世話になるのも心苦しいのですが、どうかよろしくお願ひします」

「乗りかかった船だからネ。安心し給え、霧乃富家の名を辱めるようなことはしないから」

私は頭を下げたまま、体をわなわなと震わせていました。唇を？みしめる顔は、蒼白だったに違ありません。やはり亮平さんの狙いは霧乃富家の財産だつたのです。彰一兄さんはそれをわかつていながら、どういうわけか、いとも簡単に手放してしまいました。

「ところで、玲子は？ 一緒にいらつしやつたのではないですか？」

彰一兄さんは平伏したまま、亮平さんを見上げて問いを発しました。

「ああ、取り敢えず私が一番にいないと格好がつかないだろう。あいつは後から、ハイヤーでやってくるよ。それにしても……えい、ここは線香臭くてかなわん」

本当に嫌でたまらないと言いたげに鼻に皺を寄せ、亮平さんは仏間を出てどこかへ歩いていきました。亮平さんの姿が見えなくなると、私は思わず溜息をつき、ゆつくじと立ち上がりました。

「兄さん、これでいいの？」

いいわけはありませんが、聞かずにはいられません。

「お母ちゃんがずっと守つてきた屋敷が、亮平さんに取られちゃうんだよ。兄さんが一言、『渡さない』って言えば、家は残るかもしないのに。多少のお金なら聰太郎さんに、夫に頼めば正面できるから……だから、私たち兄妹で家を守つていこうよ」

私は悔しさと悲しさのあまり、涙を浮かべていました。これでは母も浮かばれません。しかし、彰一兄さんは私の言葉にも首を縦に

は振りませんでした。

「もういいよ。屋敷を残したところで、誰かが住むわけじゃないし。俺は戻つてくるつもりはないんだ。それに、おふくろが守つてきたのはこの屋敷ではない」

私は眉根を寄せて兄を見ました。

「それは、どういった意味？」

「いや、つまり……。ともかく、悪いよつとはしないから。霧乃宮の者として、ちゃんと責任は取るつもりだ」

「……？」

彰一兄さんの言葉に、私はますます首を傾げました。かれは何を知つているのでしょうか。そうして、何をたくらんでいるのでしょうか。聞きたいことは山ほどありましたが、それ以上彰一兄さんを問い合わせることはできませんでした。

責任は取るつもりだ。

その意味はわかりませんが、彰一兄さんは何かしらの考え方があるようです。今まで気づきませんでしたが、口元を引き結んだ意志の強さを表す顔は、亡くなつた母にそっくりでした。

彰一兄さんを招いたのは私でしたが、ひょっとしたら母の導きだったのかもしれません。私はもう何も言わず、今日の葬儀の準備に取りかかることにしました。

葬儀自体を取り仕切るのはご近所の「お取り持ち」ですが、かれらは葬儀が終わつた瞬間に「お客様」と変貌します。一日間の労をねぎらい、もてなすのは、私たち親族の役目です。

私は下準備をするため、彰一兄さんを仏間に残して台所へと向かいます。その途中、廊下でそれ違つたのは、先ほど部屋から追いやつた由希子ちゃんでした。若い娘ならではの、艶やかな黒髪に白い肌。大きな瞳は純真無垢を表すかのように澄み渡り、口元にはあどけない笑みを浮かべていました。つられて、私も思わず？がゆるみます。

「由希子ちゃん、お早う。目が覚めた？　お婆ちゃんのお部屋に戻

つて、ちょっと待つていてね

子供と同じような言葉で大の大人に言い含めるのは、どうにも違和感があります。しかし、次に由希子ちゃんの口から発せられたのは、返事とはまったく別のことでした。

「昨日の女人、お父様とお知り合いなのかな？　お父様は女人がいる部屋に入つていつたわ

「え……？」

思いがけぬ言葉に、私は驚愕しました。夢か現か、昨夜現れた壁一面に浮かぶ女人の顔。何の用があるのか、亮平さんはあの部屋に足を踏み入れたというのです。

「それ、本当なの？」

「うん。でもね、お父様は『由希子はあっちに行つてなさい』って言つた。私ももう一回あの人に会いたかっただけだ。ねえ、あの人は大丈夫だつたのかな？」

確かに由希子ちゃんの話では、女人は助けを求めていたというのです。いつたいあの女は誰なのでしょう。そして、何から逃れようとしていたのでしょうか。見知らぬ彼女もまた、霧乃富家の呪いによつてこの世にとどまつているのかもしれません。

私は由希子ちゃんに仏間に戻るように告げ、亮平さんが入つていつたという例の部屋へと向かいます。彰一兄さんとの約束を忘れたわけではありませんが、やはり昨夜のことが気になつて仕方がなかつたのです。彰一兄さんは何を知つているのでしょうか。そして、亮平さんがあの部屋に何の用があるというのでしょうか。私は嫌な予感にせかされるように、足早に廊下を進みました。すでに夜は明けたせいか、屋敷の中を彷徨う悪霊とすれ違うこともありません。しかし、その代わりにばつたり出くわしたのは、ちょうど襖を開けて出てきた亮平さんでした。

「香奈恵ちゃん」

「亮平さん……」

私たちは同時に驚きの声を発しました。

「どうしたんだネ、こんなところで」

亮平さんは、さも奇遇だと言わんばかりに尋ねました。その顔は一見、喜色を浮かべていますが、私を見る目はこの場から追いやろうとする小昏迷の炎に燃えています。

（編）【小昏迷？ 辞書類に記載ありません】

ま）小昏迷　ええと、「暗い」と同じ、後ろ暗い、やましいといつ意味ですが……ひょっとして当て字になるんでしょうか？

（）は霧乃富邸。あとから思えば、屋敷の中において私が気を遣うことは何ひとつないはずです。しかし、命令しなれた亮平さんの高圧的な態度に、私はつい萎縮してしまいました。どう言い訳をすればいいのでしょうか。一瞬、狂気のように頭脳を回転させます。

由希子ちゃんの見たものや昨夜の出来事を話しても、亮平さんは馬鹿馬鹿しいと一蹴するだけに違ひありません。また、普段から由希子ちゃんの虚言を快く思っていないかれのことです。幽靈騒ぎを正直に話したところで、由希子ちゃんが折檻を受ける火種をつくるだけでした。

「いえ、今日の精進落としの用意をしようと台所に来たのですが、何やら物音が聞こえたもので……亮平さんだったのですね。安心しました」

私はそう言つて、むりやり笑つてみせました。

「ああ、驚かせて済まなかつたネ」

「ところで、亮平さんこそどうしてこんな部屋にいらっしゃつたのですか？　ここは以前、使用人が寝起きしていた部屋です。使われなくなつてしまふんと経つのですが、何がありました？」

昨夜の出来事は伏せ、「ふと疑問に思つた」という風を装つて首を傾げます。

「いや、ついに霧乃富邸も住む者が居なくなつたかと思つと、何やら感慨深いものがあつてネ。ついうちうるさいこんなところまで来て

しまつたんだよ

「そうでしたか……祖父が健在だった頃はまだ多くの使用人を雇い、賑やかな屋敷だったのですが。何だかもう、遠い昔のようだと思えますね」

私はさも共感したかのように、しんみりと言いました。どうせ、霧乃富邸を值踏みしていたのに違いありません。ここが幽霊屋敷だと知れば、亮平さんは何と言うのでしょうか。手に入れるのを、諦めてくれるのでしょうか。しかしそれは、私の口から告げることではありませんでした。

「そうだね。ずいぶんと、昔の話だ」

亮平さんの相づちは、どうでもいいと言いたげでした。

「忙しいのに悪かったネ。食事の準備をしなければいけないのだろう? じきに玲子も来るから、手伝わせることにしよう」

それは、この話はもう終わりだという合図に他なりません。私は作り笑いを浮かべて軽く会釈すると、踵を返して台所へと向かいました。背中には、射抜かれるような視線を感じます。それが亮平さんのものなのか、それとも別の誰かなのか、確かめる勇気はありませんでした。

\*\*\*\*\*

\*\*\*

(編)この場面も「要件を満たした記述」ですが、この時点で「壁に現れたのは亮平が殺した女」と読者は察すると思います。

ま)やつぱりそうですか? 今になつて読み返すと、人物のみんながみんなが思わせぶりで、自分でも話の進め方にぎこちなさを感じます。

「悪文排斥」第二十一回。批評レポートの最終回です。前回の続  
きでいくと第四章の第一部からとなります。特に指摘が入るわけ  
でもなく、省略させていただきます。

物語は最終章から、総括となる批評とともにお届けします。

\*\*\*\*\*

## 第五章 霧乃宮一族の滅亡

亮平さんを見送つてから屋敷に入ると、やがて降り出した雨が屋  
根を叩く音が聞こえました。吹きつける風は激しく、庭の木々がざ  
わめいています。それはまるで、死人が出た家に呼び寄せられると  
いう悪鬼の咆哮のようで、不気味に鳴り響く風音は、私たちを落ち  
着かない気分にさせました。

「雨戸を閉めたほうがいいかな」

彰一兄さんの言葉に、私と玲子姉さんも立ち上がります。  
外はまだ日暮れ前だというのに、厚く垂れこめた雲のせいでずい  
ぶんと暗くなつていました。

せつかく満開になつた庭の桜に、心ない嵐が吹き荒れます。激し  
く舞い散る桜花。しかし、散りてなお、花はいつそうあでやかに色  
を増すかのようです。それは、土に埋められた竜三の血の色でしょ  
うか。木の根が吸い上げた血のせいで、花は見事に染まるのでしょ  
うか。嵐の中に散りゆく桜は悲しいほどに美しく、私は思わず呆然  
と立ち尽くしてしまいました。

と、そのとき、濡れる桜の木の下に、一瞬、白い布がひらりと舞  
います。

「あ」

しかし次の瞬間には、それは幻の「」とく消え去りました。鬼でしょうか？ 昨日も見た、魂を喰らつ白装束の鬼。

「どうしたの、香奈恵ちゃん」

思わず発した声を聞き、玲子姉さんが怪訝そうに眉をひそめます。

「いえ、何でもないわ」

私は慌てて答えると、鬼が入つてこないことを祈りながら雨戸を閉めて廻りました。

霧乃富邸は差し込む光もなく、一足先に闇が訪れます。座敷に集まつた私たちを照らすのは、頼りなげな小さな洋燈でした。

「何年ぶりだろうね。こつして兄妹三人がそろつのは」

彰一兄さんは嬉しそうに言いました。

「二十年ぶりぐらいかしら。昔は賑やかで楽しかったね。お母ちゃんも、お爺ちゃんもいて。住み込みで世話をしてくれたマサさんだつけ。元気にしているのかな」

『お父ちゃん』を入れなかつたのは意図的でした。姉さんが昔のことを詮索しないとも限りません。しかし、玲子姉さんは私の話など聞こえぬように、どこか落ち着かなげでした。

「姉さん？」

私の呼びかけに、はつとして顔を上ります。

「そ、そうね。元氣かしらね」

返つてきたのは、上の空の答えでした。何が気になるのか、玲子姉さんは雨戸を閉め切つた縁側にしきりに目を向けてます。つられるように、私と彰一兄さんもそちらを見やりました。

誰かがいるわけではありません。ただ、激しく降りつける雨音だけが聞こえています。それとも、土の中から甦つた父が、白骨の拳を握りしめて戸を叩いているのでしょうか。春嵐の中、雨に濡れた觸體しやねいづみが、舌の抜けた顎をカタカタと鳴らしているのです。

もつとも、玲子姉さんは父が庭に眠つてのことなど知る由ありませんが。

私は戦慄を覚え、思わず目を背けました。

せつかくの団欒の場に、白けた空気が漂います。彰一兄さんも玲子姉さんも、どこか所在なげで居心地が悪そうです。

それにも彰一兄さんは、どうして急に兄妹三人で一夜を過ごすなんて言い出したのでしょうか。その意図は？みかねないものがありました。

「ねえ、お婆ちゃんがいるよ」

突然、そう言って部屋の片隅を指さしたのは、またも由希子ちゃんでした。思わず全員の目がそちらに向けられます。しかし、もちろんそこに母の姿はありません。少なくとも私の目には何も映りませんでした。

「由希子、脅かさないでちょうどいい。お母ちゃんがいるわけないじゃないの」

「こるよ。座りこなしあを見てるよ」

「由希子ー。」

玲子姉さんは蒼褪めた顔で叱りつけました。由希子ちゃんは涙目で俯き、口を閉ざしてしまいます。

「何なの……この家には、何かいるの？」

苛立つた口調で呴く玲子姉さん。やはり姉さんも何かを感じるのでしょうか。しかし、その問いに答える者はいません。彰一兄さんも黙つたまま、陰鬱な表情で俯きます。洋燈に照らされるかれの横顔は蒼白でした。

ああ　由希子ちゃんの目には、いったい何が見えるのでしょうか。母の魂は、まだこの屋敷を彷徨つているのでしょうか。言わせてみれば、母の気配を感じなくもありません。

「お母ちゃんは、何が心残りだったんだね……」「決まってるじゃない」

つい、口をついて出た私の疑問に、玲子姉さんはすかさず答えました。

「兄さんを恨んでいるのよ」

決めつけて、彰一兄さんを指さします。

「姉さん、それはもう終わったことだから……」

しかし、なだめる私の言葉は、姉さんの耳に入らぬようでした。「兄さんさえ出でいかなければ、お母ちゃんはずつといじられたのに。そうすればあの人だって、お母ちゃんを引き取るなんて言い出をなかつただろうし、私がこんな苦勞をすることもなかつたわよ」

また始まつた姉さんの繰言を、私はうんざつした気持ちで聞き流していました。思えば昔から、姉さんは愚痴っぽく、僻み根性の強い人でした。胸の内はどうあれ、不平不満など一度も聞いたことのない母とは正反対です。

「おふくろの心残りは、俺じゃないよ」

言いやまぬ玲子姉さんを遮り、彰一兄さんは口を開きました。

「俺じゃないんだ……」

自分に言い聞かせるように、繰り返します。

「どうしてそんなことがわかるのよ。一十年間、一度も顔を見せなかつたくせに！」

呴きつけるような激しい口調で、玲子姉さんが詰め寄ります。

「お母ちゃんのことなんて何も知らないくせに。兄さんへの恨み言じやないなら、何だと言つのー！」

姉さんの詰問に、彰一兄さんはどう答えようか考えるようになじを噛みました。かれの視線が、ちらりと座敷の片隅に向けられます。まるで、そこにいる母を気に懸けるようになじ。

「もう、言つてもいいだろ？」

それは、誰に向けて発した言葉でしょうか。答えを待たず、彰一兄さんの目が私たちを見据えます。

「おふくろが案じていたのは、ただ霧乃富家の名誉でしかない」

「……？」

意味がわからず、私と玲子姉さんはぽかんと口を開けたまま絶句しました。彰一兄さんの言つことは、あまりに漠然としています。

「どういう意味？」

何かを察したのか、玲子姉さんは先ほどとは打って変わった静かな口調で尋ねました。

「『赤マント』は知っているか？」

彰一兄さんの話は、どこに向かっているのでしょうか。私と姉さんは、互いに怪訝な顔を見合わせます。

『赤マント』 それは、このところ新聞を賑わしている、帝都に出没する誘拐犯のことでした。裏地が真っ赤なマントを羽織り、若い女性ばかりをかどわかす。しかも連れ去られた女性は、誰ひとり見つかっていないのです。

「もちろん知っているわ」

姉さんの答えに、私も頷きます。

「それじゃあ、『赤マント』の正体が亮平さんだとは？」

「！」

一瞬、彰一兄さんの言っていることが、み込めず、私と姉さんは言葉を失いました。

「何を……言っているの……？」

泣くとも笑うともつかぬ顔で、玲子姉さんは言いました。私も同感です。いつたい、何を根拠にそんなことを。

「ひどいじゃないの！ 葬儀の喪主を立ててもらえなかつたことを逆恨みして、そんなことを言うなんて！」

玲子姉さんは立ち上がり、烈火のごとく怒り狂いました。無理もありません。旦那を名指しで誘拐犯だと言われば、憤慨しないほうがおかしいでしょう。

しかし、彰一兄さんは黙つたまま、自らを落ち着けるように大きく息を吸い込みました。目の前に立つ玲子姉さんを見上げ、そのまま対峙するように立ち上がります。

「説明したところで納得しないだろ。ついてこいよ」

顎で障子の向こうを指し示し、手燭を取ります。今まで、どこかおどおどしていた兄さんの顔は、何かを思い詰めたような面持ちで

した。爛々たる眼光を放ち、口は真一文字に結ばれています。

私と玲子姉さんはその迫力に気圧され、言われるままに彰一兄さんの後に続きました。由希子ちゃんも何も言わず、当然のよう一緒にきます。

雨戸の閉められた、真っ暗な霧乃宮邸。闇の中を、兄さんが掲げる手燭ひとつを頼りに歩いていきます。風雨と轟く雷鳴はさらに激しさを増し、深い暗闇と相まって恐怖を覚えます。そんな私たちを嘲笑うかのように、踏みしめる床板は耳障りな音を立てて軋みました。

やがて辿り着いたのは、昨夜、由希子ちゃんが導いた使用人の部屋でした。

私は思わず睡を飲み込みます。ああ、やはりここには、何かが隠されているのです。

「ここは？ ねえ、この部屋に何があるの？」

再び苛立つた口調で問う玲子姉さん。それに答えたのは由希子ちゃんでした。

「女人人がね、助けてって言っているんだよ」

玲子姉さんは、まるで恐ろしいものでも見るかのように田を見開きました。心なしか、唇が震えています。しかし、由希子ちゃんは相変わらずにここにこと無垢な微笑みを浮かべるばかりです。

「香奈恵、ちょっとこれを持つていてくれないか」

彰一兄さんは私に手燭を渡しました。そして、どうするつもりなのか、畳を持ち上げます。

「ちょっと、何をするの？」

しかし私の問には答えず、彰一兄さんは三畳すべての畳を壁に立てかけました。すると今度は、畳の下にあつた敷き詰められた古紙を払いのけ、床板を剥がします。

「兄さん……」

意図が？ めず兄を呼びかけますが、それさえも答えてくれません。壁に屈折して映る影が、揺れる手燭の炎に合わせてざわめきます。

呆然とする私たちの前で、ついにすべての床板が端がされると、床下には地面の土が露わになりました。気のせいか、何となく湿っぽく、生臭い匂いがします。

「いい加減にしてちょうだい。こんなことをして、いつたい何だといつの！」

玲子姉さんは、ついに癪癩を起こして嘆きました。無理もありません。これのどこが、亮平さんと『赤マント』を結びつける証拠になるのでしょうか。

すると、彰一兄さんは驚くべきことを言いました。

「ここに、死体が埋まってる」

「え？」

私と玲子姉さんは、再び言葉を失いました。彰一兄さんの発した台詞は、まるで「ここに大根が転がっている」とでもいうような何気ない口調で、すぐにはその意味が理解できなかつたのです。

驚愕する私たちをよそに、今度は彰一兄さんは暗い床下に降り立ちました。しばらく地面をまさぐると、ビニにあつたのか、その手には大きなスコップが握られています。

何となく、かれのやうつとしていることを察した私は、恐怖に体が硬直していることを感じました。

田の前で、土が掘り返されていく。私と玲子姉さんは知らず知らずに手を取り合つたまま、事の成り行きを見守っています。

沈黙の中、突如轟く雷鳴。

一掘りごとに猛烈な異臭が漂い、胸苦しさが増します。緊張と相まって、互いに握りしめる掌には冷たい汗が滲みました。

どれだけの時間が過ぎたのでしょうか。実際には、短い時間のはずです。彰一兄さんが掘り起こした土は、それほど多くはなかつたのですから。彰一兄さんは掘るのをやめ、私を見ました。

「香奈恵、ここを照らしてこらん」

言われるまま、震える手で明かりを掲げます。土の中から出でた、？のように白いもの。しかしそれはあまりにありうべからざる

もので、一瞬、それが何かはわかりませんでした。先にその正体を知った玲子姉さんの口から、鋭い悲鳴が漏れます。次いで私もそれを理解し、思わず顔を背けました。

霧乃宮家の床下から出てきたのは、人間の手でした。腐り、所々朽ち果てた肉の合間から覗く白い骨。手は虚空を？むように天に伸び、指の先を蛆虫が這っています。目の当たりにしたのは一瞬なのに、あまりの衝撃にその映像はキネマのフィルムのように脳裏に焼き付いてしました。

「おそらく、行方不明になつている女性だろ？。この部屋だけじゃない。屋敷の床下には、まだいくつかの死体が埋められているはずだ」

「どうしてこのことを？」

私は袖口で口と鼻を押さえて尋ねました。

「昨日、由希子ちゃんが見た幽霊。それを追つてここまで来ただろ？　香奈恵が気を失つた後、俺は由希子ちゃんともう一度この部屋に戻つたんだ。見つけたのは、畳についた血の紙魚しめ。不審に思つて床をめくると、掘り起こしたあとがある。そのときは恐ろしくなつて、慌てて仏間に戻つたが……」

彰一兄さんは喋りながら、さらに土を掘り起こしました。今度は黒い髪が出てきます。

「何が埋まつているかはすぐに察しがついた。だが、どうして霧乃宮邸にこんなものが埋まつているのか、俺は一晩中ずっと考えていたんだ」

死体が埋まつていていたことをすぐに察したのは、兄さんも同じ経験があるからでしょう。私と玲子姉さんは何も言わず、彰一兄さんの話に聞き入つていました。

「香奈恵から聞いた、死の間際のおふくろの言葉。おふくろは、いつたい誰に『謀られた』のか。考えると、それは亮平さんしかいない。おふくろの行く末を決めたのも、霧乃宮邸に頻繁に出入りできるのも。亮平さんは、おふくろを看取る代わりに、霧乃宮邸を自ら

の欲望を満たす場所にした。かどわかした女性を人目につかぬこの家に連れ込み、死体は床下に埋める。もし、こんなことが世間に知れたら……それは、霧乃富家の体面を重んじ、屋敷を家名の象徴のように思つおふくろには耐えられなかつたんだろ？

「でも、それだつたらお母ちゃんは誰かに言つてくれればよかつたじやない。そうすれば、亮平さんの所業はすぐに明るみに出たわ。私だつて、たまには顔を出していたんだし」

私は言いながら、すぐに自分の発した言葉を後悔しました。どうして母がそうしなかつたのか。

彰一兄さんの悲しげな眼差しが向けられます。

「亮平さんは、きっと俺が親父を殺したこと知つているんだ」

「兄さん！」

いともあつさつ言い放つた自身の罪状に、私は思わず叫びました。玲子姉さんはめまぐるしく明かされる事実に思考がついてゆけないのか、呆然と立ちつくしています。

「これはあくまで俺の想像に過ぎないが、おふくろはずつと亮平さんに脅されていたんだと思つ。どうして親父が突然行方不明になつたのか、どうしておふくろは、ろくに捜そうともしなかつたのか。賢い亮平さんのことだ。ある日、親父は殺されたに違いないことに気づいたんだろ？ そして、それが誰の仕業かも。今さらとはいえ、俺が親父を殺したことは、決してばれてはいけない。おふくろは秘密を守つてもうう代わりに、ずっと屈辱に堪え忍んでいたんじゃないのかな」

「……」

私はどう答えていいのかわからず、押し黙つたままずつと手燭を掲げていました。玲子姉さんはわつと泣きながら、真つ暗な廊下をどこかへ駆けていきます。

おぞましさと裏腹に、床下に埋もれる死体から田が離れません。暗く、冷たい土の中に埋められて、どれほど苦しかつたことでしょう。昨夜、壁一面に現れた女の顔は、死してなお苦悶を訴えていた

のです。桜の木の下には、鬼と化した父がいます。人々の情念が織りなしてきた歴史ある旧家。霧乃富邸は、いつの間にか妖魔の巣窟となっていました。きっと、母の御靈も屋敷を彷徨つてゐることでしょう。

そして

慌ただしい足音ともに戻ってきた玲子姉さんを見て、私は思わずたじろきました。

振り乱した黒髪。大きく見開き、つつ上がつた目。唇には、狂気の笑みを浮かべています。

「姉さん……」

手には鈍色<sup>にびいろ</sup>に光る包丁を握りしめ、姉は夜叉の「」とき形相で立ていました。その顔は、死の間際の母にそっくりです。まるで、母が乗り移つたかのように。

「殺してやる」

ひどくしゃがれた声で、姉さんは言いました。

「こんな呪われた家系なんて、滅んでしまえばいい。とち狂つた両親と、人殺しの兄貴と夫。頭のおかしい私の娘！ みんな死んでしまええ！」

絶叫にも似た声を発し、玲子姉さんは包丁を振りかざしました。突然の事態に、私は？然とするばかりです。

「香奈恵、危ない！」

足がすくむ私に、鋭い刃が迫ります。悲鳴を発することも、目を瞑ることもできません。死を覚悟する」とれども、私はただ立ち尽くしていました。

しかし、姉さんが握りしめた包丁が私に届くことはありませんでした。危機を救つてくれたのは、彰一兄さんです。手についていたスコップを、玲子姉さんに叩きつけたようでした。

鈍い音が響き、時間が止まつたように姉さんの動きが止まります。やがて、ゆっくりと崩れ落ちる玲子姉さん。白目を剥いたまま仰向けに倒れた玲子姉さんは額から血を噴き、激しく痙攣していました。

口からは、血の泡と奇妙な音を発しています。

「兄さん……」

私はおののきながら、彰一兄さんを見ました。かれは信じられないといった面持ちで、殺してしまった玲子姉さんを見下ろしていました。由希子ちゃんが、「お母ちゃん、お母ちゃん」と泣きじやくりながら、骸にしがみついていました。

「終わりにしよう」

ぼつりと彰一兄さんは言いました。

「もう、終わりにしよう。建前に凝り固まつた霧乃富家の体面など、俺はうんざつだ」

かれが、ゆっくりと私を見据えます。その田の奥にある絶望の深さに、私は蛇に睨まれた蛙ながら、身動きひとつできません。今度は、私が殺されるのでしょうか。玲子姉さんと同じよう、私も頭を割られるのでしょうか。

しかし、彰一兄さんはそうする代わりに、私から手燭をひつたりました。そして、それを障子戸に投げつけます。

「兄さん、何を……」

驚く私の前で、今度は地面に転がる包丁を手に取つて血らの首に宛がうと、彰一兄さんは何の躊躇いもなくそれを一閃させました。噴き上がり、こぼれる血飛沫は、母の吐血と同じ紅椿のよづ。私は慌てて彰一兄さんを抱え起しました。

「兄さん……どうして……」

悲しみと憤りの涙が、？を云います。私の手から、彰一兄さんの命が流れていきます。

「済まない、香奈恵……玲子を、殺すつもりはなかつた……」

彰一兄さんは、すでに虫の息でした。

「親父を殺したことを、ずっと後悔してきた 罪を隠して生きてきたところで、凡庸な俺には、霧乃富家を再興することもかなわない。済まない……最初から、こつするつもりだつたんだ……おふくろには 悪いが……霧乃富は、俺の代で終わらせること……が……」

…

「兄さん、しつかりしてよ！ 兄さん！」

その最期に、霧乃富家を終わらせることが自分の責任だと言ったかつたのでしょうか。彰一兄さんは、泣きながら事切れていきました。しかし、私は悲しみに暮れる暇はありませんでした。兄さんが叩きつけた手燭の炎は、すでに手のつけようがないほどに燃え広がっていました。私はすぐに決断しました。

「由希子ちゃん、逃げるよ」

泣きじやぐる姪っ子の手を取つて、真っ暗な霧乃富邸を駆け出します。掘り起こした死体も、兄妹の骸も、どうすることもできませんでした。握りしめる由希子ちゃんの手のぬくもりが、ここが地獄ではないことと、私が確かに生きていることを実感させます。何も見えない暗闇。あつという間に充満する煙の中を、迷うことなく玄関に辿り着いたのは、ただ生まれ育つた家だったからという理由に他なりません。

逃げた先は、春の嵐が吹き荒れる夜の中でした。？を叩く雨に顔をしかめて振り返ると、屋敷の西側から赤い煙が立ち昇っています。霧乃富家の、最期です。

凍えるような寒さも忘れて、私は炎に包まれる霧乃富邸を見ていました。母の野辺と同じ、それは確かに霧乃富家の葬送であります。屋敷に巣くう亡靈は、これで浄化されるのでしょうか。父の怨念も、兄の悔恨も、姉の狂氣も。そして、誰かも知らぬ女の慟哭も。いえ、霧乃富の家名こそが、亡靈そのものだったのかもしれません。財産も人も失い、とつ々に抜け殻でしかなかつた霧乃富家そのものが。すでに命なき、仮初めの名家。そうして、それに執着し続けた母もまた、屋敷の中で鬼と戯れる亡靈だったのでしょうか。

燃えていく  
燃えていく。

ようやく途絶える、霧乃富の血。追憶の中にある家族の笑顔。確かにあつた栄華も、血の苦しみも煩悶も、すべて灰に帰していき

ます。

「由希子ちゃん？」

突然、燃えさかる屋敷に向かつて走り出す由希子ちゃんを見て、私は驚きの声を上げました。

「どこへ行くの？」

「まだ、お婆ちゃんが中にいるの」

にっこり笑つて、躊躇わざ灼熱の炎に入つてきます。

「待ちなさい、由希子ちゃん！」

しかし、私の声は届きませんでした。追いかけましたが、熱風が凄まじく、とても家には近づけません。すでに火の手は、屋敷全体に廻っていました。

「由希子ちゃん……」

母が、由希子ちゃんを呼び寄せたのでしょつか。盲目的に可愛がつていた、ただひとりの孫。

(……まあだ……ここに来ておらん者が……おる……)

死の間際に口にしたあの言葉。あれは、由希子ちゃんのことだったのでしょう。親からもないがしろにされる由希子ちゃんを、きっと母は心残りだったのです。

すべてをこんな運命に導いたのは、霧乃富紗江子その人だったのかもしれません。私は悲しみとも安堵ともつかぬ涙を流し、その場に崩れました。慟哭は風音に搔き消され、雨は血と泥を洗い流します。

「どうやら、遅かったようだネ」

聞き慣れたいやらしい声を耳にし、私はふと見上げました。激しい雨の中に立つてるのは、いつの間に駆けつけたのか、亮平さんでした。黒の洋装に帽子を被り、裏地が真っ赤なマントを羽織っています。

「困るネエ、燃えてしまつたとは。大切なものがたくさんあつたのに

そう言つて、じりりと私を見下ろします。私は泣くのも忘れ、恐

怖に震えて立ち上がりました。早く逃げたいのに、体が石のようになり固まつたまま動きません。

「香奈恵ちゃん、何か見なかつたかい？」

「い……いえ……」

ゼンマイ仕掛けのように、ぎこちなく首を横に振ります。それが、すべてを物語つてしまつたようでした。

「そうかネ。彰一君はともかく、香奈恵ちゃんだけは生かしておくれつもりだつたのにネ」

亮平さんが、嘲笑めいた声を上げて私に近づきます。これも、母の導いた運命なのでしょうか。霧乃富一族は、私の死を持つて完全に滅亡するのです。

天を焦がす炎の中に、墨染の桜が散つていきます。ふわりと現れた白装束の鬼が、私を見て笑つたような気がしました。

《了》

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

(編)

中盤以降に關しては「要件を満たした（＝きちんとした）小説記述」になつていて、この調子で」とお伝えいたします（十分におもしろく読めました。ほとんどの場合読むこと自体に苦痛を誘われる現実を考えると、これは相当に珍しいことです）。

ただ、いかんせん作品冒頭の「基本情報の提示」の部分がいだけず、それゆえに、本作は大きな不利を背負つてしまつたのではないかと想像します。

要は「落ち着いて時間を経過させること」、これに 느낌あるようですね。実際、それが実行されるようになった中盤以降は、話の展開にいたさかの唐突さを感じつつではありますが、十分な興味を持続し

たまま読み進められました。

作品冒頭での情報の整理、そして「潔也」に目を向けることができれば、常に一定の結果を得られるようになるのではないかと感じました。

最初は鼻についた「です・ます調の美文描写」も、「小説の要件を満たした書き方」になつてからは、さほど氣にならなくなりました（一定の効果を上げていると感じました）。

ただ、この「自然・外界描写を多用したしつとりした文体」と「最後に明らかになる激情（＝死への衝動）と獵奇性」とがうまくない印象も誘われました。「作品内容と文体との整合性」の部分で、再確認が必要ではないでしょうか。

キャラ設定／キャラ立ての部分については、正直まだ弱いと感じます。「知的ハンデのある美少女」は「十分に立つたキャラ」と言えます。どういうわけか、作業者は三吉彩花ちゃん（『熱海の捜査官』での東雲麻衣ですね）の姿を思い浮かべました。が、それ以外、すなわち主人公の「自我／現実認識／価値観」の部分や、「実はシリアル・キラーだった義兄の内面」には、まだきちんと目が向けられていないように思えます。

キャラは立つていますが、「知的ハンデのありようを十分取材されただろうか」との一撃の不安は誘われました。応募先を非ラノベとする場合には、そのあたりへの留意が必要となつてきます。

キャラ立てとも関連しますが、「さらに生きたセリフを」と考えてみてください。「小説の要件を満たしたやりとりを成立させられるレベルのセリフ」ではあっても、「誰でもが書けるわけではない、作者ならではの言葉のセンス」は「これは「凝つた、気取ったセリフを書け」という意味では決してないのですが、まだ十分示さ

れていないと感じます。「『その場』に立ち会つて、キャラたちの内面を十分にプロファイリングする」「『自分は他人にこんな言葉を掛けたい／掛けられたい』といったセリフへのこだわりを日常の中でも意識してみる」などが観点になると思います。

この主人公は最後に殺害されたのでしょうか？　だとすると、本作は「死者（の靈？）による一人称」となりますが……。まあ、ラノベ系ならまったく問題になりませんが、応募先が一般賞だと戸惑いを誘うのもかもしれません。

何箇所かある「自分の表情は　になつてゐるに違ひない」との記述から、「一人称の特性をきちんと研究・理解されているな」と感じました。

「義兄が屋敷を欲しがるのはなぜか＋怪奇現象の原因は？」が「読み進めさせるための牽引装置」となっているのは文句なしに納得できますし、由希子の一時的失踪の際に赤マント事件が語られるのも定石と言えます。ただ、最終盤での「彼が赤マントだ」は、いさか唐突なのではないでしょうか。また、これは身も蓋もない話になりますが、作品の本筋を赤マント事件に絞るのであれば、実兄の出奔も母の死も、実は重要でなくなります。例えば『専制的な華族の屋敷に住み込む身寄りのないメイド／同じように虐待される知的障害者の娘／薄幸な一人の美少女の交流／毎夜繰り返される家主夫婦の不審なようす』などを基本構成要素としても、最後の獵奇性に持つていけるようを感じるのでです。そこに、現状の本作では明らかに不足していると感じられる「大正時代を彷彿とさせる風俗・小道具・言葉遣い」などの諸要素を織り込めば、言つまでもなく立派な「ゴシック・ミステリー」になり得ます（まあ、作業者が書いたとしたら、同じゴシックでも「ゴシック・Hロ」になつてしまいそうですが 笑）。

これも「そもそも論」ですが、主人公を含む主要キャラの名前が香奈恵にしろ由希子にしろ 現代的すぎるのです。

冒頭部分での書き込みでもお伝えしましたが、応募作へのルビ振りはやはり不要と感じました。

前回報告書でお伝えしているため最後になりましたが、記述面についてまつたく問題ありません。「水準を明らかに上回るレベル」と断言するじだいです。

ま）ありがとうございました。編集者様はかなり気遣いの行き届いた言い回しのため、褒められた部分もあるような気もするのですが、はつきり言つてしまつと、  
・前半部分は話にならない。  
・中盤以降はようやく小説の形になってきた。  
・けれども独自の価値観を打ち出せるような人物の造形ができるいないため、一步抜け出すレベルには達していない。  
ということだと思います。目標とする「上位五パーセントに位置する書き手」になるにはまだまだですね。

最後に少し言い訳をさせてもらうと、

「この主人公は最後に殺害されたのでしょうか？」  
書き方がまずかったのかな。一応、最後まで死んでいません。（この後に殺害されます）ですから「幽霊の一人称」ではありません。  
「主人公を含む主要キャラの名前が 香奈恵にしろ由希子にしろ 現代的すぎるようです。

ま、まさか拙作のキャラの名前がDQNネームに該当するなんて

……！（『キャラクターのDQNネーム』に「時代にそぐわない名前」を追加しよう）やはり何の知識もないのに、調べもせず想像だけで書いてはいけませんね。

今回もとても勉強になりました。次回はもう少し成長した姿を見せてみるよ、精進します。

## 第一十一回 円城寺まひかをフルボッロー（『霧乃宮一族の滅亡』批評公開）

次回、「悪文排斥」最終回です。

編集者様との課外授業として、「魅力的なキャラを描くには」。これをテーマに、小説の上達方法を考察します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2128s/>

---

円城寺まどかの悪文排斥！

2011年12月21日12時56分発行